

柏原市

# 船 橋 遺 跡 IV

一大和川改修（高規格堤防）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

財團法人 大阪府文化財センター



第4面 飛鳥時代の掘立柱建物



飛鳥時代のガラス小玉鋳型

## 序 文

船橋遺跡は、大阪府の東南部の藤井寺市と柏原市に跨って所在する縄文時代から中世にかけての複合集落です。当遺跡は、宝永元年（1704）の大和川付け替え工事によって南北に分断されており、河床部分より多数の遺構・遺物が出土したことによって古くから注目されてきました。地形環境としては、石川と大和川の合流地点からやや西に位置する沖積低地上に立地し、その範囲は、南北1.2km、東西1.3kmにおよびます。今回の調査地は、遺跡範囲のはば中央部、大和川の右岸に位置しております。

本事業は、平成7年度以降継続的に実施されているもので、当財団としては平成7・8年度と12年度に対岸の大和川左岸での調査を実施し、その成果は『船橋遺跡』・『船橋遺跡Ⅱ』として刊行しております。また、これに加えて、今回の調査地西側に隣接する地点では平成14・15年に調査を実施し、『船橋遺跡Ⅲ』として、計3冊の発掘調査報告書を刊行しております。本書は、それに続く4冊目の発掘調査報告書になります。

今回の調査では、主に、飛鳥時代の掘立柱建物で構成される居住域を確認することができました。また、これに伴い、ガラス小玉鋳型をはじめとする工芸製品の製作に関連する遺物も出土しております。こうした成果は、平成14・15年度に実施した発掘調査の成果を追認・補強するものであり、当遺跡における飛鳥時代集落の性格を考える上で、極めて重要な成果となるものです。

最後に、調査に際して、国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所ならびに柏原市大正地区自治会、大阪府教育委員会、柏原市教育委員会をはじめとする、関係者の方々のご指導、ご協力に感謝申し上げるとともに、今後とも当センターの埋蔵文化財調査事業に一層のご理解とご協力をお願いする次第であります。

平成20年7月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野正好

## 例　　言

1. 本書は、大阪府柏原市大正2丁目地内に所在する船橋遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は大和川河川改修（高規格堤防）事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財團法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 発掘調査・遺物整理に関わる受託契約期間および調査体制については以下のとおりである。調査・遺物整理に当たっては、隨時当財團職員の助言・協力を得た。

### 〔発掘調査〕

船橋遺跡（高堤2-2）　発掘調査（01-2調査区）

受託契約名 大和川改修（高規格堤防）事業に伴う船橋遺跡発掘調査（その2）

受託契約期間 平成13年3月6日～平成14年3月29日

調査体制 調査部長 井藤 徹 調整課長 赤木克視

南部調査事務所長 潟川 健

調査第三係長 寺川史郎 技師 岡本茂史 専門調査員 中村ますみ

船橋遺跡（高堤その5）　発掘調査（07-1調査区）

受託契約名 大和川改修（高規格堤防）事業に伴う船橋遺跡ほか発掘調査（その6）

受託契約期間 平成19年5月24日～平成20年3月10日

調査体制 調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘

南部調査事務所長 大野 薫

調査第三係長 森屋美佐子 技師 正岡大実 専門調査員 佐藤由美

### 〔遺物整理〕

船橋遺跡遺物整理

#### 〔平成19年度〕

受託契約名 大和川改修（高規格堤防）事業に伴う船橋遺跡ほか発掘調査（その6）

受託契約期間 平成19年5月24日～平成20年3月10日

調査体制 調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘

南部調査事務所長 大野 薫

調査第三係長 森屋美佐子 技師 正岡大実

専門調査員 佐藤由美（平成20年2月まで）

#### 〔平成20年度〕

受託契約名 大和川改修（高規格堤防）事業に伴う船橋遺跡遺物整理

受託契約期間 平成20年4月2日～平成20年7月31日

調査体制 調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘

南部調査事務所長 大野 薫

調査第二係長 森屋美佐子

4. 本書で用いた現地写真は調査担当者が撮影した。また、遺物写真の撮影に関しては、南部調査事務所 副主査 立花正治が担当した。

5. 調査にあたっては、以下の諸機関・諸氏よりご協力・ご教示を得た。記して感謝の意を表したい。

(敬称略・順不同)

国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所・柏原市教育委員会・大阪府教育委員会・大正地区自治会

小倉徹也・桑野一幸・積山 洋・藤田徹也・山上 弘・山田幸弘

6. 本書の執筆・編集は、正岡・森屋が担当した。

7. 本調査に関わる出土遺物・実測図・写真・カラースライド・デジタルデータ等は財團法人 大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

## 凡　　例

1. 調査にあたっては、国土座標軸（使用測地系「世界測地系2000」）第VI座標系を基準にした。

2. 発掘調査および遺物整理については、『(財)大阪府文化財センター 遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003）の内容に準拠して行った。

なお、その詳細については第Ⅲ章に記述している。

3. 本書に掲載した遺構図に付された方位は、すべて国土座標に基づく座標北を示している。なお、座標北を基準とした場合、遺跡周辺の磁北はN 6° 27' Wに、真北はN 0° 13' Eに偏位する。

また、遺構図に記載した座標値はmで表示している。

4. 標高については、すべて東京湾平均海面（T.P.）+値を使用しているが、本文の記述では、特に断りのない限り「T.P.+」の記載を省略している。

5. 遺構番号は、遺構の種類とは関係なく、調査時において検出順に付与した1からの連番号であり、遺構の種類の前にアラビア数字の番号を付して「10土坑」などと表記した。

また、掘立柱建物や杭列など、複数の遺構から構成される遺構については、「掘立柱建物1」のように遺構番号と遺構の種類を逆転させて表示している。

6. 各種遺構・遺物の記述に当たっては、規模等の数値について、遺構がm単位、遺物がcm単位を基準としている。なお、それぞれの数値については最小で小数点第2位までの表記としている。

7. 遺物番号は、挿図を基準とする通し番号で、写真に関しては、挿図番号と同一の番号を記載している。

8. 本書に掲載した遺物実測図の縮尺は、土器類を4分の1とし、鉄器・石器は2分の1、木器は8分の1を基本としたが、各遺物の寸法に応じて適宜縮尺を変更した。

遺物写真に関しては、縮尺は任意である。

9. 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄編（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修）の『新版 標準土色帖』2003年版を基準としている。

10. 遺構挿図に関しては、イラストレーターCS2で作図を、遺物挿図に関しては、從来どおりの版下作成を行っている。なお、報告書の編集は、インデザインCS2で行っている。

# 本文目次

## 卷頭図版

序文

例言

凡例

目次

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査・整理作業の経過	2

## 第Ⅱ章 位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5

## 第Ⅲ章 調査の方法

第1節 現地調査	7
第2節 整理作業	7

## 第Ⅳ章 調査の成果

第1節 基本層序	9	
第2節 検出遺構と遺物	13	
1. 第1面	2. 第2面	3. 第3面
4. 第4・4 b面	5. 第5・5 b面	6. 第6面

## 第Ⅴ章 総括

第1節 遺構の変遷	70
引用・参考文献	74

遺物観察表	75
-------	----

## 写真図版

## 報告書抄録

## 挿図目次

- 図1 調査地位置図  
図2 調査区配置図  
図3 船橋遺跡周辺の地形環境  
図4 船橋遺跡周辺の遺跡分布図  
図5 地区割  
図6 07-1 調査区土層断面図  
図7 01-2 調査区土層断面図  
図8 第1面 平面図  
図9 第2面 平面図  
図10 第2面検出遺構 第1～2層・  
第1～5層 出土遺物  
図11 第3～5層 出土遺物  
図12 第5層 出土遺物  
図13 第4・5層 出土遺物(1)  
図14 第4・5層 出土遺物(2)  
図15 第3面 平面図  
図16 第3面 109溝・110溝 平・断面図  
図17 第3面 110溝 出土遺物(1)  
図18 第3面 110溝 出土遺物(2)  
図19 第3面 109溝 出土遺物  
図20 第3面 245集石土坑 平面図  
図21 第3面 土坑 平・断面図(1)  
図22 第3面 土坑 平・断面図(2)  
図23 第3面 249土坑 出土遺物  
図24 第3面 溝・土坑 出土遺物  
図25 第4・4b面 平面図  
図26 第4面 掘立柱建物1 平・断面図  
図27 第4面 掘立柱建物2 平・断面図  
図28 第4面 掘立柱建物3 平・断面図  
図29 第4面 掘立柱建物4 平・断面図  
図30 第4面 掘立柱建物5  
杭列1～3 平・断面図  
図31 第4面 掘立柱建物6 平・断面図  
図32 第4面 掘立柱建物 出土遺物  
図33 第4面 溝 断面図  
図34 第4面 溝 出土遺物  
図35 第4面 171溝 平・断面図  
図36 第4面 171溝 出土遺物  
図37 第4面 137廃棄土坑 平・断面図  
図38 第4面 137廃棄土坑 出土遺物  
図39 第4面 2廃棄土坑・162土坑  
平・断・立面図  
図40 第4面 2廃棄土坑 出土遺物(1)  
図41 第4面 2廃棄土坑 出土遺物(2)  
図42 第4面 2廃棄土坑 出土遺物(3)・  
162土坑 出土遺物  
図43 第4面 土坑 断面図  
図44 第4面 土坑 出土遺物  
図45 第5・5b面 平面図  
図46 第5面 土坑 断面図  
図47 第5面 41土坑・第5～7層 出土遺物  
図48 下層確認調査平面図  
図49 遺構変遷図  
図50 飛鳥時代における居住域の展開

## 表目次

- 表1 遺物観察表(1)  
表2 遺物観察表(2)  
表3 遺物観察表(3)  
表4 遺物観察表(4)  
表5 遺物観察表(5)  
表6 遺物観察表(6)  
表7 遺物観察表(7)  
表8 遺物観察表(8)  
表9 遺物観察表(9)  
表10 遺物観察表(10)  
表11 遺物観察表(11)  
表12 遺物観察表(12)

## 写 真 図 版 目 次

### 図版1 基本層序

1. 1区 基本層序 第1～7層
2. 3区 基本層序 第1～7層
3. 01～2区 基本層序 第7～8層

### 図版2 第3面

1. 1区 全景
2. 2区 全景
3. 3区 全景

### 図版3 第3面

1. 2区 遺物出土状況
2. 1区 106土坑遺物出土状況
3. 2区 110溝遺物出土状況
4. 2区 110溝断面
5. 3区 245集石土坑検出状況
6. 3区 249落ち込み検出状況
7. 3区 239土坑検出状況
8. 3区 239土坑ガラス小玉鋳型  
出土状況

### 図版4 第4面

1. 1区 全景
2. 2区 全景
3. 3区 全景

### 図版5 第4面

1. 1区 掘立柱建物5検出状況
2. 238柱穴断面
3. 116柱穴断面
4. 124柱穴断面
5. 126柱穴断面

### 図版6 第4面

1. 2区 掘立柱建物2検出状況
2. 111柱穴断面
3. 152柱穴断面
4. 209柱穴断面
5. 167・153柱穴断面

### 図版7 第4面

1. 3区 掘立柱建物4・6検出状況
2. 257柱穴断面
3. 252柱穴断面
4. 304柱穴断面
5. 307柱穴断面

### 図版8 第4面

1. 01～2区 掘立柱建物1検出状況
2. 01～2区 全景

### 図版9 第4面

1. 掘立柱建物4-158柱穴断面
2. 掘立柱建物4-282柱穴断面
3. 掘立柱建物4-278柱穴断面
4. 掘立柱建物4-279柱穴断面
5. 229土坑断面
6. 230土坑断面
7. 掘立柱建物3-199柱穴断面
8. 263土坑断面

### 図版10 第4面

1. 2廃棄土坑遺物出土状況
2. 137廃棄土坑遺物出土状況
3. 162土坑遺物出土状況(1)
4. 162土坑遺物出土状況(2)
5. 171溝断面
6. 171溝遺物出土状況(1)
7. 171溝遺物出土状況(2)
8. 171溝遺物出土状況(3)

### 図版11 第5・5b面

1. 1区 全景
2. 2区 全景
3. 3区 全景

### 図版12 第5・5b面

1. 224土坑断面
2. 332土坑断面
3. 41土坑断面

図版13 第5・6面

1. 3区 第5面検出状況
2. 01-2区 第6面検出状況

図版14 包含層出土遺物

1. 第1～5層出土遺物
2. 第6・7b層出土遺物

図版15 第3・4面出土遺物

1. 第3面 110溝出土遺物
2. 第4面 171溝出土遺物

図版16 第4面出土遺物

1. 137廐棄土坑出土遺物（1）
2. 137廐棄土坑出土遺物（2）

図版17 第4面出土遺物

- 2 廐棄土坑出土遺物

図版18 第4面出土遺物

- 2 廐棄土坑・162土坑出土遺物

図版19 第3・4面出土遺物

- 木製品（1）

図版20 第4面出土遺物

- 木製品（2）

図版21 第3・4面出土遺物

1. ガラス小玉鑄型
2. 棒状土製品

図版22 第4面出土遺物

- 輪羽口・鉛澤・埠状土製品

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

大和川は、奈良県より亀の瀬峡谷を通って石川と合流した後、西流して大阪湾へと注ぎ出る、大阪府で二番目に大きな河川である。この大和川は、1704年に現在の川筋に付け替えられた後も、洪水によつて大きな災害をもたらすことがしばしばあり、実際に1982年には集中豪雨による氾濫が起り、近隣に基大な被害をもたらしたことがある。

国土交通省ではこうした洪水灾害に対しての再発防止措置として、1987年度より東京・大阪の二大都市周辺を流れる6河川を対象に高規格堤防（スーパー堤防）整備事業を推進している。

高規格堤防とは、堤防の決壊による壊滅的な洪水被害から市街地を守るために、堤防外の市街地側に盛土を行つて堤防の幅を高さの30倍程度に拡張していくもので、同時に新たに河川区域に含まれることとなった堤防裏法部を「高規格堤防特別区域」として有効に活用し、環境と調和した安全で快適な都市整備を図っていくという目的も兼ねている。本計画は、大阪では淀川と大和川が対象となり、1988年度より国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所・大和川河川事務所によって事業が進められている。本計画は都市整備と一体のため、各事業は土地区画整理や市街地再開発事業、公共施設の建設・建替え、大規模工場・倉庫の移転・再開発など一定のまとまった土地が確保できた場合に行われ、大和川については「大和川改修（高規格堤防）事業」として両岸14地区の整備が計画・実施されている。

このうちの1つに柏原市大正地区があり、同地内に所在する国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所の敷地及び、それを含む約5000m<sup>2</sup>が防災拠点の整備と合わせて事業化の対象となつた。

この事業の対象区域は、周知の遺跡である船橋遺跡の中央部に位置していた。そこで、1999年に柏原

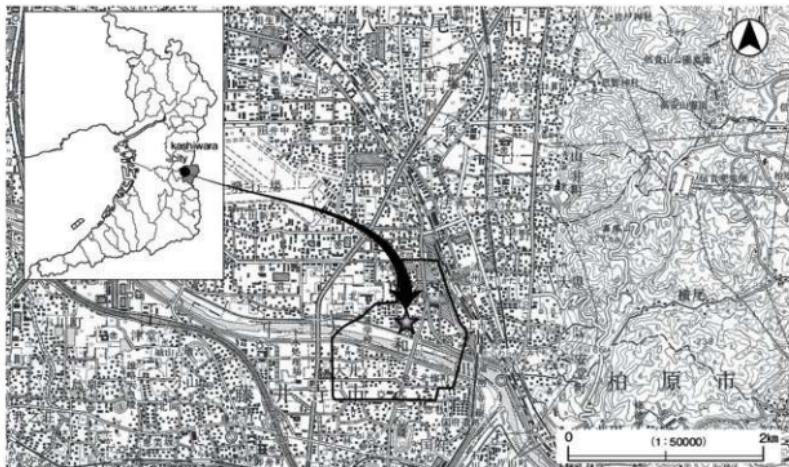


図1 調査位置図

市大正地区の大和川改修事業区域内における埋蔵文化財発掘調査に関する協議が、大阪府教育委員会と事業者である大和川河川事務所の間で交わされた。これを受け、2000年度より財團法人大阪府文化財センターが、府教育委員会の指導の下、国土交通省の委託を受けて発掘調査を担当することになった。

## 第2節 発掘調査・整理作業の経過

事業対象区域は約928m<sup>2</sup>を測り、そのうち約205m<sup>2</sup>については、01-2調査区として2001年度に調査を実施している（図2）。

01-2調査区の調査は、2002年2月9日から機械掘削を開始し、2月12日から人力掘削による遺構面の調査に着手、同年3月14日に調査を終了した。

07-1調査区の調査は、河川事務所旧庁舎北側の事業範囲内住居の基礎撤去・盛土除去作業終了後の2007年8月27日から機械掘削を開始し、同月30日から人力掘削に移行、同年12月10日に撤収した。既に調査の終了していた01-2調査区については、普通人力掘削として作業を進めた。

なお、01-2調査区では、調査区域内における遺構面の存否を確認すべく、鋼矢板を打設して地表下4mまで人力による掘削を実施し、遺構面の確認に努めた。その結果、顕著な遺構が確認されるのは、地表面下約1m前後に位置する绳文時代晚期～弥生時代前期にかけての地層までであることが想定できため、統く07-1調査区では該当地層までを調査対象として、調査を実施した。

以上の調査では、コンテナパッドに換算して約30箱に及ぶ遺物が出土し、2007年度調査の終了した12月から事業契約終了の2月までは、南部調査事務所古市分室において、報告書作成に向かって出土遺物の整理作業を行った。本事業では、現地で作成した遺構図面のトレース、特徴的な遺物の抽出・接合・復元並びに実測、各種台帳類の作成・整備を実施し、統く2008年度は、4月に報告書に掲載する遺構・遺物挿図のトレース・版下作成、遺物の写真撮影と遺構・遺物写真図版の作成、遺物の収納、報告書本文原稿の執筆をそれぞれ実施し、本報告書の刊行をもってすべてを終了した。

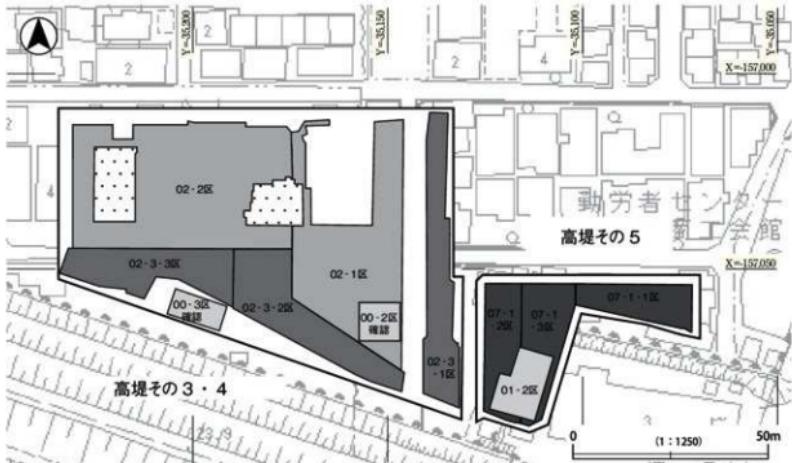


図2 調査区配置図

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

船橋遺跡は、柏原市域の南西部及び、藤井寺市域の北東部に位置する柏原市大正1～3丁目・古町1～3丁目、藤井寺市大井1～5丁目・北條町・船橋町及び川北2・3丁目に所在する縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。その範囲は南北約1.2km、東西約1.3kmに及び、今回の調査地は、すぐ南側を大和川が西流する遺跡範囲の中央部分に位置している。

遺跡は、北側に本郷遺跡、西側に川北・西大井遺跡、東側に安堂遺跡、南側に国府遺跡と隣接している。

本遺跡周辺の地形環境は、大きくは沖積平野に分類される。巨視的に見ると、調査地の東側には生駒山西麓の扇状地が展開し、南側には羽曳野丘陵・河内台地が広がっている。さらに、北側には石川と合流したのち、北西に向かって流れている旧大和川水系の中小河川によって形成された沖積低地が展開している。今回の調査地は、河内平野南部、羽曳野丘陵・台地の北方約1.4kmの沖積低地上に立地し、現状では後に形成された沖積層に覆われている。

調査地の標高は、現地表面で14.6～15.4mを測り、大きさは南から北へ緩やかに傾斜している。

なお、調査終了時の最終遺構面（弥生時代前期から中期初頭）の標高は、13.1m前後であることか

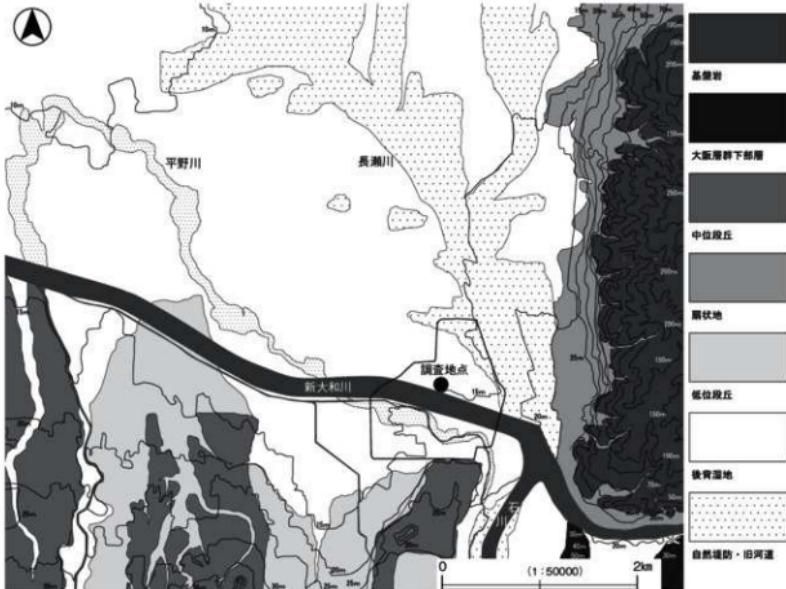


図3 船橋遺跡周辺の地形環境(別所2002を元に作成、一部改変)

ら、1.0～1.5mの沖積層および盛土がその間に存在していることとなる。さらに、01～2調査区で下層確認調査を行った際に、検出した河床面は10m前後であることから、河川堆積物によって最大で約3mの地層が堆積していることがわかる。

ところで、本遺跡が立地する河内平野は、旧大和川水系と淀川水系の大きく2つの河川によって形成され、海水準の変動によって当該平野の様相もめまぐるしい変化を遂げてきた。その変容の様子は、市原実・梶山彦太郎両氏によって明らかにされ【梶山・市原1986】、加えて近年、考古学的調査所見をもとに周辺地域の詳細な地形環境の復元も行われている【趙1995ほか、松田1999ほか、別所2002】。ここでは、そうした既往の成果も併せて、河内平野の動向を今回の報告に関連する部分について概観し、河内平野の中での本遺跡の立地環境を明らかにしておくこととする。

最終氷期の河内平野一帯には、古大阪平野と呼ばれる陸地が広がっていた。海水準は、現在よりも低く、汀線もさらに沖合にあった。本遺跡の位置する地点も、南方から伸びてくる洪積段丘の縁辺に位置しており、人間活動の痕跡を留める陸生化した土地であった。

縄文時代前期頃、いわゆる縄文海進を迎える上町台地の北端が開口すると、汀線は河内平野に及んだ。海面は現在より約2m高くなったと言われており、生駒山西麓の扇状地まで汀線が来ていたことが、鬼虎川遺跡の海蝕崖の検出事例【松田ほか1999】など、いくつかの調査によって明らかにされている。

縄文時代中期頃の海退によって海水準の低下が起こると、旧大和川水系の諸河川の氾濫が活性化し、これらの河川が運んできた土砂によって難波累層上部の砂層堆積が始まる。また、上町台地の先端部には砂嘴が、淀川や旧大和川の河口には三角州が形成され始める。こうした地形発達の結果として、河内湾は河内潟へと変貌を遂げる。本遺跡の所在する羽曳野丘陵・河内台地の先端部分では、旧大和川水系に属する古平野川や石川の支流である大乗川などによって形成されたとみられる大規模な洪水砂がしばしば認められ、その後の地形環境に大きな影響を与えていている。

その後、淀川の三角州と上町台地先端の砂嘴のさらなる発達によって、大阪湾と河内湾（潟）の境はさらに狭くなり、河内平野部分の水域は、海水と河川の淡水とが混在する汽水域に変容し、その後、淡水化することによって、河内湖となった。

縄文時代晩期になると湖水準は再度低下し始める。この湖水準の低下によって、低地部に位置する河川は湿地を掘り込むようにして流れ、河川周囲への土砂の堆積は減少した。一方、河川の上流域では、砂礫が頻繁に運ばれて堆積が進んだ。縄文時代晩期末頃には湖水準が上昇し、流れる場所を失った流路も頻繁に氾濫を繰り返したとみられている。このような湖水準の昇降は、弥生時代後期頃まで幾度か起きたものとみられており、今回の調査でも認められたような大規模な洪水堆積物は、こうした時期の所産であると考えられる。このように大阪湾との境が閉ざされたことによって排水が悪化すると、河内湖に注ぎ込む河川はしばしば氾濫を起こし、河内湖はさらに埋積されていった。

古墳時代中期頃には、河内湖の排水を良くするために、砂嘴を東西に横切る水路（難波堀江）を掘削したとする記事が『日本書紀』に記載されている。

古代末から中世にかけて、旧大和川水系は、いくつかの人工的な堤の築堤や上流域の開発行為などによって次第に天井川化し始め、頻繁に大規模な氾濫を起こすようになる。特に、生駒山西麓域の扇状地付近では度重なる洪水によって壊滅的な被害を被っており、中世後期から近世にかけての頻発する水害の惨状はいくつかの文献にも記載されている。こうした事態を収束する解決策として、18世紀初頭に大和川の付替え工事が行われ、現在の河内平野の姿が形成された。

## 第2節 歴史的環境

本遺跡が立地する河内平野南部には多数の遺跡が存在し、かつそれらの考古学的な調査成果について重要なものが数多い。本節では、船橋遺跡に近接する遺跡の各時期における動向を概観しておく。

**旧石器時代** 河内平野周辺で人の営為が確認できるのは、後期旧石器時代からである。当該期の遺跡としては、国府型ナイフ形石器の名祖として名高い国府遺跡のほかに、八尾南・長原・瓜破・山之内・はざみ山遺跡がある。いずれも段丘上、あるいは台地上から見つかっている。

**縄文時代** 海水準の変動に伴って、河内平野の様相がめまぐるしく変化することは、前節においてみたとおりである。

縄文時代前期には、生活の場が河内湾周辺にまで及ぶ。生駒山西麓の扇状地上には、恩智・馬場川・繩手遺跡、上町台地の東側線部には、森之宮遺跡で貝塚が形成される。石川と大和川の合流地点付近の船橋遺跡では、縄文時代晚期末の標式資料が出土し、その南側には国府遺跡がある。河内平野では、縄文時代晚期と弥生時代前期の土器が共伴する若江・美園遺跡が知られている。

**弥生時代** 弥生時代には、遺跡数は急激に増加する傾向にある。生活の場は、前時代までの生駒山西麓の扇状地上や羽曳野丘陵や河内台地周辺にとどまらず、河内平野上に及ぶようになる。

弥生時代前期には、水稻耕作の導入に伴い、低地に進出した集落が、旧大和川の諸流路の形成した微高地や自然堤防上に立地するようになる。弥生時代前期の古段階には、若江北・山賀・八尾南遺跡があり、中段階から新段階にかけては、美園・亀井・長原・瓜破・跡部・中田・田井中・久宝寺遺跡などがある。

弥生時代中期には、湖水準の上昇に伴って、新たに瓜生堂・巨摩・加美・東郷・小阪合・東弓削・弓



図4 船橋遺跡周辺の遺跡分布図

削遺跡が認められる。また、前代より継続する遺跡である亀井遺跡では、集落の拡大化が認められる。

弥生時代後期には、自然環境が不安定となり、河川の氾濫が多く認められるようになる。周辺の遺跡では、弥生時代中期の遺構面を厚い洪水砂が被覆している事例が散見され、自然環境が不安定な状態にあったことが想定されている。こうした背景のもとに、各遺跡のあり様も環濠集落の解体に連動して、均質な小集落が点在する集落形態へと変容していくようである。

**古墳時代** 古墳時代前期には、河川が形成した微高地に集落が拡大・拡散して存在するようになる。

前期の遺跡としては、久宝寺・西岩田・瓜生堂・友井東・美園・亀井・加美・萱振・東郷・小阪合・中田・東弓削・船橋・八尾南・瓜破遺跡がある。久宝寺遺跡では準構造船が検出されており、当時の地形環境と水運の関係を知るうえで、重要な資料を提供している。集落数の急増する古墳時代初頭から古墳時代前期にかけては、出土土器にも、吉備・山陰・阿波・播磨・摂津・東海・北陸・南関東など諸地域の搬入土器が比較的多く認められ、当該期の集落のあり方を考えるうえで、非常に重要な情報を提示している。さらには、生駒山西麓の西ノ山古墳・花岡山古墳・向山古墳で形成される楽音寺・大竹古墳群・河内平野東南部で形成される玉手山古墳群などが造営される。

古墳時代中期には、南方の羽曳野丘陵を中心に古市古墳群が展開し、生駒山西麓では全長約160mの心合寺山古墳が造営される。平野部ではこうした大規模墳が営まれることはなく、加美・亀井・久宝寺・山賀・美園・長原遺跡など、弥生時代からの方形周溝墓に引き続き小規模な方墳を主体とする古墳群が造営されている。

古墳時代後期には、萱振・矢作・竹淵遺跡などで集落跡が見つかっているものの、全体の傾向としては減少する傾向にある。

**飛鳥・奈良時代** 飛鳥・奈良時代の集落としては、萱振・成法寺・東郷・久宝寺・太子堂・小阪合・中田・弓削・東弓削・長原遺跡が認められる。大和と難波津を結ぶ交通の要衝という側面も併せ持つ当地域では、仏教文化の受容も早く、多くの氏寺が建立された。

**平安時代** 小阪合・中田・東弓削遺跡などで生産域の拡大が行われ、農地の開発が活性化したことが、周辺域の調査で判明している。近年まで、その姿を留めていた条里制地割の施行時期も、平安時代前期頃に廻るものと考えることができる。

なお、船橋遺跡周辺では、こうした条里地割に基づく開発行為はやや遅れ、次代の平安時代末から中世にかけて行われているようである。

**中世** 中世前期の集落としては、萱振・佐堂・小阪合・中田・矢作・長原・久宝寺・津堂・八尾南遺跡がある。当該期の集落は、条里区画に基づくものや奈良街道・長尾街道などの主要街道、寺社の周辺で成立するものが多い。

中世後期にかけては、当該地域が南北朝期の動乱以後、戦国時代末期の織田氏による近畿統一までの間、戦乱の渦中にあったことを示すように、集落の減少が顕著に認められる。

当該期の遺跡としては、若江・萱振・東郷・亀井遺跡などがあり、いずれも防御機能を目的として形成されたと考えられる集村形態をとっている。

**近世** 農地の拡大とそれに伴う連続堤の築堤を要因として、旧大和川水系の諸河川は天井川化し、しばしば大規模な氾濫を起こして、河内平野の諸集落に甚大な被害を与えていた。これを解消するため、今米村の庄屋中甚兵衛らの尽力によって、宝永元年（1704）に大和川の付替え工事が行われ、現在にいたる。

## 第Ⅲ章 調査の方法

### 第1節 現地調査

発掘調査の実施に当たっては、2003年刊行の『(財)大阪府文化財センター 遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』にしたがって行った。しかしながら、2001年度の調査は、同マニュアル刊行以前であるため、当センターが從前に定めた1988年刊行の『(財)大阪文化財センター 遺跡調査基本マニュアル』に基づいている。新旧マニュアル問には、調査区の呼称方法や地区割りなど、いくつかの根幹部分で違いがあるが、本報告書の刊行に伴い、新マニュアルにしたがう形で統一を図っている。

調査箇所の呼称については、受託年度（西暦下2桁）－発注番号（発注順）を組合せて表記する原則に基づき、07－1調査区と呼称し、さらに必要に応じてトレンチ名を付した。このうち、01－2調査区については、現地調査開始年度に調査着手順を枝番号として組み合わせる呼称法に替っている。

調査地の地区割については、国土座標を利用し、第VI座標系に基づく地区割によっている（図5）。

なお、2002年の4月に、旧国土座標系から世界測地系（測地成果2000）への変換があった。01－2区については旧座標系に基づいた調査を実施しており、今回の報告書刊行に伴い、座標値を変換して対応した。これに準じると今回の調査地の第I・II区画上の位置はF 6－15となる。ちなみに、この第I・II区画は調査地内では変化しないため、以後の報文中で用いる際には省略している。遺物の取り上げもこの世界測地系に即しており、取り上げ区画には最小単位を10mとする第IV区画までを用いた。

水準は、全国的に共通の基準となっている東京湾平均海水位（T.P.: TOKYO PEIL）を用いている。

遺構面及び遺構・遺物の実測に関しては、必要に応じて個別に手書きによる平・断・立面図を作成したが、基本的に縮尺100分の1の平板測量を行い、遺構分布が密な場合や微細な地形復元が必要と判断された遺構面については、レッカによる空中写真測量で50分の1の平面図を作成した。また、この空中写真測量は、01－2区では第4・5面の2面、07－1区では第4面について実施している。

なお、01－2区の調査では、断面観察によって遺構・遺物の存在が予想された土壌化層を基準に、第1～第6面の8遺構面について調査を実施し、遺構・遺物の有無を確認した。この調査成果を受け、07－1区では、第1～第5b面までの7遺構面に限定して平面調査を実施した。

### 第2節 整理作業

現地調査で得た遺物は、土器・石器・木器などを合わせるとコンテナパッドに換算して約40箱を数えた。この中から重要と判断されるものについて約400点を抽出し、378点を実測した。また、これらの作業に併行して、報告書刊行後の遺物管理を効率的に行うため、FileMaker社のFileMakerPro6.0を用いて遺物データベースを作成した上で収納を行った。

なお、本報告書掲載の挿図類は、遺構図のすべてをAdobe社のWindows版PhotoshopCS 2を用いて図面の合成・調整を行い、同社のIllustratorCS 2を用いてトレース作業を行うという手順によって作成している。このほか、地形の微起伏を表現するための等高線などについては、現地調査の段階で作成した空中写真測量の成果であるデータ図面（DXF形式）を、AutoDesk社のAutoCad LT2007を用いて簡単な加工を施した後、Illustrator上において加工・調整を施して最終的な図面として用いている。

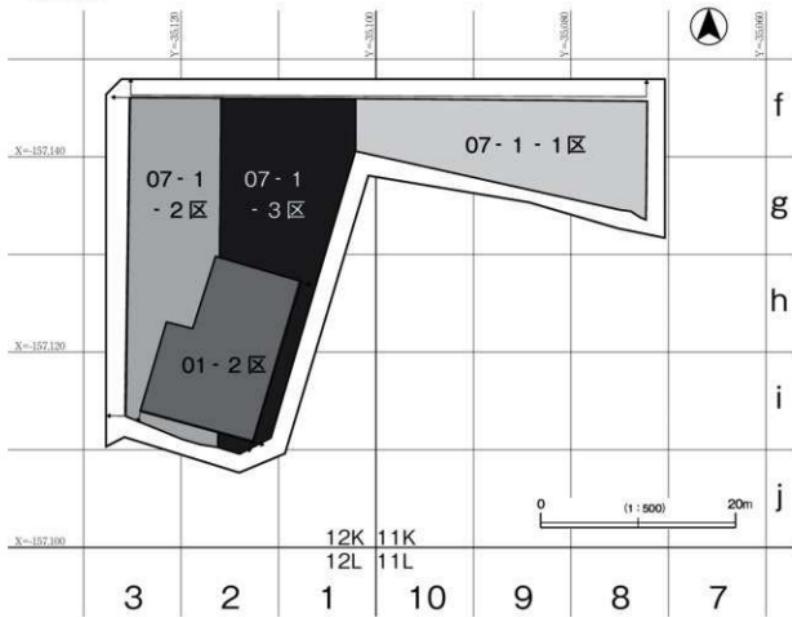
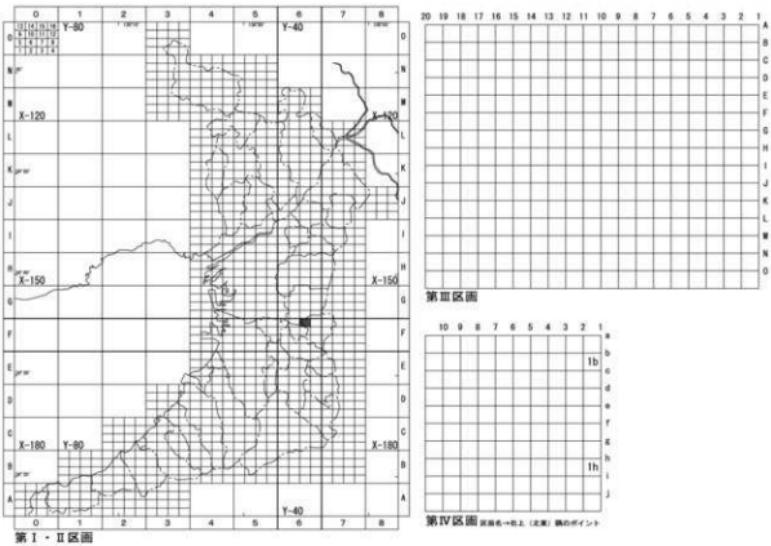


図5 地区割

## 第IV章 調査の成果

### 第1節 基本層序

既に述べたように、本遺跡は沖積平野に立地しており、地層の堆積によって遺跡が形成されている。現地調査では、これらの地層を1層ずつ除去することで遺構面を検出している。なお、2001年度に実施した01-1調査区では、下位の遺構面の有無を確認するため、地表下約4mまで掘削を行い、地層の観察・遺構面の把握に努めた。ここでは、その成果も併せて報告する。

**第1層** 黄褐色の細砂～極細砂である。層厚0.1m前後を測る。層中に2～3枚の層理面があることから、細分も可能であるが、一括して掘削した。マンガンが多く沈着する。

本層は包含される遺物から、近世～近代に形成された耕作土層と考えられる。

**第2層** 暗灰黄色の中疊混じり細砂～極細砂である。層厚0.1m前後を測り、部分的に2分ないしは3分される。層中にはマンガンが多く沈着する。

本層は包含される遺物から、近世に形成された耕作土層と考えられる。

**第3層** 暗灰黄色の極細砂混じり粘質シルトである。層厚0.1m前後を測る。弱く土壌化している。

本層は包含される遺物から、中世に形成された土壌化層と考えられる。

**第4層** 灰色の細疊～極粗砂混じり粘質シルトである。層厚0.1m前後を測る。土壌化が著しい。

本層は、地点によって後述する第5・6層の各層準と調和的に乱れる変形構造が認められた。この構造は、平・断面の観察から地震動によるものと推定でき、第4層の下面を上限としていたことから、第3層堆積以前に発生した地震による荷重痕跡とみることができる。この地震動の影響によって、遺構面の状態は良好ではなかった。

本層は包含される遺物から、古代～中世に形成された土壌化層と考えられる。

**第5層** 灰オリーブ色の粗砂混じり粘質シルトである。層厚0.1m前後を測る。部分的に2分されるが色調・粒径ともに近似する。弱く土壌化している。

本層は包含される遺物から、飛鳥時代～古代に形成された土壌化層と考えられる。

**第6層** 水成堆積物である第6b層と、それを母材とする土壌化層である第6層に2分でき、第6b層はさらに色調・粒径の差異から2～3層に細分が可能である。

第6層は、灰色の粘質シルトである。層厚0.15m前後を測る。土壌化が著しく、第6b層との層界は漸移的である。本層は包含される遺物から、飛鳥時代に形成された土壌化層と考えられる。

第6b層は、黄褐ないし暗オリーブ褐色極細砂混じり粘質シルトである。層厚は平均0.4mを測り、場所によっては0.6mを測る。包含される遺物は少ないが、上下の地層の関係から、本層は弥生時代前期～飛鳥時代に供給された水成堆積物と考えられる。

**第7層** 水成堆積物である第7b層とそれを母材とする土壌化層である第7層に2分できる。

第7層はオリーブ黒色の粘質シルトである。層厚は0.1m前後を測り、第7b層の供給が少なかつた箇所を中心に認められた。土壌化が著しい。第7b層との層界は漸移的である。包含される遺物は少ないが、本層は縄文時代晩期～弥生時代前期にかけて形成された土壌化層と考えられる。

第7b層は緑灰色の細疊混じり砂質シルトである。層厚は01-2調査区の調査成果から厚いところで

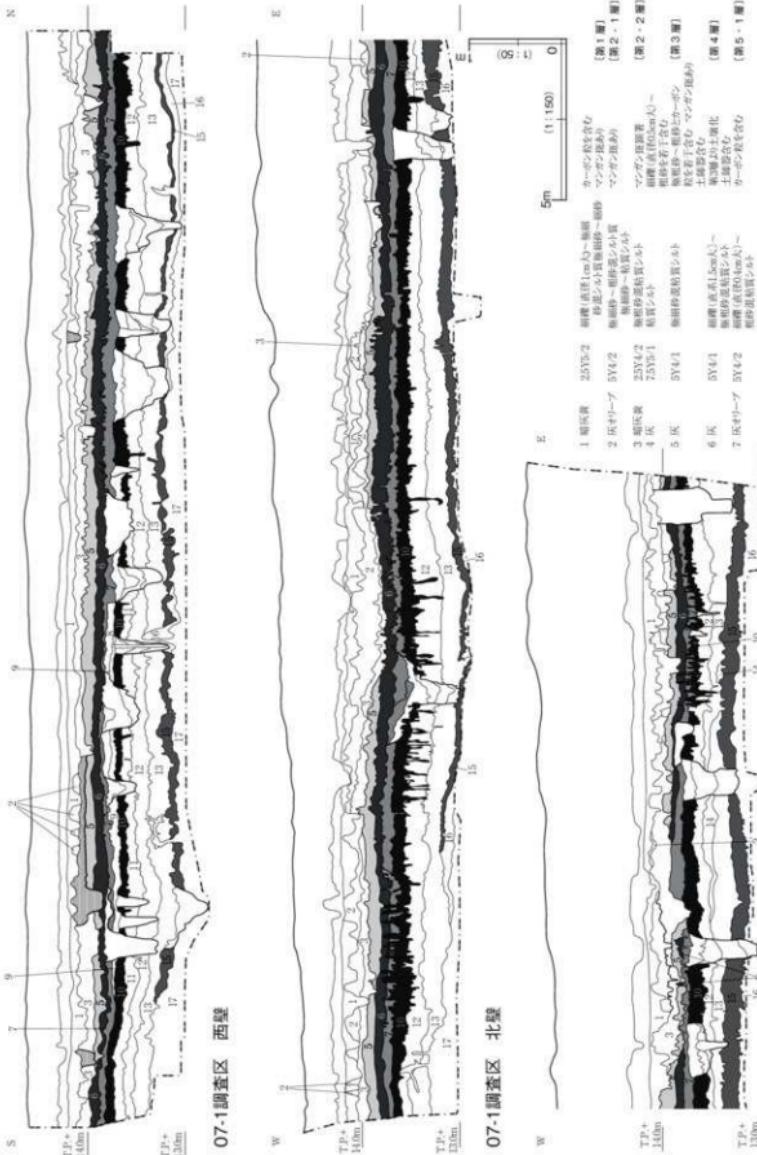


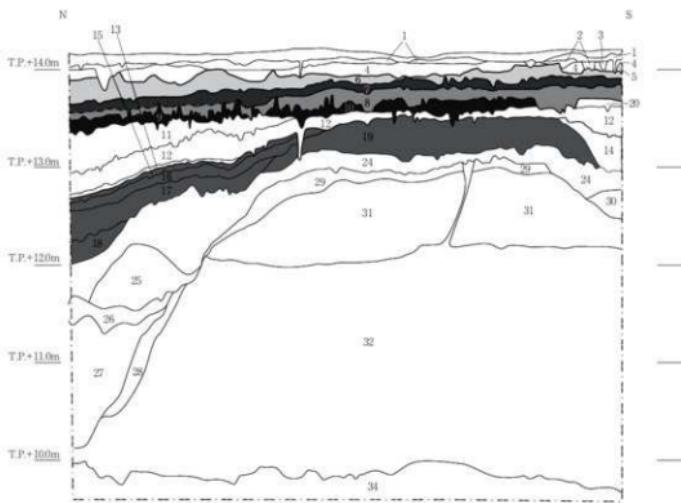
図 6 07-1 調査区 土層断面図

## [07-1 調査区 基本層序]

番号	色 調	粒 度	特 徴	層 名
8	灰オーリーブ 5Y4/2	中種（直径1cm大）～粗相続状 質シルト	暗灰黄 25Y4/2 粘質シルトのブロック（直径1cm大）を含む 層か？ カーボン粒を含む	[第5 [整地層]]
9	灰 5Y4/1	粘質シルト	中種（直径1.5cm大）～粗相続とカーボン粒を若干含む オーリーブ黒 5Y3/2 粘質シルトのブロック（直徑1cm大）若干含む	[第5・2層]
10	灰 5Y4/1	粘質シルト	粗相続～粗相とカーボン粒を若干含む マンガン抜あり 地面動の影響により、地層の変化が顕著、第5層を突き破り、第4層にまで達している箇所あり コンポリリユートミナ滋養者 フレア状に巻き上げている	[第6層]
11	暗灰青 25Y4/2	粘質シルト	下年に灰オーリーブ 5Y4/2 シルト質粗相～粗相のブロック（直径3 cm大）を含む カーボン粒を若干含む マンガン斑あり 灰 7.5Y4/1 粘質シルトで埋まつた植物生痕者	[第6 b - 1 層移層] [第6 b - 1層]
12	濃青色：暗オーリーブ灰 2.5GY4/1	上部：粘質シルト 下部：粗相質粗質シルト・粗粒を若干含む	2.5GY4/1 暗灰青 25Y4/2 シルト質粗相～粗相	マングン斑あり 灰 7.5Y4/1 粘質シルトで埋まつた植物生痕者
13	濃青色：暗オーリーブ灰 2.5GY4/1	シルト質粗相～粗相	マングン斑あり 灰 7.5Y4/1 粘質シルトで埋まつた植物生痕者	
14	オーリーブ黒 7.5Y3/2	粘質シルト～粗相粗質シルト	オーリーブ灰 10Y4/2 シルト質粗相のブロックを含む 上部弱く土壌化している 66.2mmのシルト質粗相～粗相のブロックと。節理の暗オーリーブ 2.5GY4/1 粗相粗質シルトのブロックを若干含む マングン斑あり	[第6 b - 3層] [第7層]
15	オーリーブ黒 7.5Y3/1	粗相粗質シルト	粗相を若干含む マングン斑あり 下年の砂紋は帶状に見られる ラミナあり	[第7 b - 1層] [第7 b - 2層]
16	暗オーリーブ灰 7.5Y3/2	無相粗質シルト～粘質シルト	無相粗質シルト～粘質シルト 粗粒（直徑0.4cm大） 粗相（直徑0.4cm大）～粗相粗の 砂紋層	[第7 b - 1層]
17	上手・覆瓦状：暗銀灰 3GY3/1 下手・微化強：黃青 25GY5/4			[第7 b - 2層]

## [01-2 調査区 基本層序]

番号	色 調	粒 度	特 徴	層 名
1	灰オーリーブ 5Y5/2	粗相の～中種（5mm大）混シルト 質粗相	4を材とする作土 砂紋を多く含む 粘性弱いが、1よりシルト質強 い	[第1層]
2	灰オーリーブ 5Y6/2	粗相～中種（5mm大）混粗相	微量のカーボン・使土粒含む 土壌化しているが、攪拌は弱い 粘性 弱い	[第1層]
3	淡黄 5Y8/3	粗相～中種（~14mm大）	泥炭堆積物	[第1 b 層]
4	オーリーブ灰 10Y6/2	シルト質粗相	少量の粗相～中種（3mm大）含む カーボン粒あり 粘性弱い 6を母 材とする作土	[第2層]
5	灰白 7.5Y7/2～浅黃 5Y8/3	極粗相	ラミナあり	[第2 b 層]
6	灰オーリーブ 5Y6/2	粘質シルト	粗相～粗相少含む 微量のカーボン粒含む マングン斑あり 粘性 強い	[第3層]
7	灰 5Y6/1	粗相～中種（5mm大）混じり粘 質シルト	カーボン粒多く含まれる 土壌多量含む マングン斑斑者 粘性強 く、7より用子	[第4層]
8	灰黃 25Y7/2	粘質シルト	中種～中種（5mm大）少量含む カーボン粒含む マングン斑斑者 粘性強 い	[第5層]
9	灰 N6/0	粘質シルト	カーボン粒微量に含む 粘性非常に強い	[第6層]
10	経灰 5G6/1～10G6/1	粘質シルト	上面からの攪拌及び地層の変更により9・10が混在	[第6層]
12	青灰 5H6/1～ 灰オーリーブ 7.5Y6/2	シルト質粗相	粘性強い	[第6 b 層]
13	経灰 10G6/1	粘質シルト	青灰 5P15/1 粘質シルトの小ブロック含む 部分的にラミナあり 粘性弱い	[第6 b 層]
14	オーリーブ灰 25GY6/1	極粗相混シルト	上部を中心にカーボン粒含む 粘性やや強い 最上部やくすんでお り土壌化している可能性あり	[第7層]
15	灰 10G5/1	粘質シルト	粘性強い 有機物・カーボン粒多く含み、色調がやや紫色を呈する	[第7層]
16	経灰 10GY6/1	粘質シルト	粘性強い 有機物・カーボン粒若干含む 7b層が形成された凹地内堆 積物	[第7層]
17	オーリーブ灰 25GY5/1	極粗相混粘質シルト	有機物・泥水・植物体多く含む 粘性強い 17と性格同じ	[第7層]
18	経灰 10GY6/1	粗相～細相粘質シルト	有機物含むがより少量 粘性強い 17・18と性格同じ	[第7層]
19	経灰 5G6/1	粘粗質シルト	全体に既存の着生多く青緑 7.5Y6/8-6 を呈する 上部（~15cm） はシルト質強く、土壌化している可能性ある 砂礫はほとんどどまない	[第7 b 層]
20	灰オーリーブ 7.5Y6/2	粗相粗混シルト質粗相	粘性強い	[第7 b 層]
21	灰オーリーブ 7.5Y6/2		粗相～中種（2mm）を少量含む 粘性弱い	[第7 b 层]
22	灰白 7.5Y7/2	極粗相		[第7 b 層]
23	褐灰 5YR6/1～灰白 25Y8/1	粗相～中種（5mm） 粗相～粗相		[第7 b 層]
24	経灰 10GY6/1～ 明瞭観 25Y7/6	シルト質粗相	ラミナは部分的にしか認められない 植物遺体微量に含む	[第7 b 層]
25	灰 10Y6/1～ オーリーブ灰 5GY6/1	シルト混粗相～粗相	腐植物若干含む	[第7 b 層]
26	灰白 10Y7/1～淡黃 5Y8/3	細～粗相	ラミナあり	[第7 b 層]
27	灰 2.5Y6/1～灰白 5Y8/1	粗相	多量の腐植物をラミナ状に抽出	[第7 b 層]
28	灰白 10Y8/1～7/1	粗相～中種	ラミナあり	[第7 b 層]
29	灰暗青 10Y6/2	シルト質粗相	同質粘質シルトブロック含む 粗相～粗相を帯状に挟む	[第7 b 层]
30	浅黃 25Y7/3～灰白 8/1	細～粗相	ラミナ部分的にあり	[第7 b 層]
31	灰白 7.5Y8/1	粗相～中種（5～6mm）		[第7 b 層]
32	灰白 7.5Y8/1～灰黃 25Y7/2	粗相～中種（5～6mm）	斜行ラミナ顯著 10mm前後の中種含む 植物体を挟む 上部は15mmほ どの中種が比較的多く含む	[第7 b 層]
33	浅黃青 25Y8R/6～ 灰白 25Y8/1	粗相～中種（~5mm） 主体	ラミナあり 下部のうがは比較的細かい (西にいくに従って変化)	[第7 b 層]
34	灰白 7.5Y7/1～5Y7/2	粗相～中種		



01-2調査区 東壁

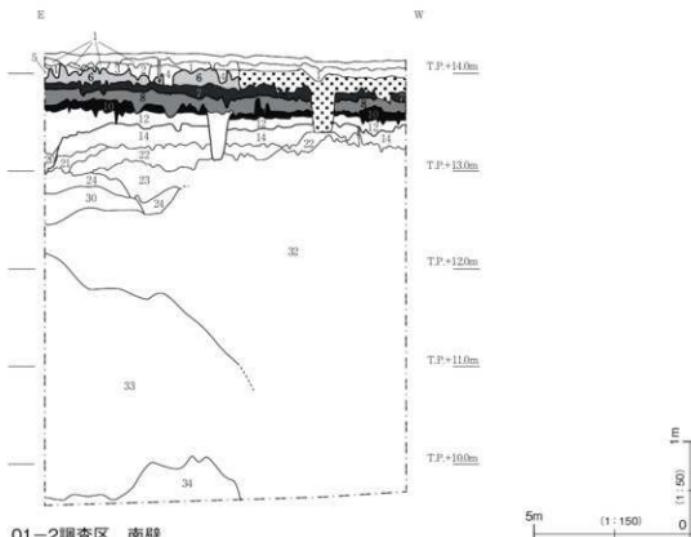


図7 01-2調査区土層断面図

は、3m以上に及ぶことが明らかとなっている。包含される遺物は少ないが、01-2調査区の調査成果から、本層は縄文時代に供給された水成堆積物と考えられる。

## 第2節 検出遺構と遺物

本節では、各遺構面の調査成果について、第1面から順に記述を進めていくこととする。遺構番号については、各遺構面の300分の1の縮尺図に付している。

なお、遺物の詳細は巻末に観察表を付しているため、最小限度にとどめることとする。個々の内容については、観察表を参照されたい。

### 1. 第1面（図8）

第1・2層を除去した下面を第1面とした。07-1調査区では01-2調査区の調査成果によって、第1面が近世に帰属することが判明していたため、平面的な調査は実施していない。

第1面に帰属する遺構としては、水利施設のほか、耕作に伴う溝、土坑が認められた。

#### 〔水利施設〕（図8）

2~3層程度に細分される第1層の最上部を掘削し検出できる遺構である。水利施設は桶を埋設した湧水部と、これをつなぐ溝から構成されており、掘形には環が裏込めされ、枠として曲物を据え、上面に方形の板材を組み合わせた蓋を被せる構造を探っている。

溝内は竹と考えられる部材で桶が構築されており、2m前後の間隔で据え置かれた側面に、0.1m前後の穿孔のある横木（駒）の中に、これを通すことで安定を図る構造を示す。

出土遺物は、下位層からの混入と考えられる須恵器・土師器が少量出土したほかは、認められない。

後述するように、第1層の形成時期が出土遺物から近世~近代にかけてであることを考えると、第1層中に存在する本遺構は、近世以後の構築物であると考えることができる。

なお、07-1調査区では、本遺構を検出・認識はしたもの、01-2調査区での調査所見から、近世以降のものであることが明らかであったため、図化を含む調査は行っていない。ただし、07-1-1調査区を除く西半分では、ほぼ全面にわたって検出し得たことを記しておく。

#### 〔土坑〕

図示はし得なかったが、07-1-1区の北東隅では、粗砂以上の淘汰の良い水成堆積物を埋土とする土坑を確認している。壁面にかかっていた断面の観察から、掘形付近には幅0.2m程度の鋤先状の工具痕跡が認められた。今回の調査地の対岸で行った00-1調査区では、ほぼ同時期のものと想定できる水成層を埋土とする多数の掘削痕跡が認められており、調査担当者によって災害復旧のための土取りの可能性が指摘されている。

この土坑についても、旧大和川流域の遺跡に散見される災害復旧土坑である可能性が高い。

遺物は出土しておらず、帰属時期は不明であるが、後述する耕作溝が営まれた後と想定できる。

#### 〔耕作溝〕

調査区全面に南北方向に走向する溝群が認められた。第1・2層の下面で検出できるものが混在するが、それそれを弁別できていない。本来は第1面に帰属するものと考えられるが07-1調査区では第1面の調査を実施していないため、図示についても実際に検出を行った第2面（図9）に掲げている。

溝は大小2者が認められ、規模の大きなものは、6m程度の間隔を空けて位置しており、一方の小規模なものはその間を埋めるように位置していた。溝内埋土はいずれも第1・2層である。耕作に伴う溝と

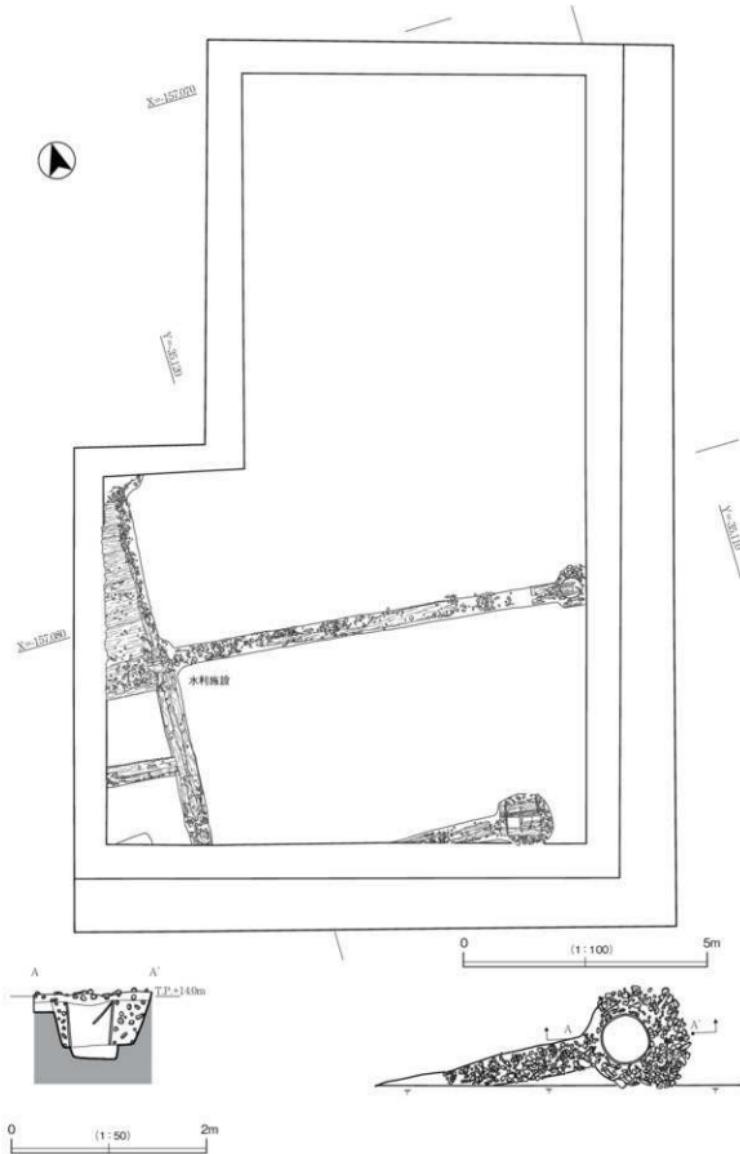


図8 第1面 平面図

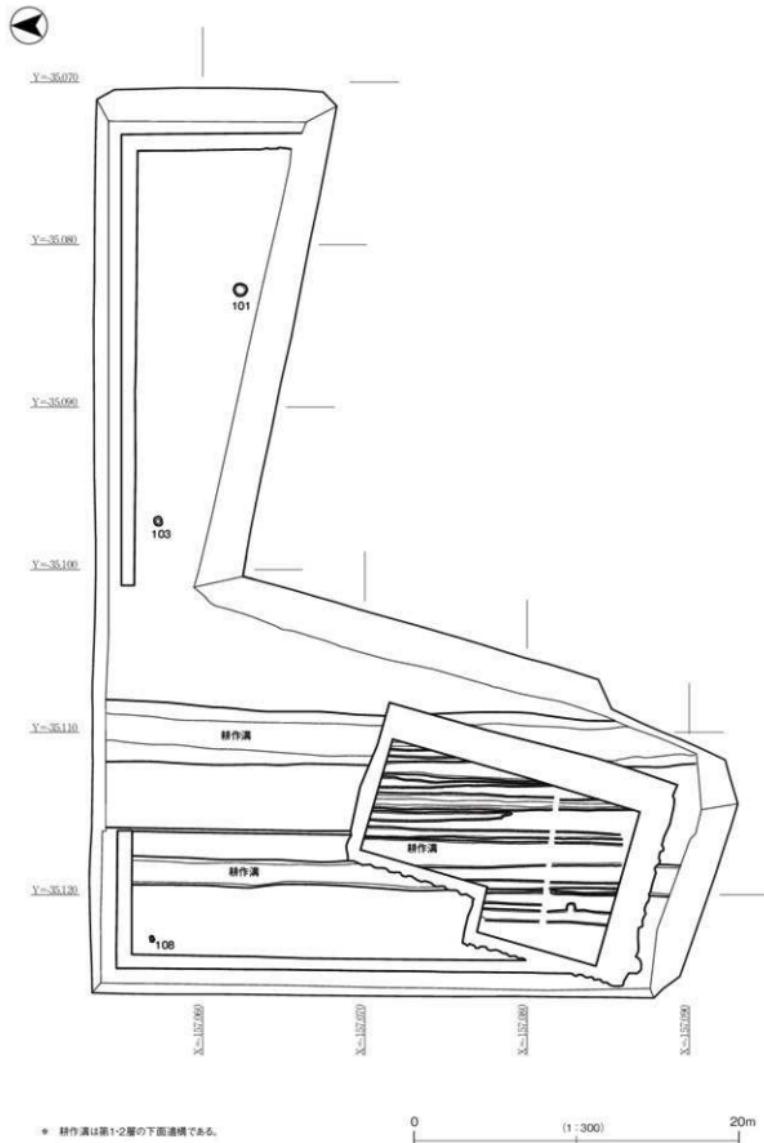
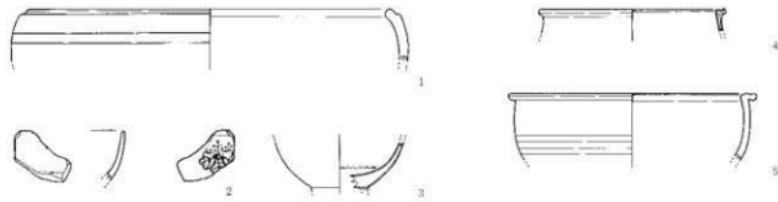


図9 第2面 平面図



第2面積作溝

第1~2層

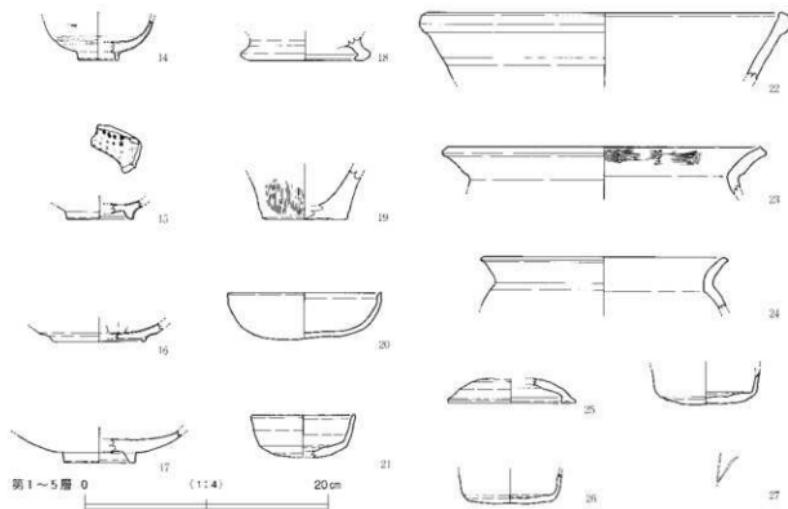


图10 第2面積作溝 第1~2層・第1~5層 出土遺物

考えられる。

出土遺物は総体的に少なく、かろうじて図化し得たのは、1～3の3点である。いずれも細片で、残存率は低い。1は瓦質羽釜、2・3は染付碗である。

遺構の時期は明確にしがたいが、出土遺物を根拠に15～17世紀にかけての所産と考えられる。

#### 〔第1・2層出土遺物〕（図10、図版14-1）

第1・2層からは、陶磁器・瓦質土器などの中世後期～近世にかけての遺物が出土した。07-1調査区では、これらの層については機械掘削で除去したため、明確に第1層と第2層を区分することはできていないが、後述するように第3層の出土遺物が中世前期～後期の遺物を包含することを勘案すると、図化し得た遺物の示す年代観は、概ね整合的であると考えられる。

前節において述べたように、第1・2層は耕作土層であるため、遺物は少なく、出土するものも細片が主体を占める。

4～13は第1～2層から、14～27は第1～5層にかけての出土遺物である。出土量はいずれも希少であり、いずれの個体も細片が主体を占める。4・5は行平、6は焙烙、7～11・13は染付碗、12は青磁碗である。

また、これらに加えて、下層からの混入とみられる須恵器（25～27）・土師器（20・21・23・24）も出土している。いずれも、飛鳥II期の所産である。

これらの遺物は、飛鳥時代の混入資料を除けば、17～18世紀を下限とすることから、第1・2層の時期は近世～近代と考えられる。

#### 〔第3層出土遺物〕（図11、図版14-1）

第3層からは、瓦器・瓦質土器・土師器・須恵器等の中世前期～後期にかけての遺物が出土した。

出土遺物はごくわずかである。28・29は和泉型の瓦器碗である。内外面ともに極めて密なヘラミガキが施されており、焼成も良好である。30は白色系の土師器小皿である。

これら12世紀前半と考えられる瓦器・土師器のほか、14～15世紀の陶磁器・瓦質土器等が出土している。このことから第3層の時期は中世前期～後期と考えられる。

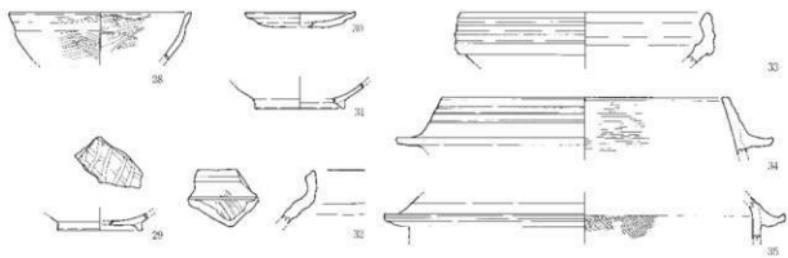
## 2. 第2面（図9）

第3層を除去して検出できる第4層上面を第2面として調査した。遺構面の遺存状況は悪く、上面からの耕作に伴う溝によって大きく改変を受けている。

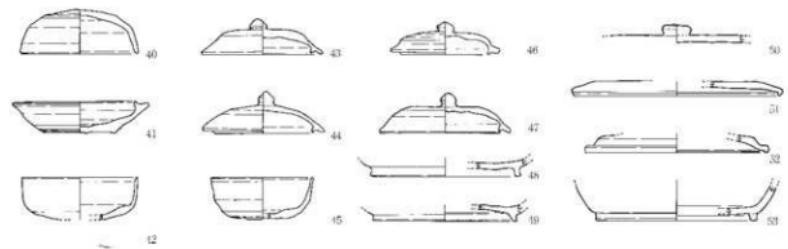
遺構面の地形は、大きくは南から北へ緩やかに傾斜する形状を示す。最高点は南側で14.05m、北東隅で13.9m、北西隅で13.85mを測る。

第2面では、検出し得た遺構の密度は少なく、前項で述べた下面遺構である耕作溝のほか3基の土坑を検出したに留まる。調査区の東端に101土坑、中央部で103土坑、調査区の西端北側では108土坑を検出した。図面は掲げていないが、いずれの土坑も第1層に近似した埋土を有することから、本来は第1層下面遺構として第1面で検出した可能性もある。それぞれの埋土は均質であり、ブロック等を含まない。帰属時期については遺物が出土しないため、詳細は不明である。

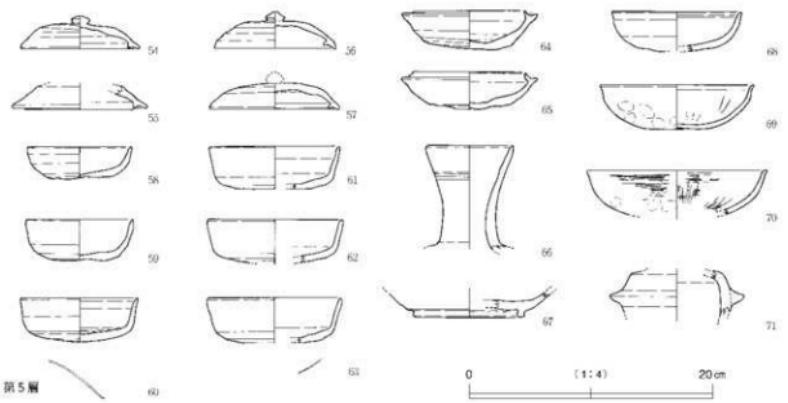
以上の土坑からは遺物が出土せず、遺構面の時期には、決め手を欠く。ただし、上述したように、第3層より12～15世紀代の瓦器碗・瓦質土器・土師器などが出土したことから、第2面の帰属時期は中世前期～後期の可能性が高い。



第3層



第4層



第5層

図11 第3～5層 出土遺物

[第4・5層出土遺物] (図11~14、図版14-1・21・22)

本来的には4・5層は明確に区分されるべきであるが、前節においても述べたように、第4層と第5層の層境は後の地震動によって構造が変形しており、調査技術上これを克服することができなかつた。可能な限り弁別を図ったものの、それぞれの層からは、時期的にも大差のないものが認められたため、ここでは、ほぼ一括して掲載しておく。

40~53は、第4層から出土した須恵器・土師器である。須恵器は、杯H・杯G・杯Bの3者が認められる。杯H・Gはいずれも残存率が良好であるのに対し、杯Bは残存率が悪い。

杯Hは、立ち上がりが鈍く、口径・器高ともに減少傾向にある。杯Gは蓋の宝珠つまみが低平なもの(43・46)と、突出して高いもの(44・47)の2者が認められる。以上の特徴から、飛鳥II~III期に帰属する可能性が高い。

杯Bは、全体の形状を窺える資料が無く、詳細は不明であるが、蓋のつまみの様相から平城宮V期に位置づけられる一群である。杯Bの存在を積極的に評価すれば、第4層の形成時期及び下面で検出される第3面の帰属時期は8世紀代に求めることができるが、後述するように、第3面検出遺構は、その多

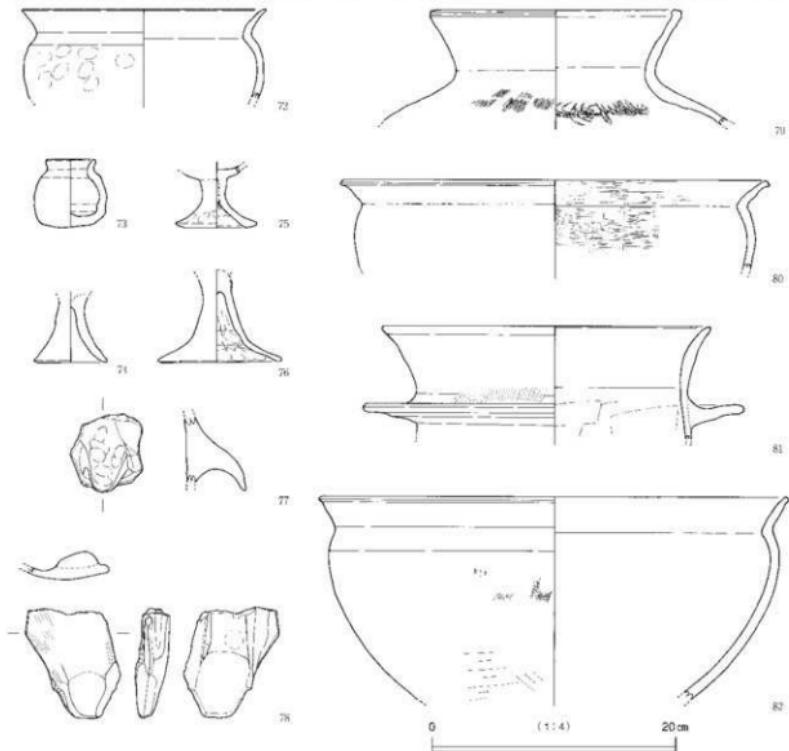


図12 第5層 出土遺物

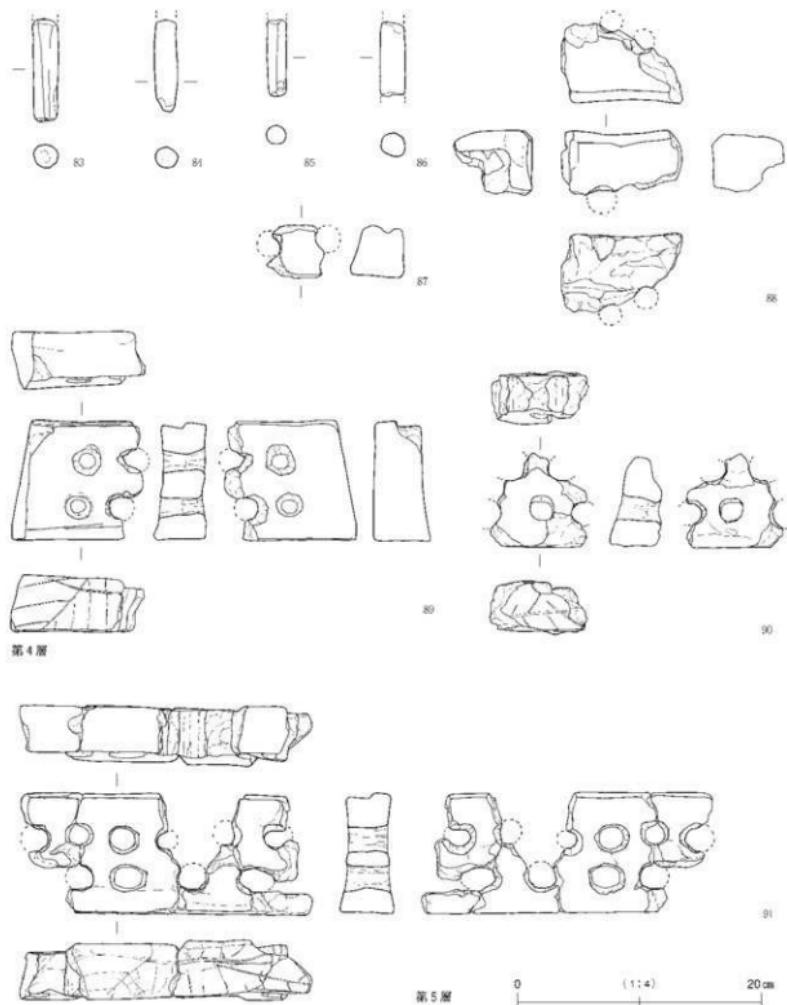


図13 第4・5層 出土遺物（1）

くが飛鳥II～III期に該当することから、第4層の形成時期に混入したものと理解しておきたい。

54～82は、第5層から出土した須恵器・土師器である。須恵器には杯H・G・B、平瓶ないしは長頸壺の口縁片のはかに甕がある。土師器は杯A・Cがある。このほかに、ミニチュア土器（71・73）、高杯、羽釜、鉢、移動式竈の把手等が出土している。羽釜及び竈は生駒山西麓産の胎土である。須恵器・土師器杯の様相から、飛鳥II期の一群として考えられる。

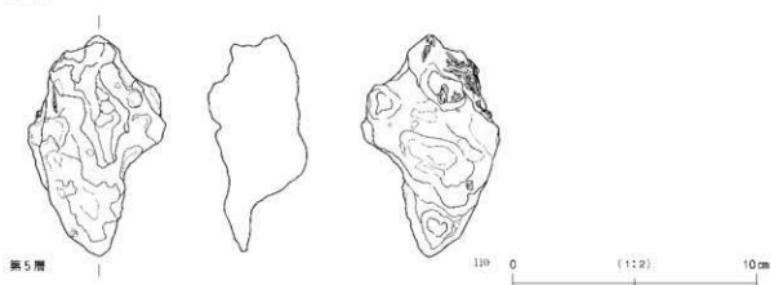
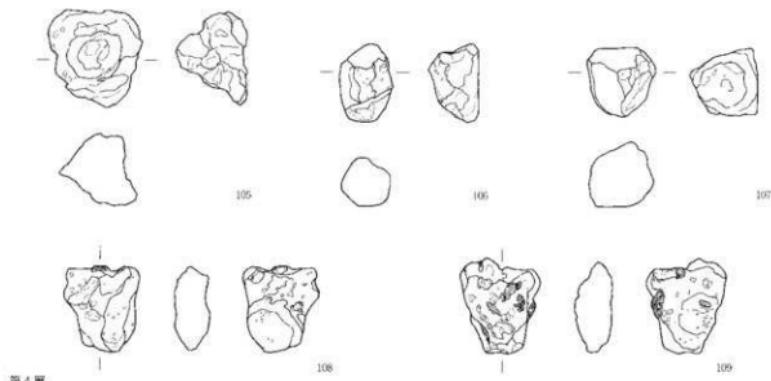
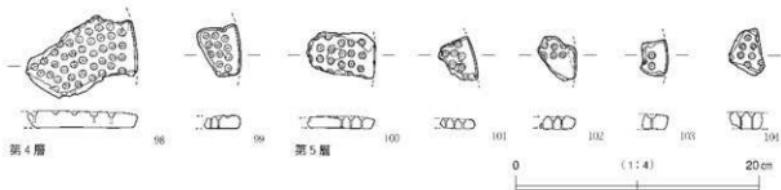
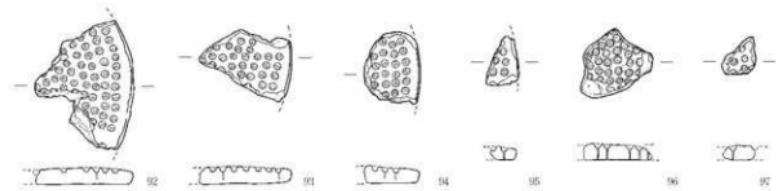


図14 第4・5層 出土遺物(2)

図13・14には、第4・5層から出土した土製品・鉱滓を掲げた。

83～86は用途不明の棒状土製品である。83～86は一方の端が残存し、全体像が判るものはない。83等に見られるような製作にあたっては、粘土の細い板を折り曲げて丸めていることが明らかである。被熱痕跡等は、特に認められない。

87～91は埠状土製品である。全容を窺える資料が無く、機能等については不明である。

いずれも、4cm前後の厚みを有しており、直径2cm前後の不整な円形の孔を焼成前に穿っている。穿孔位置は2孔1対を基本としつつ、部分的に穿孔箇所がずれるものも見受けられる。

89～91は、接合はしないものの、同一個体である可能性が高い。長辺側の小口部は、平坦面が形成され、葉脈痕が認められるほか、もう一方の小口部には、断面L字状の突起が作り出されている。

短辺側の小口面は葉脈痕がある面に対し、直角にはなっておらず、傾きを有している。

穿孔は両面から施されており、穿孔後の調整は不十分であるため、穿孔時の工具痕跡が明瞭に姿を留める。工具痕からは、焼成前の半乾燥時に断続的に穿孔された状況が復元できる。

表面は、丁寧にナデ調整が施されており、器表面の荒れは認められない。91は摩滅が著しく、詳細は不明だが、部分的に被熱の可能性がある面が認められた。

この土製品の性格については、今後の類例の追加を俟って考える必要があるが、葉脈痕のある面を下にして据え置くと極めて安定することと、表面の一部が緩やかな弧を描いて裾広がりになること、長辺側の断面L字状になる突起が存在することを考え併せると、長辺側の一辺を下にし、同様のものをL字状の突起を組み合わせることで、埠状構築物を構成する部材の可能性が想定できる。このことから、轆の羽口を挿入する炉壁の可能性もあるが、後述する今回の調査で出土した轆羽口は、本土製品の孔径よりも直径が大きいなど、積極的に機能を比定するには躊躇を覚える。

92～104はガラス小玉の鋳型である。97・104を除き端部が残存するが、いずれも細片である。端部の形状から円形に復元でき、外端部の直径は約20cmとなる。鋳型孔は0.6cm前後で、芯持ち孔は0.1cm以下を測る。下面是無調整ながら平坦に仕上げられている。鋳型孔の配列には、規則性があまり認められず、個体差もあるようである。92など残存率の高いもので考えると、一定の単位で同心円状に円弧を描いていくように配置するようであるが、全容を窺うことができないため、詳細は不明である。

92は上面の一部分に鋳型孔が穿たれず、空白部分が設けられている。空白部分の規模は幅約1cm、長さ約3cmである。小片であるために詳細は不明ながら、102も同様の空白部分が設けられていた可能性がある。こうした空白部分は、既報告ですで述べているように、鋳型を持ち上げるためのものであった可能性が高い。

105～110は鉱滓及び、鉄塊系遺物である。108～110は椀形滓である。いずれも不定形な突起を有し、炭化物がスサ状に入り込む。110は最も大きく、表面の突起部からは強い磁着度が感知された。メタル度及び磁着度については、巻末の遺物観察表に記載している。

### 3. 第3面(図15)

第4層を除去して検出できる第5層上面を、第3面として調査した。

遺構面の地形は、南側が高く、北側に緩やかに傾斜する形状を示し、南側中央部で13.85m、北東隅で13.75m、中央北端で13.7m、北西隅で13.75mを測り、比高差は0.1m前後を測る。

遺構は、調査区の西側に集中して分布する。主なものに、溝・集石土坑・土坑がある。

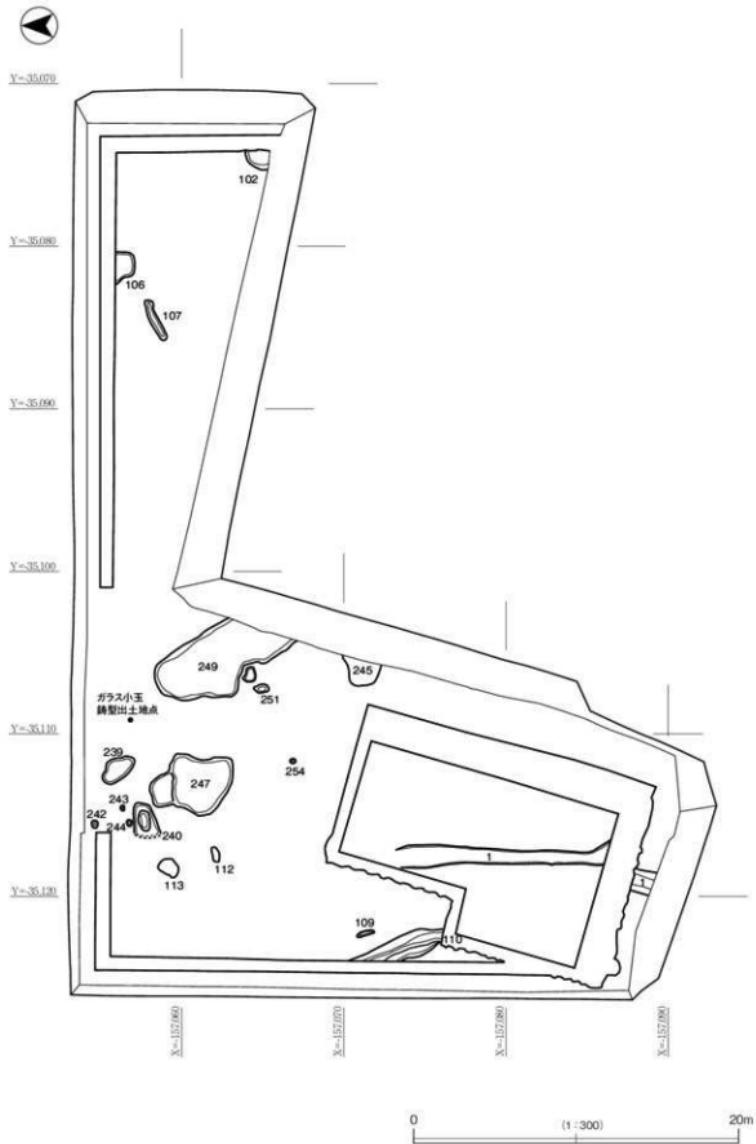


図15 第3面 平面図

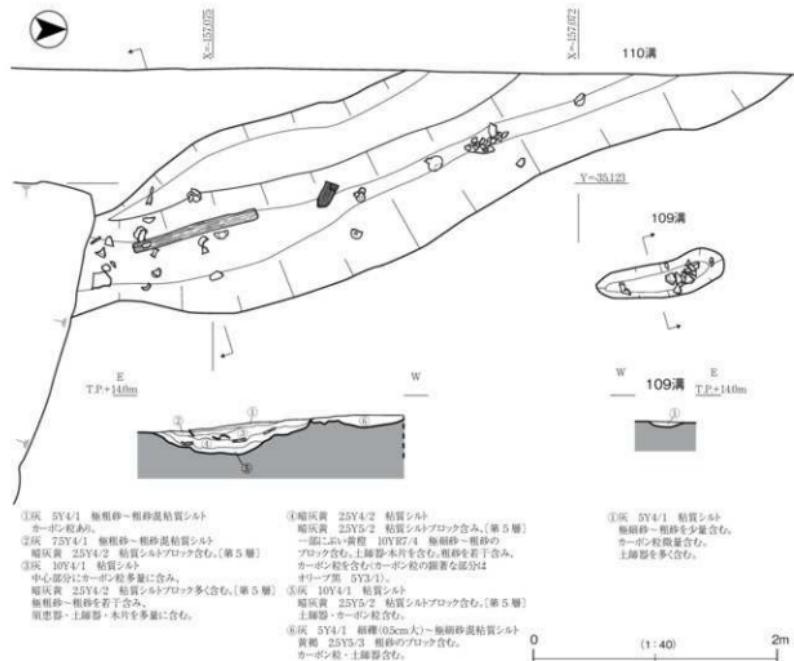


図16 第3面 109溝・110溝 平・断面図

[110溝] (図16~18, 図版15-1・19・22)

調査区の西端中央部に位置する溝である。南東-北西方向に走向する。規模は検出幅1.4m、検出面からの深さは最も深い箇所で0.3mを測る。溝の平面形状は不整形であるものの、下端については直線的である。掘形の断面形状は、緩やかな鉢状を呈する。

本溝については、01-2調査時には、第4面に帰属する遺構として2廃棄土坑と連結する19溝として捉えていた。一方、07-1調査時には、地震動の影響が少ない地点を調査したということもあり、第3面で把握することができたという差異がある。

図16には検出面の相違があることから19溝の範囲については、掲げていない。また、2廃棄土坑との重複関係については調査の都合上、2廃棄土坑の中央部を外した地点での確認となってしまったため、断定するにはいたらないものの、2廃棄土坑の埋土と、110溝の埋土の横断面の観察から、110溝が2廃棄土坑を切っている可能性が高いことを確認している。

溝の規模は、01-2調査区の19溝と北西隅の調査区際の110溝を含めて考えると、検出長約15m、幅0.6~1.4m、深さ0.3mを測る。ただし、深さは地点によって異なっており、01-2調査区では、19溝として途中で消失してしまうなど、一定しない。

110溝の埋土は、最も深い箇所では上(①~③)・中(④)・下(⑤)の3層に大別でき、④層以上

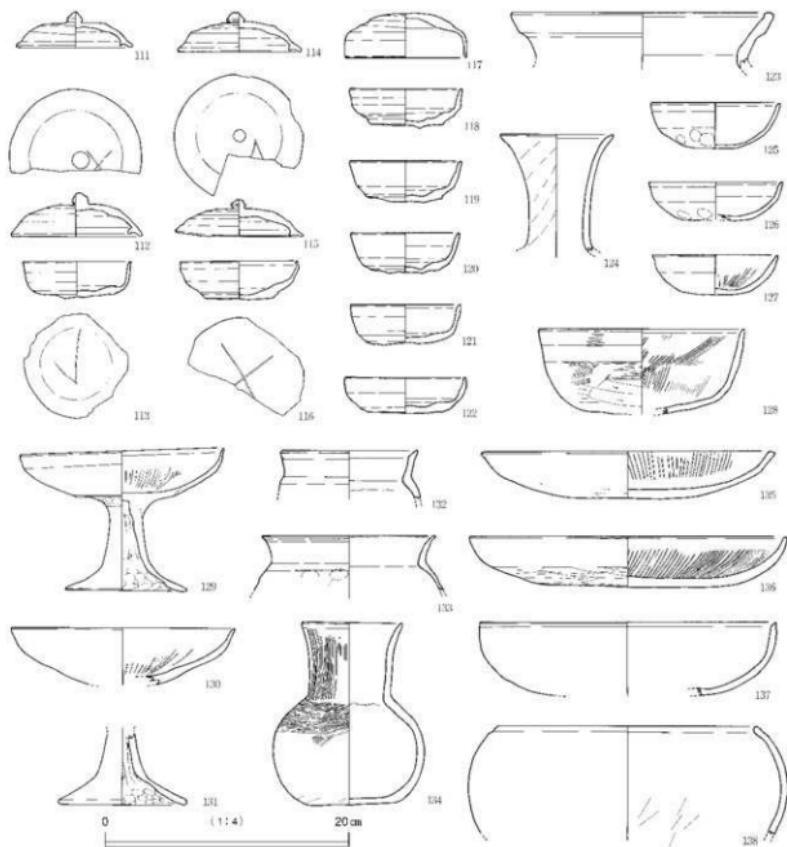


図17 第3面 110溝 出土遺物(1)

に土師器・須恵器などの遺物を多く含む。

下層は淘汰が良く、粘性の強いシルトであることから、溝掘削後、④・⑤層が堆積する程度、一定期間開口した後、遺物の廃棄と共に埋没が進行したと考えることができる。

中層は、植物遺体を中心とするシルトである。

上層は、カーボン粒・土器片を多量に含むシルトである。粒径はやや粗い。

溝内からは、中層から上層にかけて完形に近い土器・木器がまとまって出土した。その他の第3面帰属遺構の出土遺物に細片が多いとの対照的である。可能な限りの遺物を掲げている。

須恵器は、杯Gの蓋(111・112・114・115)、身(113・116・118~122)および杯Hの蓋(117)がある。杯Hの身は細片も含め認められなかった。111~116の杯Gは蓋・身ともに外面に×字やレ字のへら記号が施される。このほか、壺口縁部(124)、甕口縁部(123)が出土している。

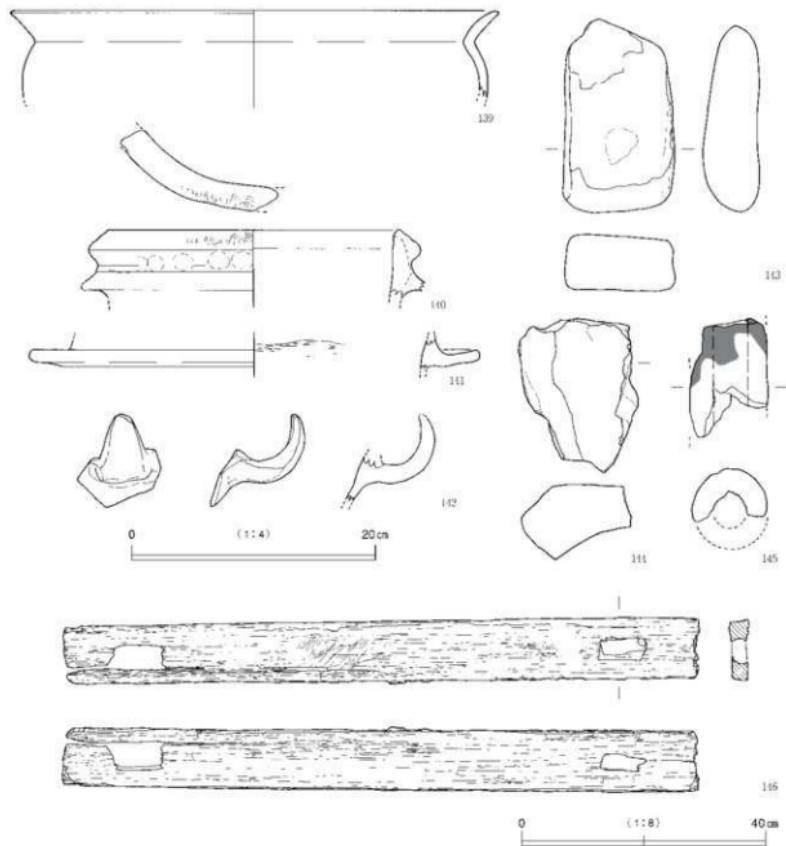


図18 第3面 110溝 出土遺物(2)

土師器は杯C(125~127)・A(128)、皿A(135・136・137)、高杯(129~131)、壺(132・133)、長頸壺(134)、鉢A(138)、堀(139)、羽釜(140・141)、竈ないしは壺の把手(142)が出土している。

140は羽釜の可能性を考えたが、欠損はしているものの鶴部が大きく伸びないであろうこと、口縁部には同心円状の当具痕が残存し、同様の調整を有するものには、竈が多いこと等から、竈の釜穴部附近であるかもしれない。

以上の土器群は、須恵器杯H身が認められることや、杯G身も口径が縮小傾向にあることに加え、土師器杯Cの様相、土師器杯Aを含むことからも、飛鳥II~III期にかけての所産と位置づけることができ、後述する第4面の諸遺構よりもわずかに新しい傾向を示す可能性が高い。

なお、後述する第4面検出溝群のうち、北西~南東方向に軸を有する溝群は、出土遺物が少なく決め

手を欠くが、いずれも110溝と近似した傾向を示すものが多く、本来は110溝と同様に、第3面で検出すべきであった遺構を、第4面で検出してしまった可能性もある。

土器以外のその他の遺物としては、平坦面のある礫（143・144）と轆羽口（145）、建築部材（146）が出土している。

平坦面のある礫は、いずれも砂岩質である。特に、使用痕等は観察し得なかった。

145は轆の羽口である。両端を欠くため、全容は窺い知れない。直径は外周で6.0cm、内法径で2.8cmを測り、図に表現した上端から0.7cmの部位には、表面が被熱により変色、ガラス質に変質・発泡している状況が認められた。このことから、図上の上側が窯室に近く、欠損部位も大きくなっていることが想定できる。

146は、台輪状の建築部材である。両端部とも残存している。幅10cm、全長103.8cm、厚みが2.9cmを測る。両端部付近には、長方形の貫穴が穿たれている。貫穴の大きさは、長辺側で7.2~8.0cm、短辺側で3.2~4.0cmを測る。広葉

樹の追査目材を用いている。加工痕跡等は明瞭ではなかったものの、表面中央部付近に4cm前後の幅の刃先痕が集中して認められた。加工時の所産とは考えにくいが、意図は不明である。

110溝の性格については、完形の遺物が多いことからも居住域途絶後の廃棄に伴う溝と考え得るが、2廃棄土坑との重複関係に不確定要素があり、詳細は不明である。

#### 〔109溝〕（図19）

調査区の西端中央部、110溝の東側に位置する溝である。溝の規模は小さく、検出長1.3m、幅0.3m、深さ0.05mを測る。埋土は單一層であり、土器片を多量に含んでいた。

取り上げた土器片は細片が多かったものの、接合したところ器高40cm前後の瓶（147）に復元することができた。瓶は約2分の1程度が残存するが、把手を欠いている。底部中央には1孔、外縁部に2孔の蒸気孔が確認でき、残存径から想定される蒸気孔の数は外縁部4孔、中央部1孔の計5孔のものが想定できる。外面はやや粗めのハケが施され、内面はケズリ状のナデが施されている。

帰属時期は明瞭ではないものの、底部・体部の状況から飛鳥時代の所産と想定できる。

#### 〔245集石土坑〕（図20、図版3-5）

調査区の中央部に位置する不定形の土坑である。東半分が調査区外に当たるため、土坑の規模は明らかでない。検出長は1.7m、幅は2.35m、深さは0.1mを測る。

掘形は浅く、緩やかで浅い皿状を呈する。埋土は第5層に近似した灰色シルトの單一層である。

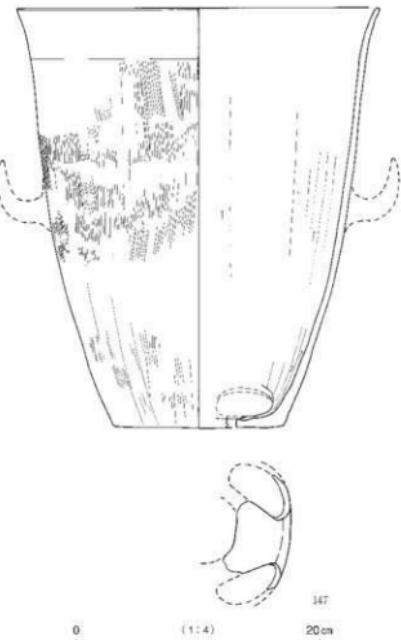


図19 第3面 109溝 出土遺物

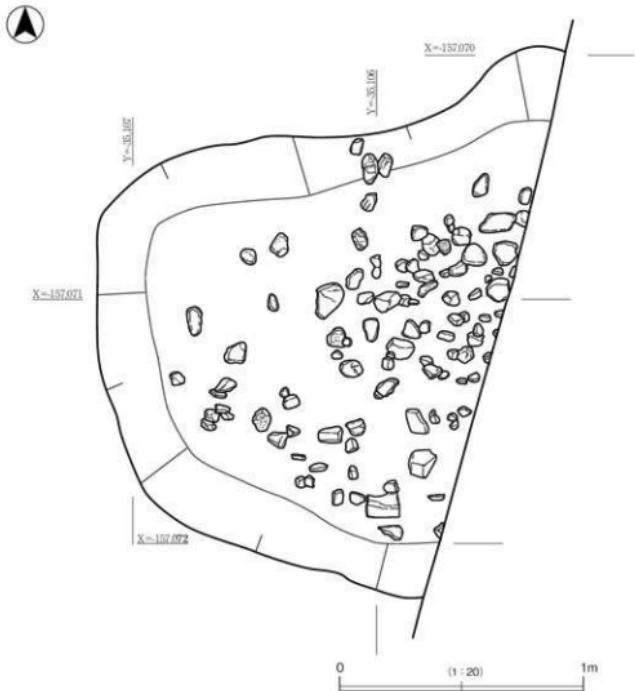


図20 第3面 245集石土坑 平面図

検出時から上面に礫の上端部が見えており、その周辺に不明瞭ではあるものの、平面プランが認められたことから掘削を行ったところ、礫が不定形な土坑の中に集中していることから、245集石土坑として調査を行った。

遺構内には、拳大の礫が多量に充填されており、土坑の中央部ではさらに密度を増している。礫は、川原石と見られる礫岩・砂岩・泥岩とバラエティーに富んでおり、特定の石材をまとめるなどの恣意性は認められない。

遺物は、他に、わずかに須恵器杯口蓋（185）と棒状土製品（186）が認められたのみである。

以上の出土遺物から時期を厳密に定めることは難しいが、埋土の様相等も加味すれば、周辺の検出遺構とはほぼ近似した時期の遺構である可能性が高く、飛鳥II～III期に帰属すると考えることができよう。

245集石土坑の性格は不明な点も多いが、今回の調査区周辺のいずれの地層にもこうした礫は含まれず、居住域形成後に何らかの用途によって運んだ礫を集約して廃棄した可能性が想定できる。

#### 〔102土坑〕（図21・24）

07-1-1 調査区の東隅で検出した土坑である。東半および南半が調査区外にあたるため、土坑全体の規模は不明であるが、検出長約1.5m、検出幅1.05mを測る。掘方断面は浅く緩やかな皿状を呈し、

深さ約0.1mを測る。埋土は灰色の粘質シルトであり、カーボンを少量含み、須恵器・土師器を少量含んでいる。

遺物は陶化可能なものが少なく、わずかに須恵器杯G身1点(169)と土師器の壺1点(170)を示し得たのみである。169は、宝珠つまみが張り出し、短く突出するものである。壺は頭部以下を欠くため、全体の器形は窺い知れない。以上の土器は資料数が限られ、詳細は不明であるものの、概ね飛鳥Ⅱ期に帰属するものと考えることができる。

#### 〔106土坑〕 (図21・24)

07-1-1調査区の中央部北側に存在する土坑である。北半が調査区外に当たるため、土坑の正確な規模は不明であるが、検出長1.35m、検出幅0.5mを測る。土坑内部の西側では、小規模な土坑が見つかっている。この土坑については、第4面掘立柱建物5の柱穴上部に堆積したものである。

土器は土坑の東側で集中して出土している。破片が多かったものの、ほぼ1個体と考えられ、これを接合したところ、土師器の壺(192)に復元できた。

遺物による帰属時期の特定はし得ないが、概ね飛鳥Ⅱ～Ⅲ期に帰属するものと考えることができる。

#### 〔112土坑〕 (図21・24、図版21-2)

07-1-2調査区中央部北半で検出した土坑である。検出時には、周辺のベース面が地震動によって著しい変形を受けていたため、掘方は不明瞭であり、カーボンの含有によってかろうじて認識した。

遺構の規模は、全長0.95m、幅0.4mを測る。断面形状は、浅く不定形な逆台形を呈しており、検出面からの深さは0.1m弱であった。

遺物の出土量は少なく、かつ細片を中心であるため、図示し得た遺物は、土師器壺(175)・ガラス小玉鑄型(176)・棒状土製品(178)のそれぞれを図示したに留まる。

土師器壺(175)は、小型のものであり、外面にはハケ目が残存している。ガラス小玉鑄型(176)は、端部は残っておらず、芯持ち孔は裏面まで貫通しているものが認められる。棒状土製品(178)は下端部が残存しており、端部はナデ調整によって、面取りが施されている。断面に表れる粘土の接合痕跡から、棒状土製品には細い粘土帯を折りたたんで絞るようにして作られたものもあることがわかる。

#### 〔113土坑〕 (図21・24)

07-1-2調査区の北半に位置し、上述した112土坑の北側に位置する土坑で、112土坑と同様、地震動によってベース面が変形を受けており検出に当たっては、カーボンの包含量を参考にした。

土坑の規模は、全長1.3m弱、幅0.95mを測る。掘方の断面形状は、浅い皿状を呈しており、検出面から坑底までの深さは0.1m弱を測る。

遺物は少量の土器片と礫が出土している。細片が主体であったため、図化し得たのは(174)の土師器杯C1点である。174は口縁端部内面に段が形成され、器高の縮小も著しい点など、やや新しい要素とも考えることができる。

礫は砂岩質で、平面形上は長梢円を示すと想定でき、断面は隅円方形を示し、表面中央部はわずかに凹みを有している。この凹みは、使用による痕跡の可能性が高いが、対応する箇所に擦痕等は認められなかった。全容を窺えないこともあり、詳細は不明であるが、磨石的な用途が想定できる。

174の土師器杯が示す時期から、113土坑の帰属時期は飛鳥Ⅲ期前後に求めることができよう。

なお、図21に図示したように、113土坑の北東側0.8m前後の地点で、埴状土製品(89)が遺構面に貼りついた状態で出土している。

### 〔251土坑〕（図21）

07-1-3 調査区の中央部に位置する小振りな土坑である。平面形状は不整な長楕円形を示し、全長約0.9m、幅約0.6mを測る。掘方断面は逆台形を呈し、検出面から坑底までの深さ0.2m強を測る。

埋土は上下2層で構成され、やや粗粒の堆積物を含む第5層起源のブロック土を持つ上層と、第6層起源のブロック土を多く含む下層に分けられる。

遺物は、土師器の細片が少量出土したが、図化可能なものは認められなかった。

### 〔107溝〕（図21）

07-1-1 調査区の中央で検出した南西-北東方向を指向する小規模な溝である。

規模は全長2.75m、幅0.4mを測る。断面は浅い皿状を呈し、検出面から坑底までの深さは、0.1m弱を測る。

埋土は1層で、その他の遺構と同様、カーボン粒を少量含む。遺物は出土しなかった。

### 〔1溝〕（図24）

01-2 調査区を南北に走る溝である。直線的な溝で、ほぼ真北に近い方向に走向することから、本来上面に帰属する遺構であった可能性もある。溝内からは須恵器を中心として、少量の土器が出土した。

171は須恵器杯B蓋、172は杯B身である。細片であるために、全容は窺い知れないが蓋口縁端部の様相および、身の体部へかけての立ち上がりからは、平城宮V期に帰属する可能性がある。

173はガラス小玉鋳型である。端部は認められない。

### 〔240土坑〕（図24）

07-1-3 調査区の北半西端に位置する土坑である。掘方の断面形状は2段を呈する。

坑内からは遺物が少量出土した。いずれも細片が中心で、図示し得たのは須恵器杯G蓋（179）と土師器高台付皿ないし椀の底部片（180）である。飛鳥II期の所産と考えられる。

### 〔239土坑〕（図22・24、図版21-1）

07-1-3 調査区の北端部中央で検出した土坑である。平面形状は不整な楕円形で、全長2.2m、幅1.3m弱を測る。掘方断面は浅い皿状を呈し、検出面から坑底までの深さは0.05m強を測る。

埋土は1層で、第5層起源のブロック土を多量に含み、カーボンも多量に含んでいる。

その他の土坑と同様、周辺ベース面が地震動による影響を受け、平面プランの把握には困難が生じたが、カーボンの含有量が周辺とは明らかに異なっていたために、検出に至った。

土坑内からは土師器（182）・須恵器（181）等の土器片、ガラス小玉鋳型（183・184）、棒状土製品、礫のほかに桃核等の種子類が出土した。出土量は多くはないものの、坑底に貼り付くようにして出土していることから、遺構に伴っている可能性が高い遺物が多く、使用後の廃棄行為が想定できる。

181や182は飛鳥II～III期に帰属すると考えられ、土坑の時期もこれに準ずるものである。

### 〔247土坑〕（図22・24、図版21-2）

07-1-3 調査区の北半部西側に位置し、239土坑の南側にある土坑である。平面は不定形で、全長約5.1m、幅約3.3mを測る。掘方断面は、浅く緩やかな形状を示す。埋土は1層で、その他の土坑と同様に第5層起源のブロック土とカーボンを含む。

遺物は埋土中より須恵器・土師器を中心とした土器がコンテナにして半箱程度出土しているが、いずれも細片が主体を占め、図化可能なものは少ない。かろうじて須恵器杯H身（187）、鉢津（188）、棒状土製品（190）、埠状土製品（191）を掲げた。

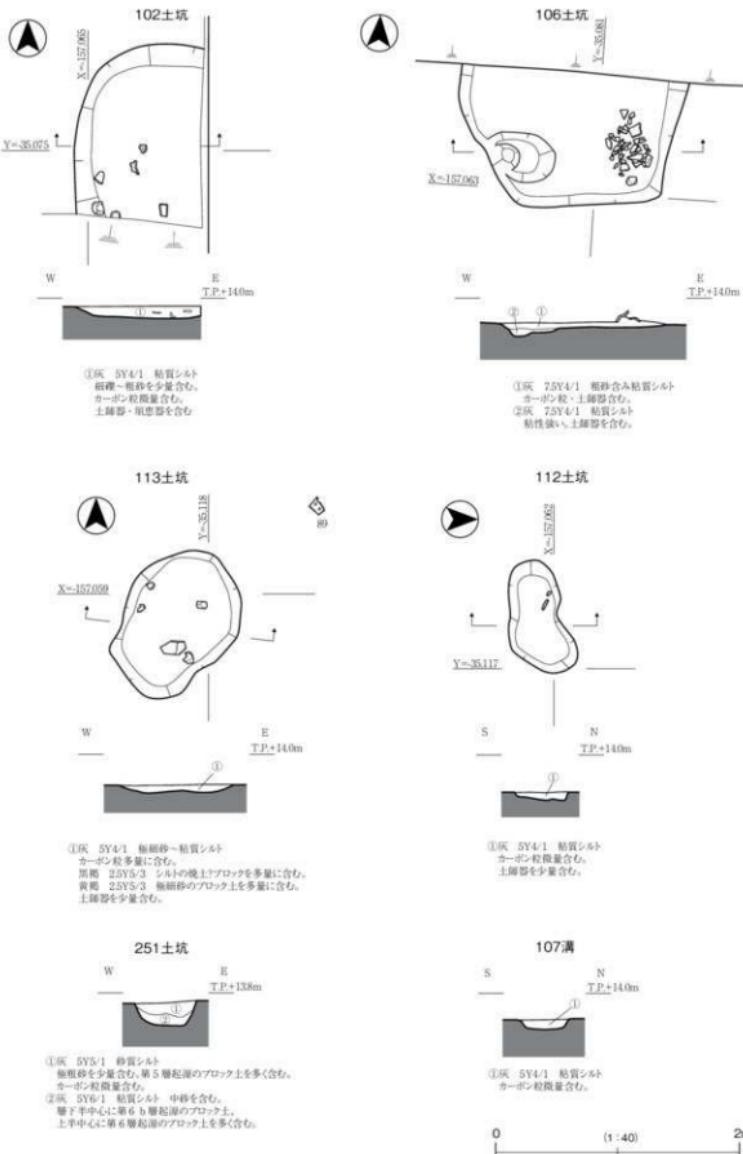


図21 第3面 土坑 平・断面図 (1)

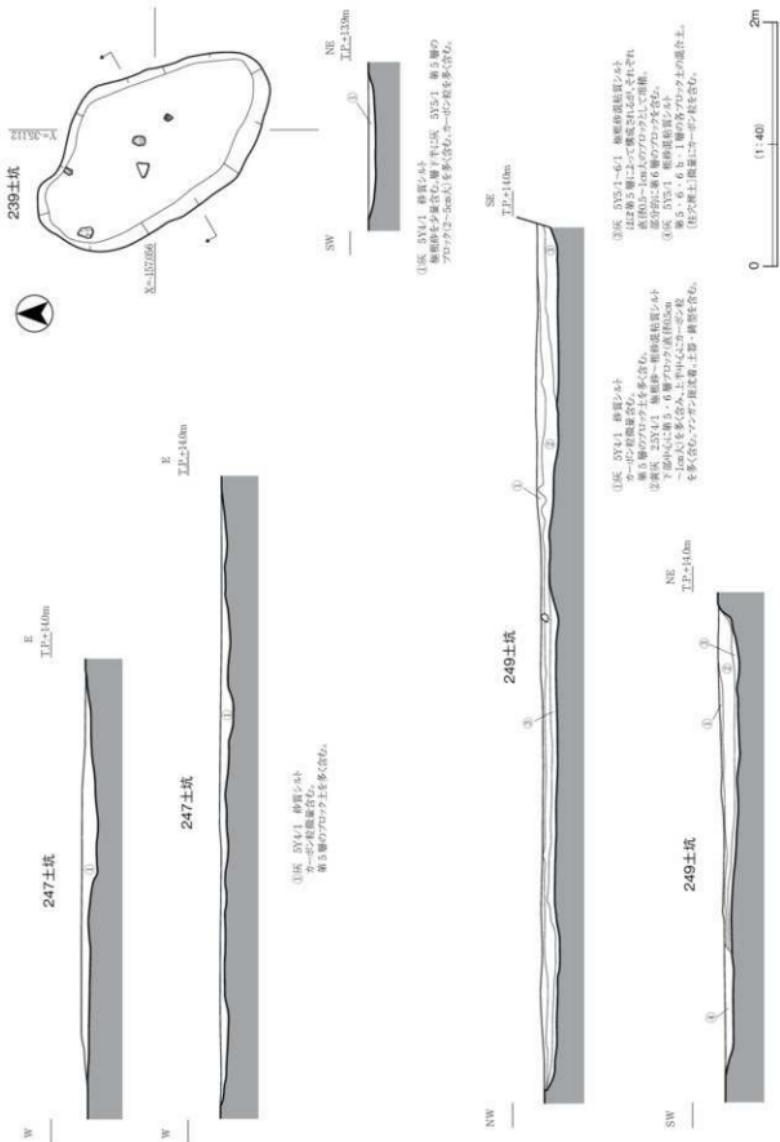


図22 第3面 土坑 平・断面図 (2)

〔249土坑〕（図22・23、図版19・21）

調査区の中央部に位置する大型の土坑である。南東-北西に軸を持つ不整な長楕円形を示し、検出長約7.2m、幅約3.6m、深さ0.2m弱を測る。

埋土は大きく3層に分けることができ、中層にカーボンが多く混ざる。遺物は、主に中層から下層にかけて出土し、図23に掲げたように比較的多く出土している。

土坑と名称をつけてはいるものの、掘り込みも浅く、不定形である。これに関連して、遺構の内容を記述する前に、検出時の状況を述べておく必要がある。

249土坑については、遺構面におよぶ地震動の影響もあり、平面プランを明瞭に判別することは困難であった。そのため、埋土に包含される炭化物や土器片などを手がかりに、かろうじて掘削した経緯がある。

土坑の軸は、後述する第4面267溝と近似することから、南東-北西方向に伸びる不定形な溝を誤って掘削した可能性もあり、その場合、本来、第3面で検出すべき溝を249土坑として調査したということになる。

出土遺物は、完形になるものは少なく、細片化したものが多いという点も、第3面に帰属する諸遺構と近似した傾向を示す点であり、土器のほかに部材（166）が出土するという点も、110溝と類似していることから、本来、南東-北西方向に伸びる溝であった可能性が非常に高い。

148・151は須恵器で、148・149は須恵器杯Gの蓋・身、150・151は須恵器杯Hの蓋・身である。149は底部外面に×字のヘラ記号を施す。

152・154・160は土師器である。杯C（152・154・155）は摩滅が著しく、暗文は155のみに認められた。156は皿Aで、157・158は甌である。

153は既報告〔2005b〕にて「輪状土器」と呼称されている土製品である。角閃石を含む生駒山西麓産の胎土を用いている。上端面は丁寧に面が形成されている。外面はハケ調整、内面はナデ調整が施されている。

159は羽釜の鋸部である。160は瓶ないしは竈の把手である。

161・162は棒状土製品である。161は端部が残存する。

163～165はガラス小玉鋳型である。いずれも端部が残存する。165は遺存状態が良好で、外縁部に鋳型孔を持たない空間が作り出されている。前掲の92や102と同様のものと考えられる。鋳型の復元径は約20cm前後である。

166は部材である。おそらくは前述した110溝出土の146のような部材と組み合わされるものと考えられる。材は広葉樹の追柾目材を用いている。磨耗が著しく、加工痕跡等は不明である。下端部はおそらく欠損していると考えられるが、詳細は不明である。

167は紙石である。断面不整台形の片岩を用いている。表面の片側を中心に擦痕と思しき痕跡が認められるが、詳細は不明である。

以上、249土坑から出土した土器は、110溝と並び第3面検出遺構の中では質・量ともに比較的豊富な内容であった。須恵器・土師器の示す特徴からは、飛鳥II期に収まるものと言える。

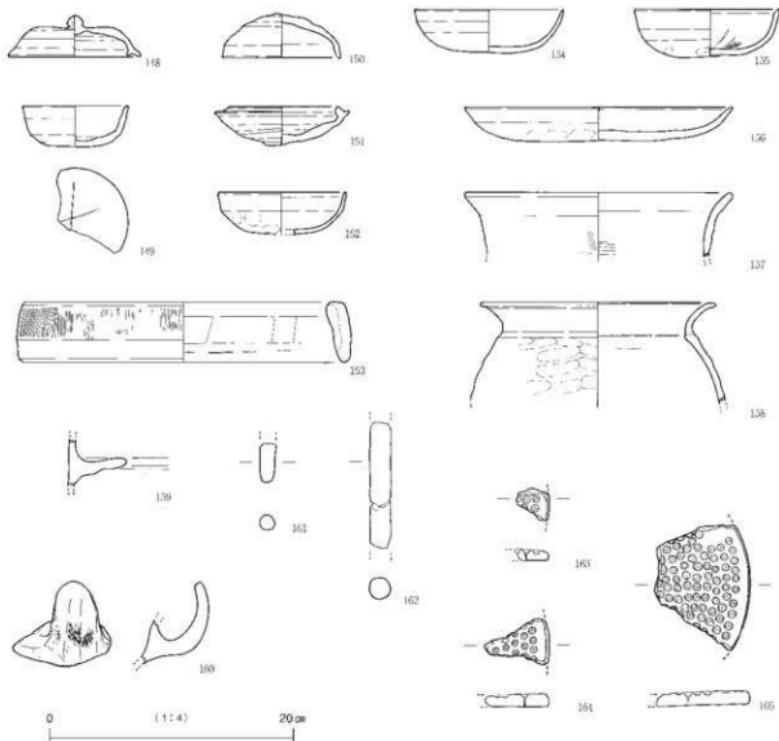


図23 第3面 249土坑 出土遺物

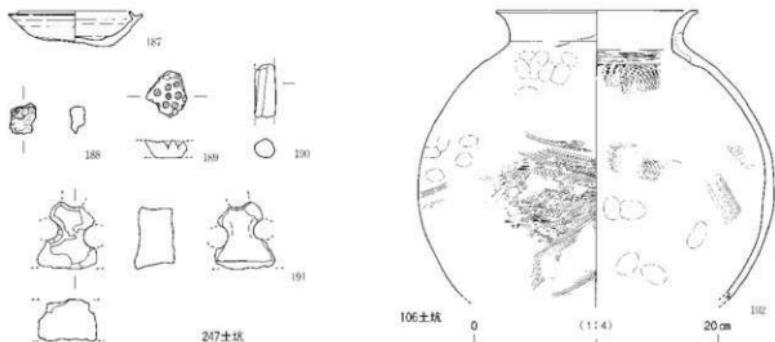
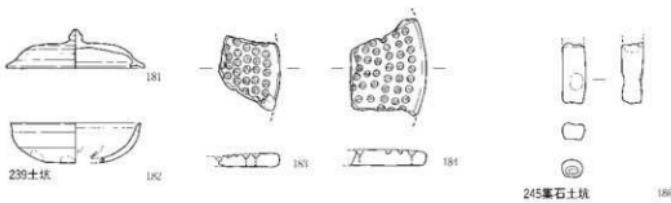
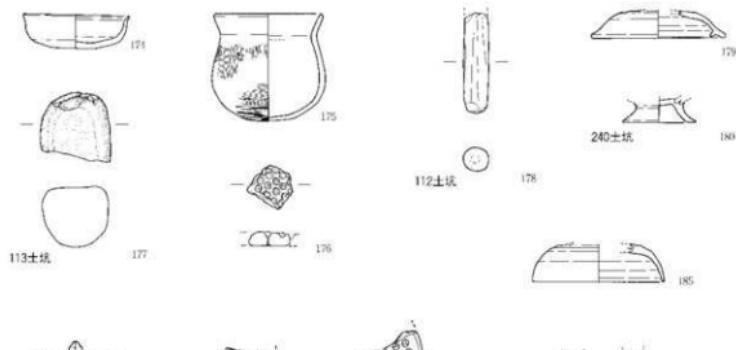
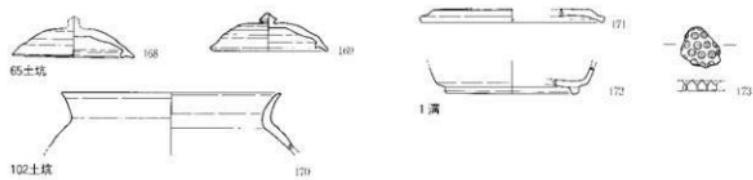


図24 第3面 溝・土坑 出土遺物

#### 4. 第4・4b面（図6）

第5層を除去して検出できる第6層上面を第4面として調査した。

本面は今回の調査において、遺構・遺物とともに、多くの成果を挙げることができた遺構面である。なお、遺構の検出は第6a層上面で行っているが、加えて遺構の有無を確認するために、第6a層を除去した面でも、第4b面として調査を行っている。

検討の結果、それぞれの遺構面にはほとんど時期差がなく、第4b面で検出できた遺構についても、本来、第4面で検出されるべき遺構であると判断できたため、ここでは両者を一括して記述しておく。

遺構面の地形は、南側が高く北側に緩く傾斜する形状を示す。土壤化層である第6a層上面での標高で代表させると、南側中央部で13.8m、北西隅で13.65m、北側中央部で13.6m、北東隅で13.7mを測る。なお、南側はX = -157.070～-157.080周辺を境として0.1m程度の高低差が生じており、この急激な地形の変化は、後述する第5面の微地形の起伏に起因していると考えられる。

検出した遺構のうち、主なものとしては掘立柱建物6棟以上・土器廃棄土坑1基・杭列・溝がある。

各掘立柱建物は、座標北から概ね20°西側に軸を振っており、その他の柱列・溝についても、ほぼ同様の軸が指向されている。

##### 〔掘立柱建物1〕（図26・32）

07-1-2調査区南西隅および01-2調査区にかけて位置する南北方向の建物である。

南西端が調査区外に相当するため、全容を確認できていないが、21～23・25・32・38・40・172・200・233の各柱穴から構成される桁行4間以上、梁間2間の柱配置をとる建物に復元が可能である。建物の柱通りは良く、N22°W方向に軸を持つ。建物の規模は、桁行で8.4m以上、梁間で約3.3m、面積は27.7m<sup>2</sup>を測る。柱芯間隔は桁側で1.9～2.5m、梁側で約1.6mを測る。

各柱穴は、平面形状が隅円方形を呈するものが多く、主軸0.75～0.95m、中軸0.5～0.8mを測り、坑底の標高は東側桁で12.8～13.15m、西側桁で13.05～13.3mを測り、東側桁の柱穴が深く掘り込まれている傾向を示す。柱穴埋土はオリーブ灰色粘質シルトを基調とし、ベース土である第6b-1層と第6b-2層を含むほか、カーボン粒を多く含んでいる。200柱穴を除けば、いずれの柱穴にも柱根および柱痕は認められず、抜き取り後に埋め戻された状況が想定できる。

建物の周囲には、軸をほぼ同じくする18・19溝が存在するが、前項でも述べたように、これらの溝は本来、第3面に帰属する溝であった可能性が高く、建物との有機的な関係の有無については、不明である。

遺物は、172柱穴から土師器杯C（193）、25柱穴から土師器高杯（194）が出土している。193の示す法量からは、飛鳥II期の所産と考えられ、建物の帰属時期を示す公算が高い。

##### 〔掘立柱建物2〕（図27・32）

07-1-2調査区北半部と01-2調査区にかけて位置する南北方向の建物である。

建物の記述に移る前に、述べておくべきこととして、柱穴の検出面の違いが挙げられる。すなわち、X = -157.065周辺を境として北側に位置する柱穴は、地震動による変形が多く、柱穴の検出が困難であったため、第4b面での検出となった。これに加えて、104柱穴は側溝内に位置しており、側溝掘削時に一定掘削を進めた段階で検出している。

01-2調査区の側溝にかかったため一部の柱穴を欠くが、3・9・11・104・111・143・144・147・150～153（167）・160・178・205～209・237の各柱穴から構成される桁行8間、梁間2間の柱配置をと

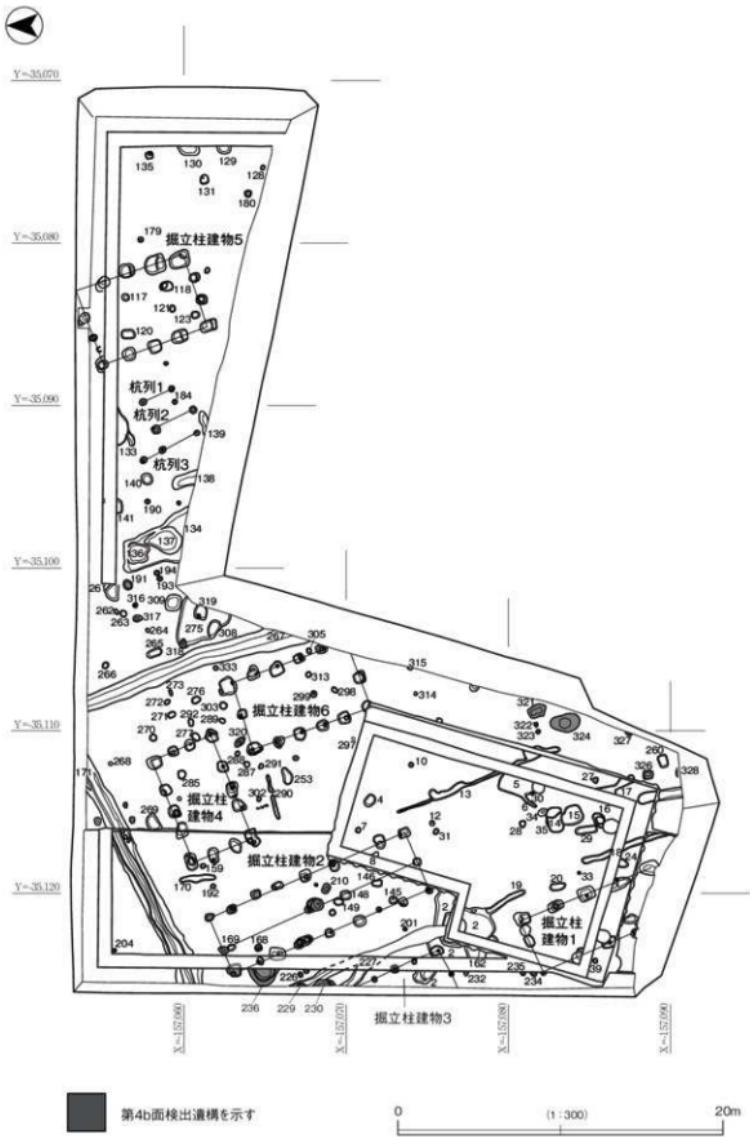
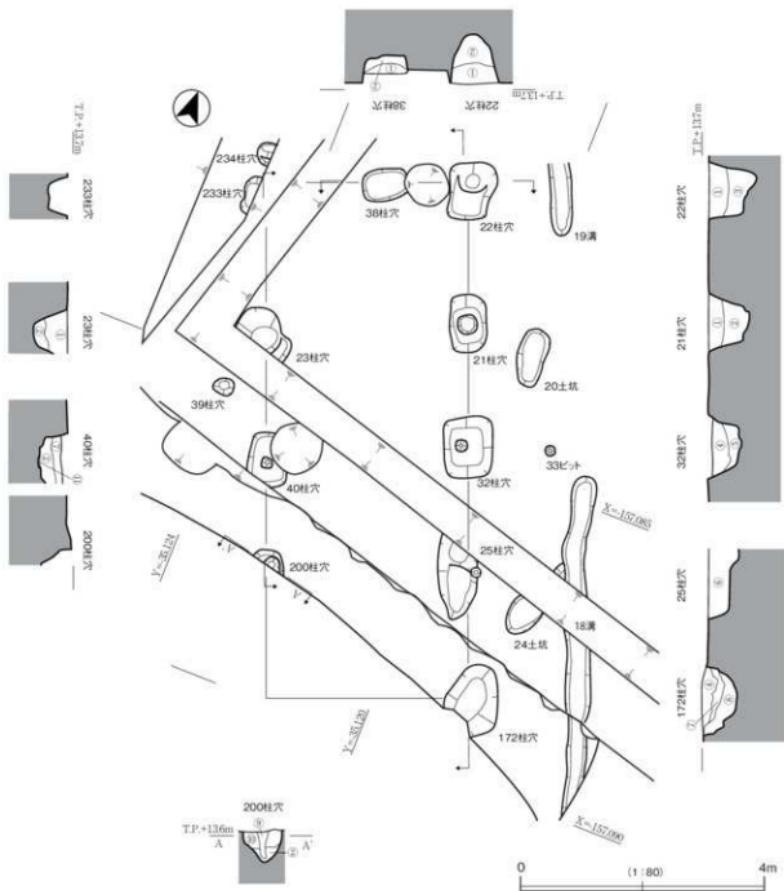


図25 第4・4b面 平面図



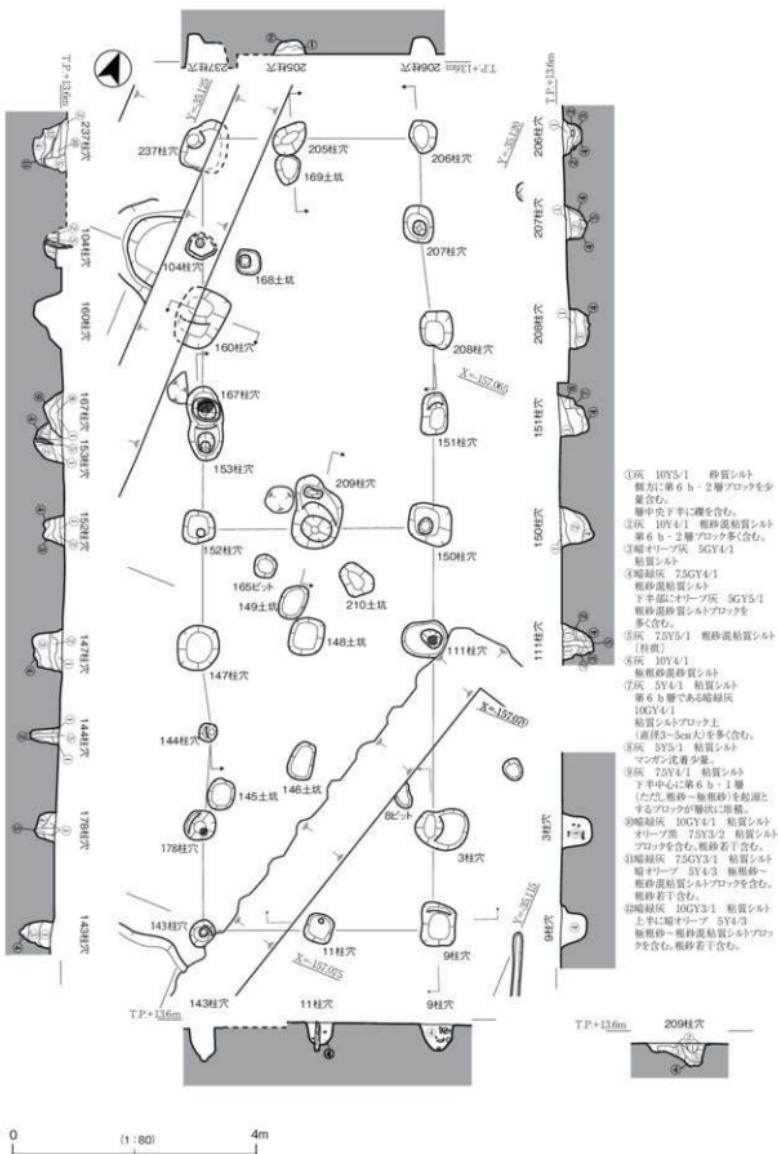


図27 第4面 拔立柱建物2 平・断面図

る建物に復元が可能である。西側桁の柱通りが良いのに比して、東側桁の柱通りは悪い。柱通りの良い西側桁で代表させると N22°W 方向に軸を持つ。

建物の規模は、桁行で約13.4m、梁間で約3.8m、面積は50.9m<sup>2</sup>と突出している。柱芯間隔は桁側で1.75mを中心にして1.1~2.4m、梁側は1.9mを中心にして1.6~2.1mを測る。

各柱穴は、平面形状が隅円形を呈するものが多く、長辺0.55~1.2m、短辺0.4~0.8mを測り、坑底の標高は東側桁で12.95~13.15m、西側桁で13.15~13.3mを測る。概して西側桁の柱穴のはうが0.2m程度浅く掘り込まれている傾向にある。なお、建物の北側から4間目の柱と梁間の柱に対応する位置で209柱穴を検出している。この柱穴は規模も大きく、深さもその他の柱穴と比較して遜色ないあり方を示していることから、屋内棟持柱の可能性がある。柱穴埋土は灰色ないしは黄灰色の砂質シルトを基調とし、ベース土である第6b-1層と第6b-2層を含むほか、カーボン粒を多く含んでいる。

11・104・153柱穴には、柱根が残存しており、111・144・178は柱痕が認められる。その他の柱穴では、柱の沈み込みによる痕跡と捉えられる落ちに対応する箇所でも、断面に柱根が認められなかったことから、抜き取り後に埋め戻された状況が想定できる。

建物の周囲には、軸をほぼ同じくする13溝が存在するが、前述のように、これらの溝は、本来、第3面に帰属する溝であった可能性が高く、建物との有機的な関係の有無については不明である。

加えて、後述する掘立柱建物4は、西側梁が本建物の桁東北半とほぼ合致することから、詳細は不明ながら、相互に有機的な関係を有していた可能性もある。

遺物は、143柱穴から須恵器杯G身(195)と考えられる個体が出土している。口縁部を欠くため、詳細は不明ながら、飛鳥II期の所産と考えられる。建物の帰属時期を示す公算が高い。

#### 〔掘立柱建物3〕 (図28・32、図版20)

07-1-2 調査区中央部西隅に位置する南北方向の建物と想定できる。

西半分が調査区外に相当するため、全容を確認できておらず、後述する掘立柱建物5に伴う柵列のような性格のものである可能性もあるが、231柱穴の存在から105・177・199・228・231の各柱穴から構成される桁行4間以上、梁間2間以上の柱配置をとる建物の可能性を考えた。建物の柱通りは良く、N24°W方向に軸を持つ。

建物の規模は、桁行で4.3m以上、梁間で1.6m以上、面積は6.9m<sup>2</sup>以上を測る。柱芯間隔は、桁側で1.7~2.0m、梁側で2.0mを測る。

各柱穴は、平面形状が不整円形を呈するものが多く、その他の掘立柱建物柱穴と比較すると、概して小振りで不定形である。柱穴の検出長は、177柱穴が突出して大きく、主軸0.8m、中軸0.55m、坑底の標高が13.15mを測る。東側桁の柱穴が深く掘り込まれている傾向を示す。柱穴埋土は灰色シルトを基調とし、ベース土である第6b-1層と第6b-2層を含み、カーボン粒を多く含んでいる。いずれの柱穴にも柱根ないしは柱痕が認められ、105・177・199の各柱穴からは、一辺0.1~0.2m前後の柱根が出土している。なお、105柱穴は側溝掘削時に検出したものであり、上半部を大きく欠いてしまった。

建物の周囲には、軸をほぼ同じくする227溝が存在するが、前項でも述べたように、この溝は本来第3面110溝と連結する溝であった可能性が高く、建物との有機的な関係の有無については不明である。また、後述する2廐棄土坑の外縁部に巡る浅い落ち込みと177柱穴の重複関係については、明らかになし得なかった。

遺物は、上述した177・199柱穴から出土した遺存状態の良い柱根を掲げた(210・211)。210は心持

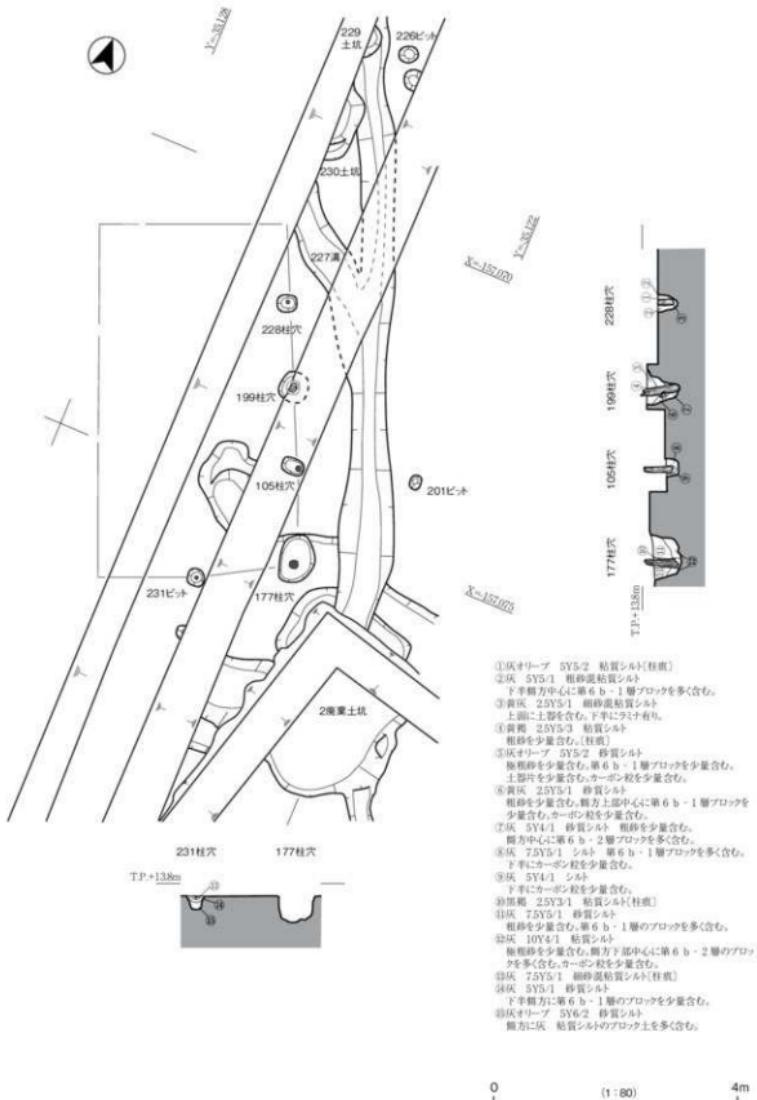


図28 第4面 据立柱建物3 平・断面図

ち材で底面は斜めに切り落とされている。全体的に表面の腐食が進行しており、明瞭な加工痕は認められなかった。211は樹心を外した材を用いており、底面は210同様に斜めに切り落とされている。底面には加工痕が明瞭に認められ、幅2.4cmの鈍い刃先痕が一定方向に施されている。

210・211とともに、広葉樹材を用いている。

また、細片であったため図示し得なかつたが、199柱穴の柱に沿うようにして土師器杯と考えられる破片が出土している。出土土器が細片を主体としていたため、時期の限定はなし得ない。

#### 【掘立柱建物4】(図29・32)

07-1-2調査区北半から07-1-3調査区北半にかけて位置する東西方向の建物である。

154~158・246・259・278~284の各柱穴から構成される、桁行4間、梁間3間の柱配置をとる。建物の柱通りは良く、N68°E方向に軸を持つ。

建物の規模は、桁行で6.85m、梁間で3.9m、面積は26.7m<sup>2</sup>を測る。柱芯間隔は桁行で1.2~2.1m、を測るが、隅柱と桁を構成する柱穴との間隔は2.0mとやや広く設定されている。その一方で、中間に位置する柱芯間隔は、1.2~1.45mを測る。梁間の柱芯間隔は、1.15~1.5mを測る。

各柱穴は、平面形状がやや不整な隅円方形を呈するものが多く、長辺0.65~1.1m、短辺0.55~0.8mを測る。坑底の標高は南側桁で13~13.3m、北側桁で12.9~13.25mを測り、北側桁の柱穴が深く掘り込まれている傾向を示す。柱穴埋土は灰~黄灰を基調とするシルトで、ベース土である第6b-1層と第6b-2層を含むほか、カーボン粒を多く含んでいる。いずれの柱穴にも柱根および柱痕は認められず、抜き取り後に埋め戻された状況が想定できる。なお、一部の柱穴は第3面においてすでに確認することができていた。第5層の層厚は、本建物付近では0.05m以上を測ることから、調査時の誤謬とは考えにくく、第5層形成時に建物が営まれたか機能していた可能性が高いことを示唆している。同様の様相は後述する掘立柱建物6でも確認している。

建物の周囲には北西側に170溝、南側に290溝などが存在するが、建物との軸が若干ずれており、有機的な関係の有無については、不明である。

遺物は、各柱穴から少量の須恵器・土師器片が認められたが、図示不能な細片のため、時期等を比定するにはいたっていない。しかしながら、上述したように柱穴の検出状況の差異から、掘立柱建物1・2・3・5と比較すると、時期的にやや後出する可能性がある。

#### 【掘立柱建物5】(図30・32)

07-1-1調査区中央部に位置する南北方向の建物である。

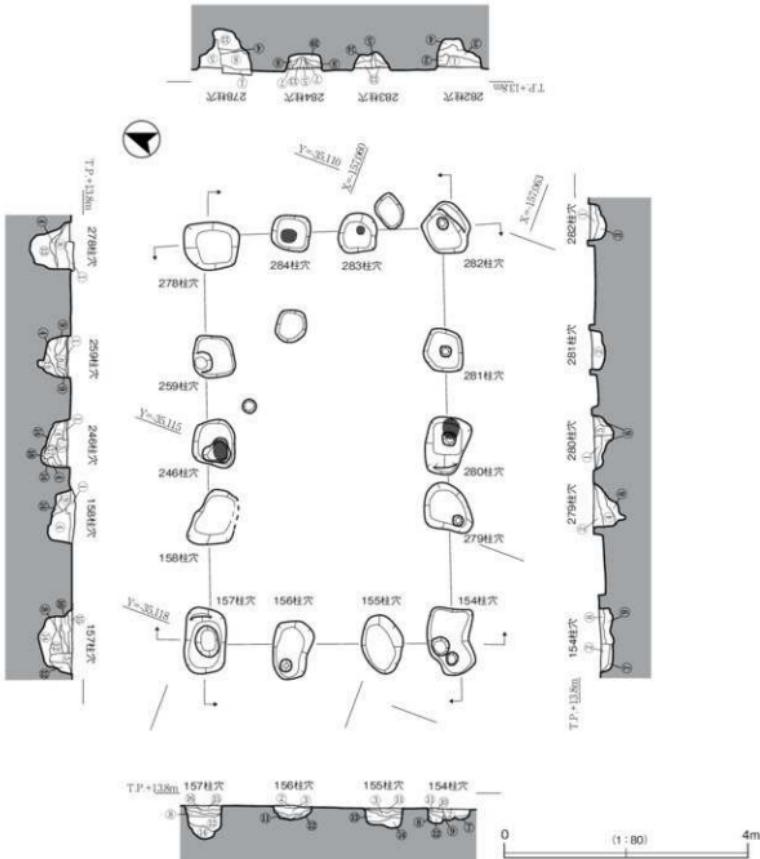
北東側の隅柱が調査区外に相当するため、全容を確認できていないが、114~116・119・122・124~127・195~198・238の各柱穴から構成される、桁行4間以上、梁間3間の柱配置をとる建物に復元が可能である。東側柱穴掘方の配置にややばらつきはあるものの柱通りは良く、N20°W方向に軸を持つ。

建物の規模は、桁行で7.0m、梁間で4.7m、面積は32.9m<sup>2</sup>を測る。柱芯間隔は桁側で1.5~1.9m、梁側で1.25~1.8mを測る。

各柱穴は、平面形状が隅円方形を呈するものが多く、全体的に桁を構成する柱穴が大きく、梁を構成する柱穴が小さいという傾向が認められる。

桁を構成する柱穴の平面規模は、長辺0.8~1.3m、短辺0.6~1.1mを測り、一方の梁を構成する柱穴は、長辺0.5~0.65m、短辺0.4~0.55mを測る。

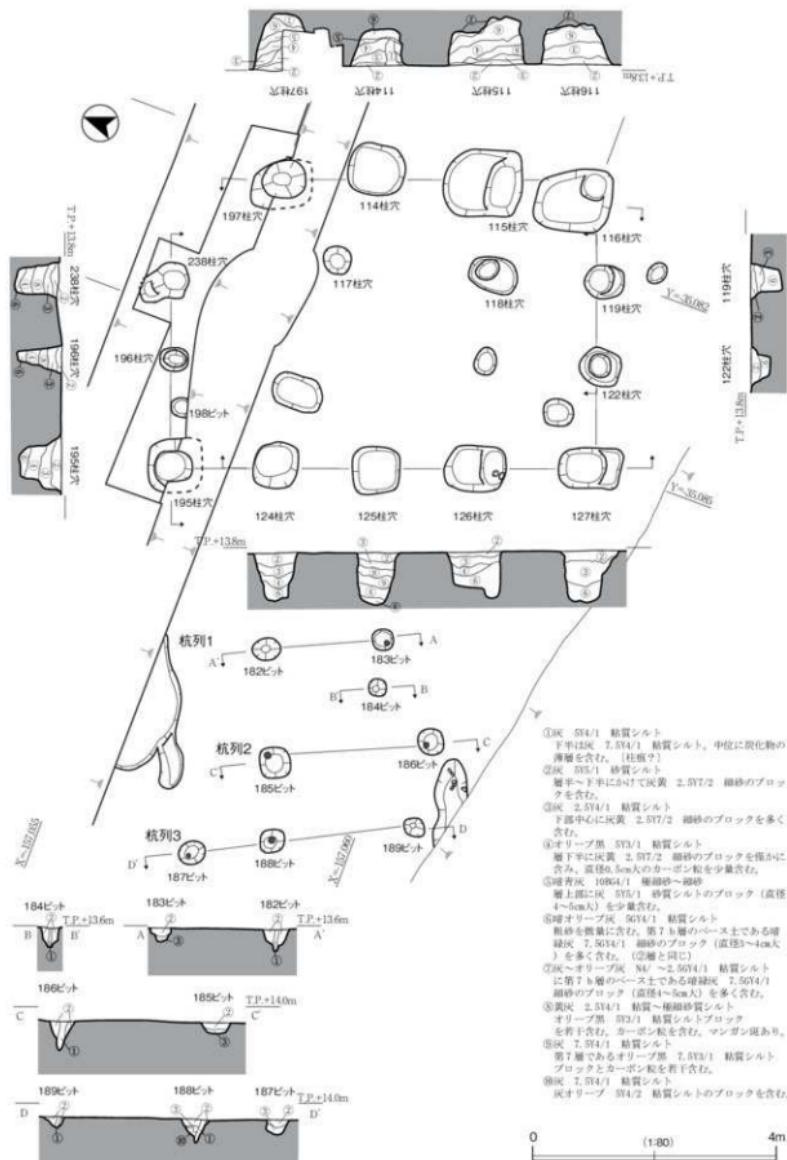
坑底の標高は概ね13.0mを中心として、12.85~13.15mを測る。114柱穴が僅かに浅く掘り込まれて



- (1)灰 SY4/1 積質シート・樹脂砂  
層半ばに第6 b - 1層のブロックを少量含む。カーボン粒を含む。  
(2)灰 SY5/1 積質シート  
第6層・第6 b - 1層のブロックを多く含む。  
(3)灰 DY4/1 積質シート  
第6層・第6 b - 1層のブロックを微量含み、無機砂を微量に含む。  
(4)灰 TSY4/1 積質シート  
前方中央に第6 b - 2層のブロックを少量含む。  
(5)灰 SY5/1 樹脂混筋網砂・積質シート  
第6層のブロックを少量含む(柱底)。  
(6)灰 SY4/1 中砂混粘質シート  
第6層・第6 b - 1層のブロックを多く含む。  
右奥灰 2SY5/1 相模灘混粘質シート  
(7)灰 SY5/1 積質シート  
第6層・第6 b - 1層のブロックを多く含む SY6/2 積質シートのブロックを少量含む(柱底か?)。  
右奥灰 2SY5/1 積質シート  
第6 b層である灰 SY6/2 積質シートのブロックを多く含む(柱底か?)。  
右奥灰 NC 積質シート  
上半中心に第6 b層である灰 SY6/2 積質シートのブロックを多く含む。

- 右灰 7.5YS/1 積質シート  
右灰 10YS/1 積質シート  
第6 b層である灰 SY6/2 積質シートのブロックを多く含む。  
右灰 N/A 積質シート  
上半に第6 b層である青灰 5IG5/1 積質シートのブロックを多く含む。  
右奥灰 2IGV4/1 積質シート・積質シート  
右奥灰 2SY5/1 積質シート  
右奥灰 SY4/1 積質シート  
第6層である区オーリープ間(SY4/1~3/1)のブロックを多く含む。  
下半中央に第6 b層である灰 7.5YS/1 積質シートのブロックを多く含む。  
右奥灰 2SY4/1 相模灘混粘質シート  
第6層である区オーリープ間 SY4/1~3/1 のブロックを多く含む。  
下半に第6 b層である灰 7.5YS/1 シルトのブロックを多く含む。  
右灰 2SY6/1 積質シート  
右奥灰 SY4/1 積質シート  
右奥灰リーフブロック SY4/1 積質シート  
第6 b - 2層のブロックを多く含む(柱底)。  
右灰 7.5YS/1 無機砂混粘質シート  
第6層のブロック(柱底か?)を斜面に含む(ほぼ第6 b - 2層)。

図29 第4面 振立柱建物4 平・断面図



いるほかは、検出面から約0.8mと深い掘込みを有している点が、特徴的である。

柱穴埋土は、灰色を基調とするシルトで、ベース土である第6b-1層と第6b-2層を含むほか、カーボン粒が多く含んでいる。114柱穴に柱痕の可能性のある落ちが検出面で確認できたのを除けば、いずれの柱穴にも柱根および柱痕は認められず、抜き取り後に埋没した状況が想定できる。さらに、柱痕は認められず、柱の沈み込みによって形成されたと考えられる坑底の落ち上部でも柱痕は認められなかった。

建物の周囲および内側には、土坑・ピットが認められた。このうち、大半は深度が0.05~0.01mの浅い落ち込みであったが、例外的に、深い掘方を有する182~189ピットが存在した。

これらのピットは杭程度の細い材と考えられる痕跡が例外なく認められたことから、杭列として考えることができ、182・183ピットを杭列1、185・186ピットを杭列2、187~189ピットを杭列3とした。それぞれの杭列の軸は、杭列1・2がN24°W、杭列3がN28°Wを示し、掘立柱建物5の軸とは若干ずれるものの、位置関係から掘立柱建物5に伴うものである可能性が想定できる。なお、これらの杭列は、地震動によって構造面の状態が良好でなかったために、第4b面で検出を行なっている。

遺物は116柱穴から須恵器の甕(196)、126柱穴から磨石の可能性がある礫(208)が出土している。甕の細片であることから、帰属時期は不明である。

壁面断面を通して観察した埋土の状況からは、第4面段階の建物であることはほぼ間違いないく、今回検出した掘立柱建物の中でも、古い段階に帰属するものであることが想定できるとともに、柱穴掘方の規模がその他の掘立柱建物と比較して極めて大きく、かつ深いことは、集落の性格を考えるうえで、非常に重要な資料を得ることができた。

#### 【掘立柱建物6】(図31・32、図版21)

07-1-3 調査区北半にかけて位置する南北方向の建物である。

南東端の柱穴が調査区外に相当するため、全容を確認できていないが、250・252・255~257・274・293・294・300・304・306・307・312の各柱穴から構成される、桁行5間、梁間2間の柱配置をとる建物である。建物の柱通りは良く、N20°W方向に軸を持つ。

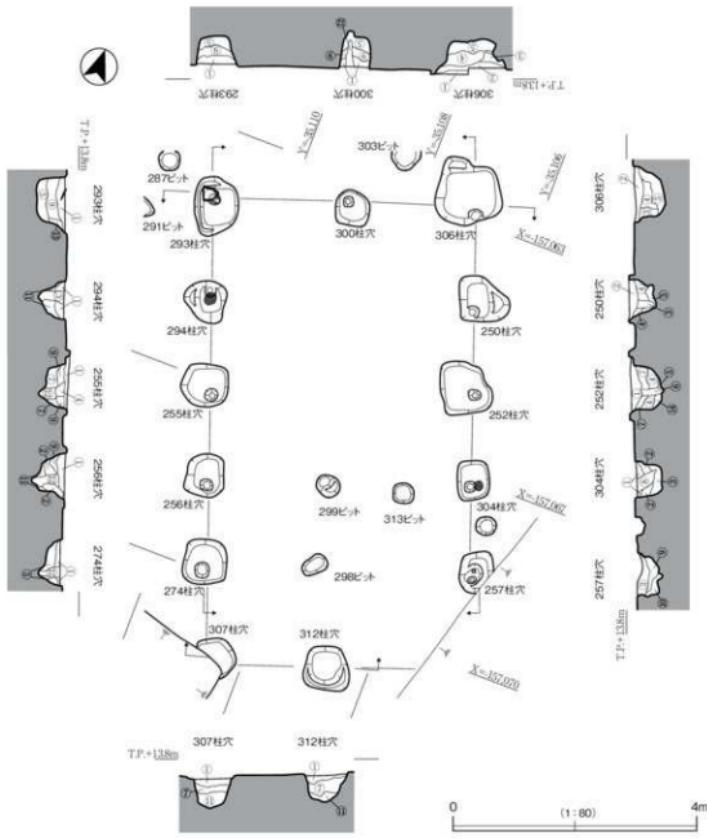
建物の規模は、桁行で7.6m、梁間で4.3m、面積が32.7m<sup>2</sup>を測る。柱芯間隔は、桁側で1.35~1.75m、梁側で1.9~2.25mを測る。

各柱穴は、平面形状が隅円形を呈するものが多い。平面規模は、306柱穴が一辺1.1×1.1mと突出して大きい。他は、長辺0.65~0.95m、短辺0.55~0.8mとやや小振りである。坑底の標高は、東側桁で13.15~13.3m、西側桁および南北梁で13.0~13.1mを測り、東側桁の柱穴がやや浅く掘り込まれている傾向を示す。柱穴埋土は、黄灰~褐灰を基調とするシルトで、ベース土である第6b-1層と第6b-2層を含むほか、カーボン粒が多く含んでいる。

特に、257柱穴は、埋土にカーボン粒が多く含み、桃核などの植物遺体や土製品等を多く含むことから、意図的に埋め戻しが行われた可能性が想定できる。その他の柱穴では柱根は残存していないが、柱痕は多くの柱穴で確認できた。なお、一部の柱穴は第3面においてすでに確認することができていた。第5層の層厚は、本建物付近では0.05m以上を測ることから、調査時の誤謬とは考えにくく、第5層形成時に建物が営まれていたか、機能していた可能性が高いことを示唆している。

遺物は、他の掘立柱建物と比較して図示可能なものが多い。

土器は、306柱穴から土師器杯C(197)、297柱穴から土師器杯C(198)が出土している。いず



- ① 黄灰、25Y5/1、粗粒混凝土～粘質シルト  
第6層・第6b・1層ブロックを多く含み、カーボン粒を少量含む。  
② 暗灰、10YR5/1、無粗骨混凝土～粘質シルト  
カーボン粒を多く含む。  
③ 黄灰、25Y5/1、粗粒混凝土～粘質シルト  
第6層・1層ブロックとカーボン粒を多く含む(柱底)。  
④ 黄灰、25Y5/1、中砂混合質シルト  
上半部294柱穴に第6層ブロックを多く含む。  
⑤ 灰、5Y4/1、中砂混合質シルト  
下半部に第6b・2層ブロック、上半部に第6層ブロックを多く含む。  
⑥ 暗灰、10YR5/1、無粗骨混凝土～粘質シルト  
カーボン粒と粗砂を多く含む(柱底)。  
⑦ 黄灰、25Y5/1、粗砂混粘質シルト  
カーボン粒を多く含む。

- ⑧ 暗灰、10YR5/1、粘質シルト  
カーボン粒・鐵土・粗砂を含む。第6層・第6b・1層ブロックを多く含む(柱底)。  
⑨ 灰、5Y5/1、粘質シルト  
カーボン粒を多く含み、鐵土粒を少量含む。砂状土質品・ガラス小片等を含む。  
⑩ 暗オリーブ、5Y5/2、粘質シルト  
飼方中に第6b・1層ブロックを多く含む。  
⑪ 黄灰、25Y5/1、中砂混粘質シルト  
上層及下層半部に第6層ブロックを多く含む。下半部に第6b・2層ブロックを少量含む。  
⑫ 暗灰黄、25Y5/2、中砂混粘質シルト  
下半部に粗砂を多く含む。  
⑬ オリーブ、25GY5/1、粘質シルト  
第6b・1層ブロック(直徑2m)を多く含む。

図31 第4面 据立柱建物6 平・断面図

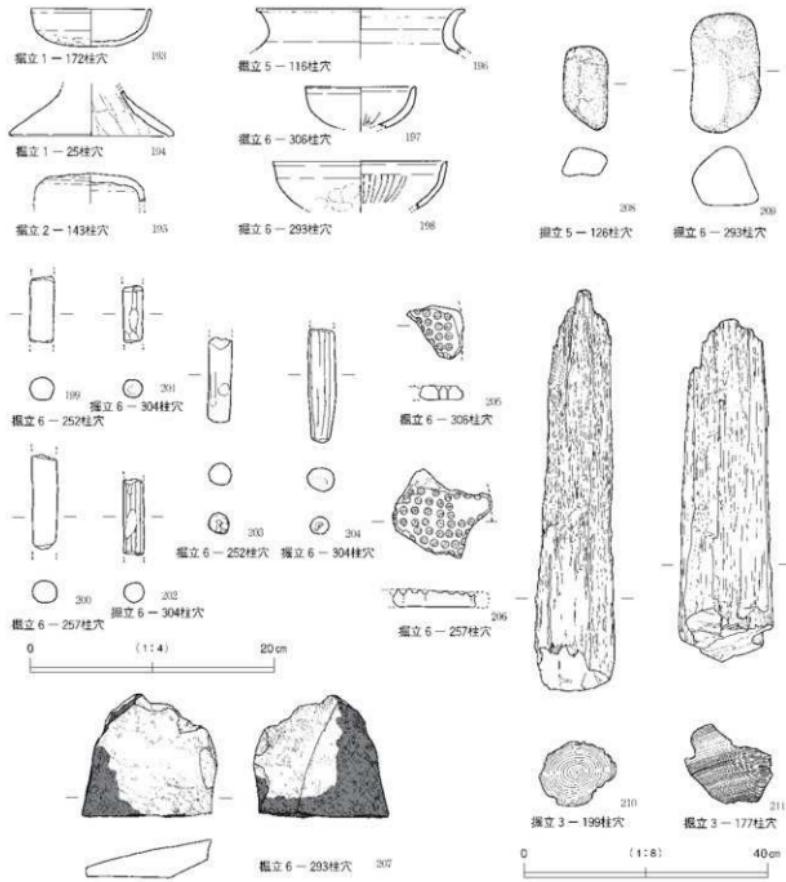


図32 第4面 挖立柱建物 出土遺物

れも残存率が悪く、全容は窺い知れない。飛鳥II期の所産と考えられる。

293柱穴からは、このほかに砂岩質の礫（207・209）が出土している。207は埋土最上部から出土した。側面も合わせると4面の平坦面が認められる。擦痕は特に認められないが、平坦面が大きく、安定していることから、礎板としての役割を本来有していたのかも知れない。圓面上アミ伏せの表現を施した箇所は被熱を受け、黒色化している。209は、断面不整な台形を呈し、各面に平坦面が認められる。裏面を除く各面には、わずかな凹面が認められ、使用による痕跡を示す可能性もある。擦痕は認められない。

この他、棒状土製品（199～204）、ガラス小玉鋳型（205・206）が出土している。出土構造は252・257・304・306の各柱穴である。特に、257柱穴からは、ガラス小玉鋳型と棒状土製品が近接した位置

で出土しており（図版7-2）、両者が関連するものである可能性を示唆している。なお、掲載はしていないものの、257柱穴からは、坑底に貼り付くようにして桃核が多数出土しており、意図的に埋置された状況が想定できる。

棒状土製品は、径によって2.5cm前後を測る大型のもの（199・200・204）と、1.5cm前後を測る小型のもの（201～203）の2者に分けられる。203・204は端部が残存しているが、その調整は粗雑で、粘土板を折り曲げたままで、特別な調整が施されていないため、端面には小さな凹面が形成されている。

205・206はガラス小玉鋳型で、共に端部が残存するが、径を復元し得るほどではない。鋳型孔はおおむね0.4～0.5cmで揃えられており、一定の規格が揃えられている。芯持ち孔は貫通するものとしないものが混在している。鋳型孔は同心円状に配置されているようであるが、残存率の良い206は、既述した92・102・165と同様、端部に接するように $2.8 \times 1.5$ cmの長方形の空白部が設けられており、その周囲はその他の例と同様に、鋳型孔の配置が空白部に規制されて不規則となっている。厚みは1.2～1.5cmと同規模である。

#### 〔267溝〕（図33・34）

07-1-3調査区北半に位置する南北方向の溝で、N20°W方向に軸を持つ。

遺構の記述に移る前に述べておくべきこととして、まず、現地調査時の認識ミスによって第6b層の色調の変容を溝埋土の下部として誤認して掘削を進めてしまったことが挙げられる。ただし、遺構面の検出直後および上部の溝検出時には深さ0.05～0.2mほどの深さで溝が同一方向に伸びていることを確認しており、図示した実際とは異なる部分が生じることとなってしまった。具体的には、検出面から溝底までの深さや、北半部の溝の平面形が直線的なものとなってしまっている。なお、図33に掲げた断面は、検出時当初の正しい掘方を示している。

また、このほかに、267溝と249土坑とはほぼ同じ箇所に位置しており、前項でも述べたように249土坑の長軸も同一方向を向いていることから、本来的に、267溝も第3面に帰属する可能性が高い。

溝の規模は、幅1.3m以上、検出長約14.5mを測る。検出面からの深さは、0.3mを測る。溝底のレベルは不定で、地点によってはほとんど無くなる箇所も認められる。

埋土は、オリーブ黒色を基調とする粘質シルトで、カーボン粒を多く含んでいる。

遺物は、埋土の最上部から少量が出土した。須恵器杯H身（212）、土師器杯C（213）、土師器甕（215）、棒状土製品（214）が出土している。飛鳥Ⅱ期の所産と考えられる。

#### 〔13溝〕（図33・34）

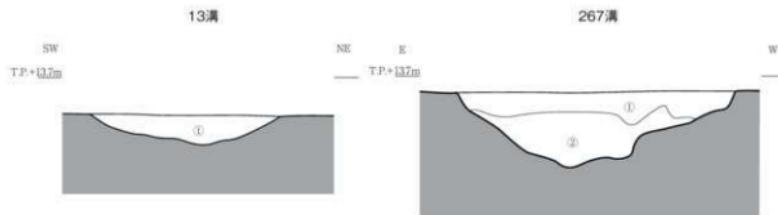
01-2調査区北半に位置する南北方向の溝で、N23°W方向に軸を持つ。検出面からの深さは0.1mを測り、溝底のレベルは不定である。溝の規模は、幅0.3m以上、検出長約10.8mを測る。

埋土は、オリーブ灰を基調とする粘質シルトで、カーボン粒を含んでいる。遺物は須恵器平瓶の口縁部（216）が出土している。時期等詳細は不明である。

#### 〔18・19溝〕（図33・34）

01-2調査区南半に位置する南北方向の溝で、N23°W方向に軸を持つ。途中で途切れているが、同じ溝と考えられる。検出位置および軸から07-1-2調査区で検出した第3面110溝と同一の溝である可能性が高い。検出面からの深さは0.2m弱を測り、溝底のレベルは一定でない。溝の規模は、幅0.35m、検出長は18溝が6m、19溝が2.6mを測る。

埋土は、カーボン粒を多く含んでいる。遺物は細片を中心に出土しており、図化可能なものとして、



①オリーブ灰 2SY3/1 粘質シルト  
粘粗砂を含む。カーボン粒子を多く含む。

①オリーブ灰 2SY3/2 粘質シルト  
粗砂を微量含む。カーボン粒子を多く含む。  
縮灰黄 2SY4/2 粘質シルトブロックを少量含む。  
②灰オリーブ 2SY4/2 粘質シルト  
下半中心に6-8mmのブロックを多く含む。



図33 第4面 溝 断面図

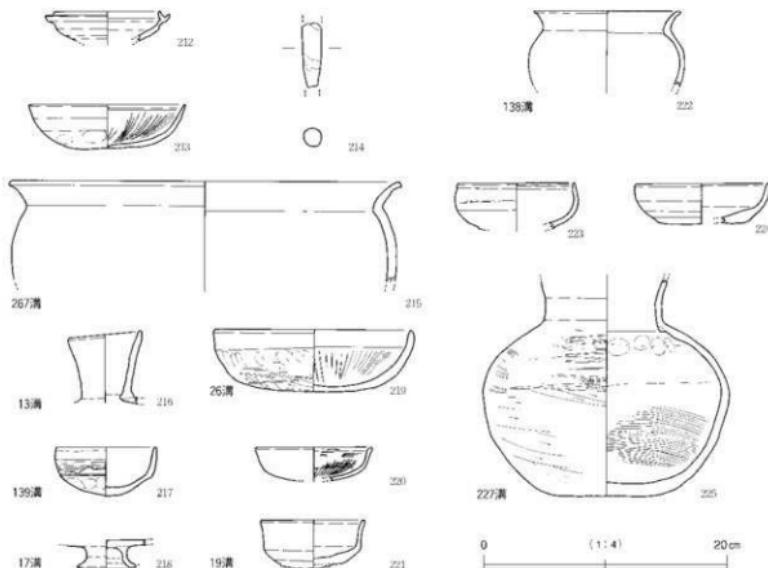


図34 第4面 溝 出土遺物

土師器杯C（220）、須恵器杯G身（221）がある。

〔138溝〕（図34）

07-1-1 調査区西半の南側に位置する南北方向の溝で、南半分が調査区外にかかっている。軸は、N17°W方向に置く。溝の規模は、幅0.75m、検出長1.5m、検出面からの深さは0.1mを測る。埋土は、灰色を基調とする砂質シルトで、カーボン粒を多く含んでいる。

遺物は細片を中心に少量出土している。図示可能なものとしては、222の土師器壺が出土している。飛鳥Ⅱ期の所産と考えられる。

〔139溝〕（図33・34）

07-1-1 調査区の西半の南側に位置する東西方向の溝で、N70°E方向に軸を持つ。西半分は調査区外に続いている。

溝の規模は、幅0.6m、検出長1.5m、検出面からの深さは0.05mを測る。

埋土は灰色の粘質シルトで、カーボン粒を多く含んでいる。

遺物は細片を中心に少量出土している。図示可能なものとしては、217の土師器鉢が出土している。飛鳥Ⅱ期の所産と考えられる。

〔26溝〕（図34）

01-2 調査区から07-1-3 調査区にかけて位置する南北方向の溝で、N10°W方向に軸を持つ。南半分は調査区外に続いている。遺物は土師器杯C（219）が出土している。

〔227溝〕（図34）

07-1-3 調査区西側に位置する南北方向の溝である。西半分は調査区外に続いている。第3面110溝との接合関係は、側溝にかかってしまったため不明である。

遺物は、225の土師器長頸壺が出土している。胴部最大径20cm弱の大形品で、110溝や117溝出土の長頸壺と比較すると整った形を呈している。飛鳥Ⅱ期の所産と考えられる。

〔171溝〕（図35・36、図版15-2・19・20・22）

調査地北西部、07-1-2～3 調査区にかけて検出した東西方向の溝である。N63°E方向に軸を置き、調査区外へ延びている。掘立柱建物4の北側に隣接する。

掘方は2段掘りを示し、下段は鋭角に掘り込まれている。溝の平面形は直線的だが、2調査区の西端で、若干折れ曲がる様子を呈している。

溝の規模は、上段幅1.1～1.3m、下段幅0.2～0.4m、検出長15.5m、検出面からの深さは約0.7mを測る。溝底面のレベルは、南西～北東へと緩やかに傾斜し、その比高差は0.15mである。

埋土は大別して、①～③・⑤～⑧の上層と、④・⑨・⑩の下層の上下2層に大別でき、層界からは有機物の集合体が認められたほか、土器・木器などの遺物が出土している。上層・下層ともにブロック土の混入は少なく、側方を中心に崩落土が認められる程度であることから、意図的に埋め戻された状況はないことが想定できる。

溝の深さは、今回の調査区で検出したものの中ではもっとも深く、平面形も直線的であることから、集落の構成に深く関連するものであることが明らかである。

遺物は、上層から細片を中心として、コンテナに換算して半箱程度出土している。

出土位置が明確なものは、図35に示しているが、いずれも、上述した上層と下層の層境に帰属するもので、大きくはA～Cの3箇所に分かれて出土している。Aからは鉄斧の膝柄、土師器の壺、Bからは

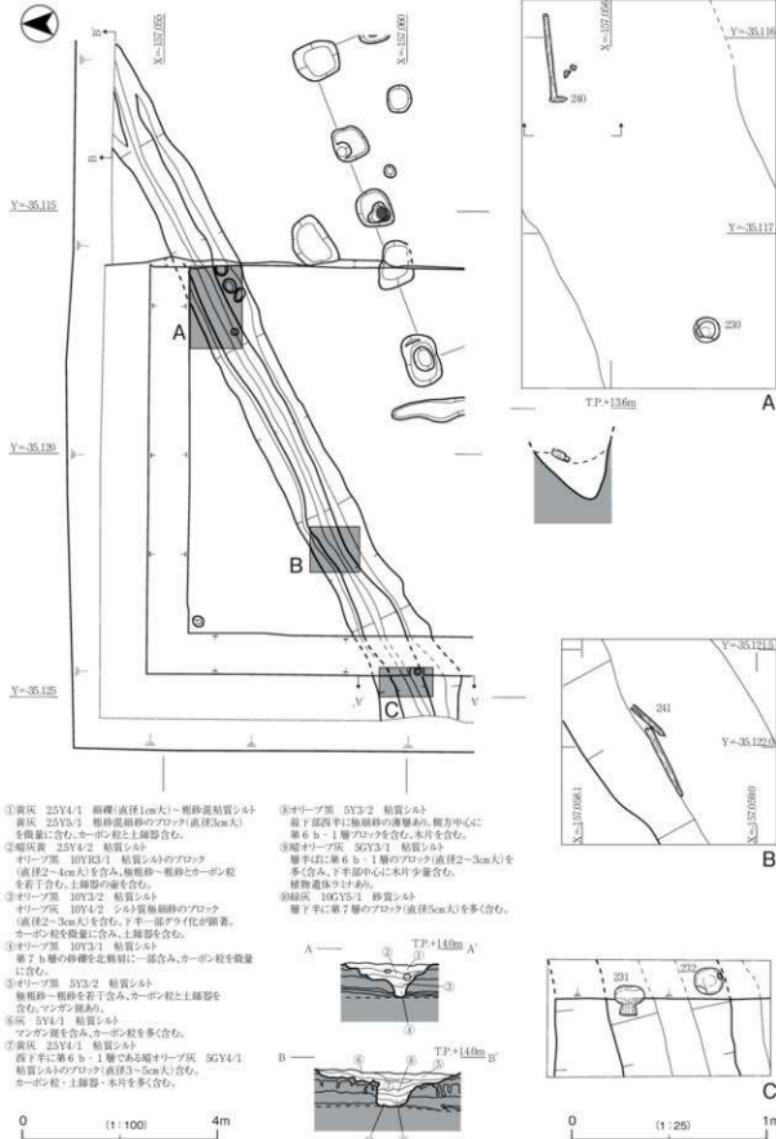


図35 第4面 171溝 平・断面図

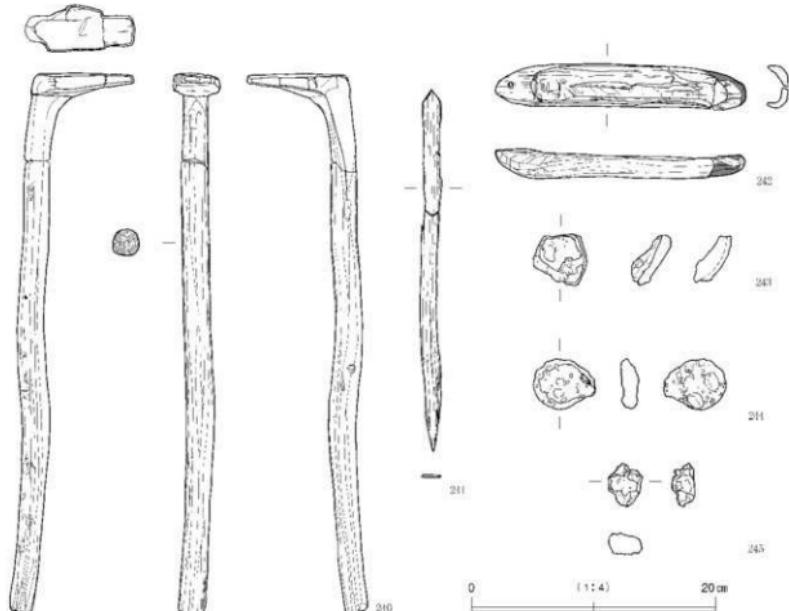
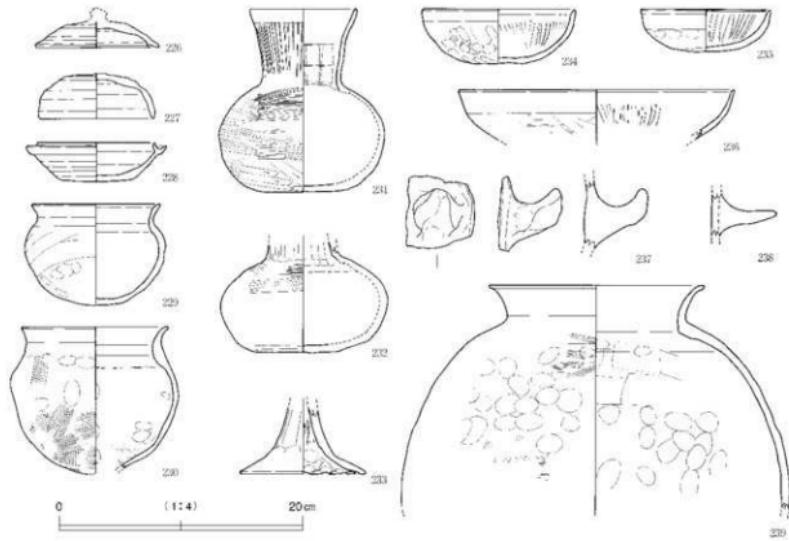


図36 第4面 171溝 出土遺物

斎串、Cからは土師器壺が出土している。

出土遺物は、図36に掲げた。

須恵器は杯G蓋（226）、杯H蓋（227）・身（228）、土師器は壺（229・230）、長頸壺（231・232）、高杯（233）、杯C（234・235）、頬ないし壺の把手（237）、羽釜（238）、壺（239）が出土している。これらの土器は、須恵器杯の様相や土師器杯・壺の様相から飛鳥Ⅱ期に帰属する可能性が高い。

土器以外では、木器・鉈滓が出土している。

前者は、上述した鉄斧の軸柄（240）、斎串（241）のほか、船形木製品（242）が出土している。240は、心持の枝材を削りこんで整形しており、袋状鉄斧の身を装着する箇所は、ソケット状に側面を削り出している。242は、柾目取りの材を削り込んで作られ、船首が船尾よりもやや鋭角に削り込んで作り出されるなど、表現は精緻である。また、舳先には、意図的に直径0.2cm大の孔が穿たれている。

一方後者の鉈滓は、243～245の3点が出土している。243・244は椀形滓の炉底付近と考えられ、磁着度は3を測る。245は、ガラス質に発泡している箇所が認められることから、薦羽口の破損品とも考えられるが、詳細は不明である。

以上の出土遺物から、171溝は飛鳥Ⅱ期に掘削され、一定の期間機能した後に土器や工具などが廃棄され、次第に埋没したものと考えられる。

#### 〔137廃棄土坑〕（図37・38、図版16）

07-1-1 調査区西側に位置する土坑である。その他の土坑と比較して遺物を多く含み、且つ完形のものが多いことから、廃棄土坑と認定した。南側の一部は調査区外にかかっている。

掘方の平面形は、不整形な長方形で、断面形状は2段掘りを示し、1段目の浅い掘り込みの中に、近接する2基の掘り込みが存在する。

土坑の規模は、上段幅2.0～2.8m、検出長3.8m、検出面からの深さは0.25mを測る。

埋土は大別して、1段目の掘り込みに相当する①・②の上層と、2段目の掘り込みに相当する③・④の下層の上下2層に大別できる。上層は粗粒の堆積物も含むが、下層は淘汰の良いシルトで埋没する。

遺物は、上層からは破片が中心に、下層からは完形に近いものが出土している。なお、完形に近い遺物の出土地点は2段目の掘り込み部分に集中している。

図38には出土遺物のうち、図示可能で主要なものを掲げている。須恵器（246～253・271）、土師器（254～270・272・273）がある。

須恵器は杯Gが多く、杯Hは253の身のみである。246・250にはそれぞれ外面に弧線ないしは直線のヘラ記号が施される。

土師器は杯C（254～261）、杯A（262・263）、壺（267・268）、高杯（264～266）、壺（269）、輪状土製品（270・272）、竈（273）がある。杯・高杯は器表面の残存状況が良好なものが多く、見込みの連結輪状暗文が確認できる。270・272の輪状土製品は、生駒山西麓産の胎土を用いている。270は上端面に同心円状のタタキが残存する。273は竈の曲庇収束部付近である。

以上の土器は、須恵器杯G・H、土師器杯Cの法量から飛鳥Ⅱ期の所産と位置づけられる。

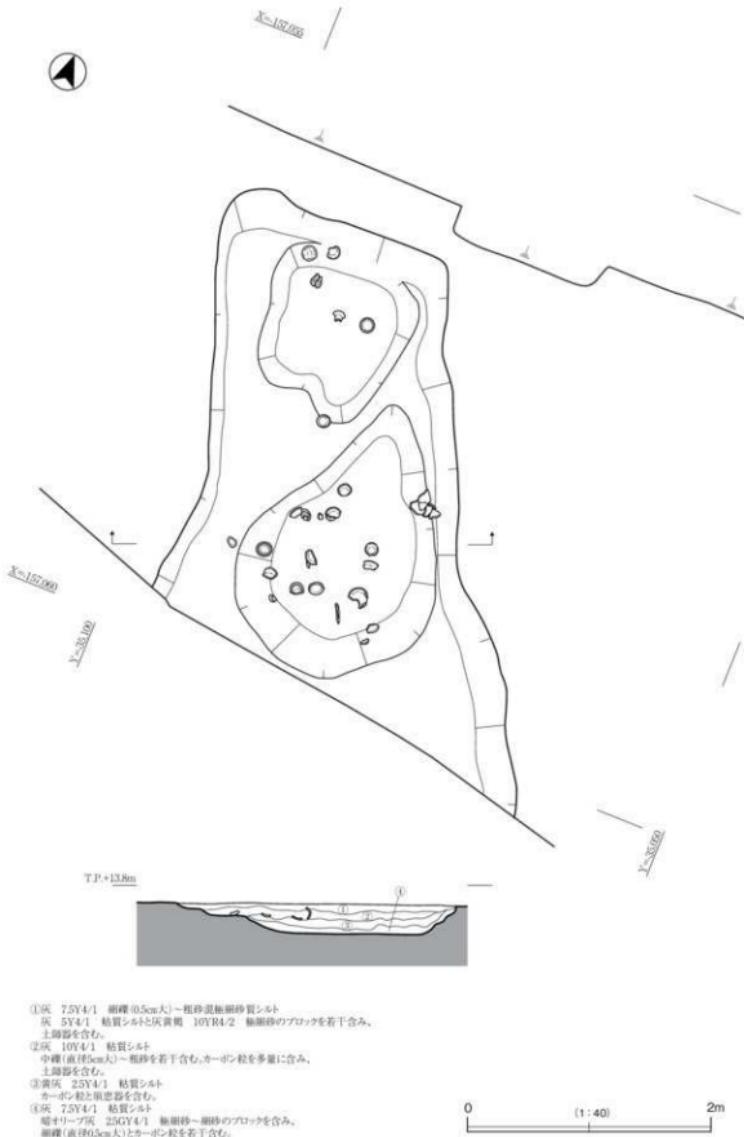


図37 第4面 137廃棄土坑 平・断面図

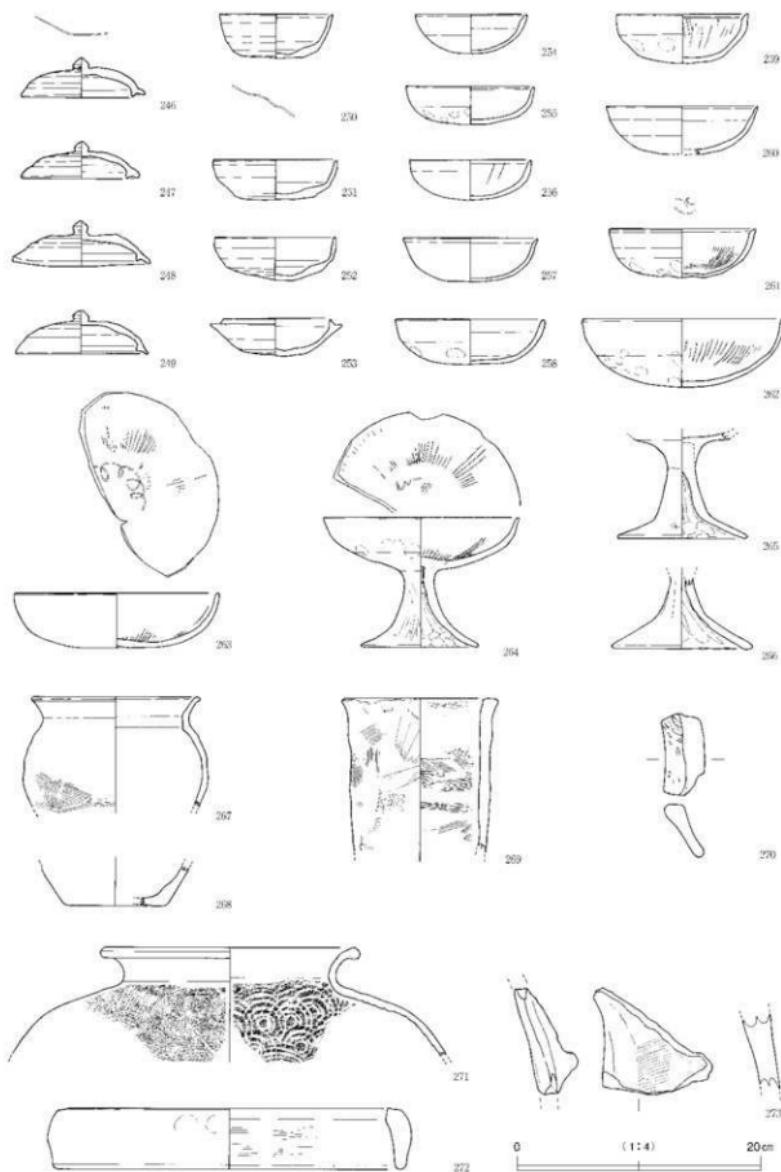


図38 第4面 137廃棄土坑 出土遺物

## 〔2廃棄土坑〕（図39～42、図版17・18）

01-2調査区中央部から07-1-2調査区の南半西側に位置する土坑である。その他の土坑と比較して遺物を多く含み、且つ完形のものが多いことから、前述した137廃棄土坑と同様、廃棄土坑と認定した。土坑の中央部分は、01-2調査区の側溝にかかってしまったため、全容は明らかでない。

掘方の平面形は不整形な長方形で、断面形状は緩やかな皿形を示す。なお、07-1-2調査区では、掘方のさらに外側に、深さ0.05m程度の浅い落ちを確認したが、本土坑に伴うものかどうかは判然しない。

土坑の規模は、幅約2.0m、検出長3.6m、検出面からの深さは0.25mを測る。

埋土は大別して上下2層に分かれ、遺物は下層を中心出土している。

図40～42には出土遺物のうち、図示可能で主要なものを掲げている。図40には須恵器（274～298）および須恵質のもの（299）を掲げ、図41・42には土師器（300～324・326）および土製品（325）を掲げている。

須恵器は、杯G（274～279・285～290）・H（280～284・291～296）ともに、ほぼ数量的に拮抗している。280・284・289・290・295・296には、それぞれ外面に弧線ないしは直線、×字状、円弧のヘラ記号が施されている。このほかに甌（297）、捏鉢（298）が認められる。299は器種不明の土製品である。焼成は須恵質であるが、全体的に焼成は不良で色調は灰色を呈している。

土師器は、杯C（300・301～306・308・309）、杯G（302・307）を中心に、杯A（310・311）、鉢A（312～314）、甌（315～317・326）、高杯（318～322）、羽釜（323・324）、壺（325）が出土している。

杯Cは、300・305が口径8.0、9.6cmを測る小型品であるほかは、11.0～12.5cmを測る中型品である。

甌は、いずれも下半部を欠くため、全容を窺い知れないが、口径と最大径から、小型の316、中型の317、大型の315・326の3者が認められる。326は把手を有するもので、体部下半の様相から鍋とすべきものかも知れない。

羽釜は、323・324の2点を図化した。いずれも生駒山西麓産の胎土を用いる。

壺（325）は、成形・調整・胎土・焼成の各点から、後述する162土坑出土の壺と同一の個体と考えられる。端面を有していることから、焚口を形成する脚部に相当する部位であろう。

以上の遺物は、須恵器杯、土師器杯の示す様相から飛鳥Ⅱ期の所産と考えられる。

## 〔162土坑〕（図39・42、図版18）

07-1-2調査区南半西側、上述した2廃棄土坑の西側に隣接して位置する土坑である。土坑の東西端は01-2調査区との境および側溝にかかっていたため、全容は明らかでない。

掘方の平面形は、不整形な長方形で、断面形状は逆台形を示す。

土坑の規模は、幅約0.65m、検出面からの深さは0.2mを測る。

埋土は、大別して、カーボン粒を多く含む①・②層の上層と、ベースの第6b層ブロック土を多く含み、カーボン粒を含まない③層の下層の2層に分かれ。

図39に示したように、本土坑からは、移動式壺の上半部が、正置された状態で出土している。この壺は下層が堆積した後に置かれており、検出面と口縁部が揃えられている。

図42の327は、移動式壺である。上述した2廃棄土坑より出土した破片と掛口が接合している。釜穴上端部はやや外傾し、その端面には、前述した270の輪状土製品と同様、同心円当其痕を施している。

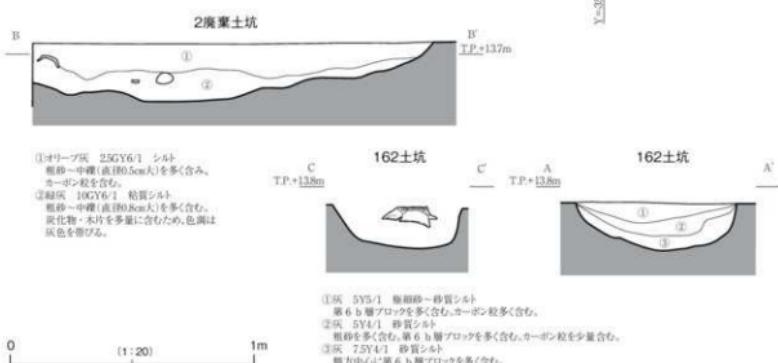
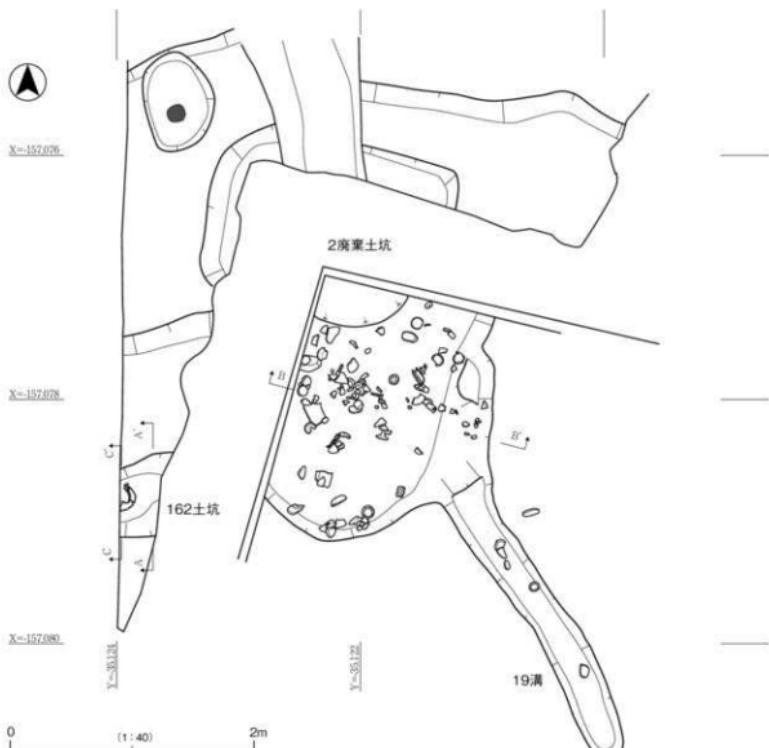


図39 第4面 2廃棄土坑・162土坑 平・断・立面図

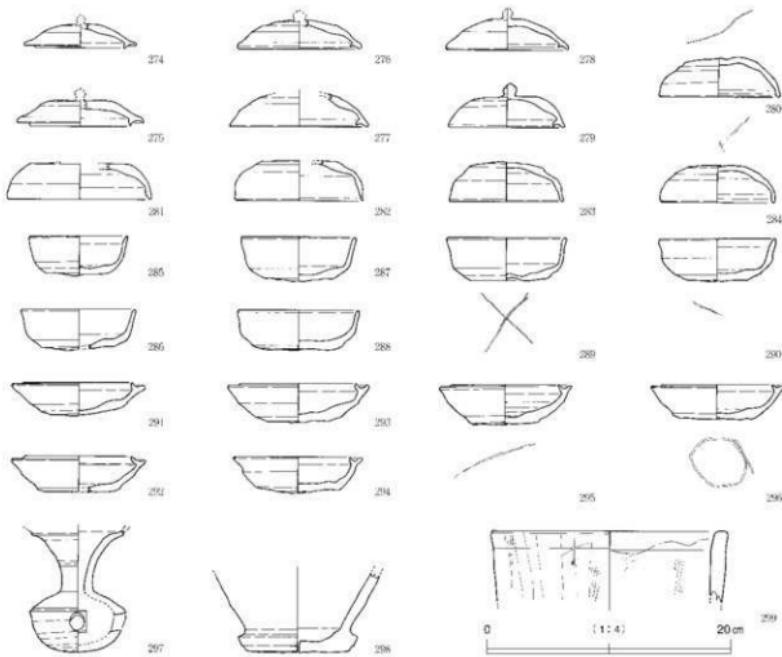


図40 第4面 2廃棄土坑 出土遺物（1）

把手は、やや肉厚の断面長方形に近いものを、中心よりもやや前面にずれた位置に貼り付けている。焚口の内面には幅3cm前後の肉厚の突出した段を設けており、前述した325と同様の作りを為している。上部の底は曲底を採用する。胎土は、角閃石を含む生駒山西麓産のものである。

本土坑からは、壺のほかに遺物が認められなかったため、詳細な帰属時期は不明である。しかしながら、2廃棄土坑出土の遺物との接合関係が認められたことから、飛鳥Ⅱ期を上限とする時期と考えられる。

#### 〔229土坑〕（図43・44）

07-1-2 調査区中央部西端に位置する土坑である。230土坑に隣接する。土坑の西半分は調査区外にかかってしまったため、全容は明らかでない。

平面形はほぼ正円に近く、断面形状は下部側方がややオーバーハングするフラスコ状を呈する。

土坑の規模は、直径0.6m、検出面からの深さは0.5mを測る。

埋土は、大別して上下2層に分かれ、上層と下層の層界には有機質の薄層が存在する。また、下層には、側方にベース土である第6b層を起源とする崩落土が周囲に巡っており、遺物はその中央部にある落ち込み内から、正置された状態で壺が1点出土している。

遺物は、ほぼ完形の土師器の壺（344）が1点のみ出土した。外面はハケ、内面は指オサエが施される。

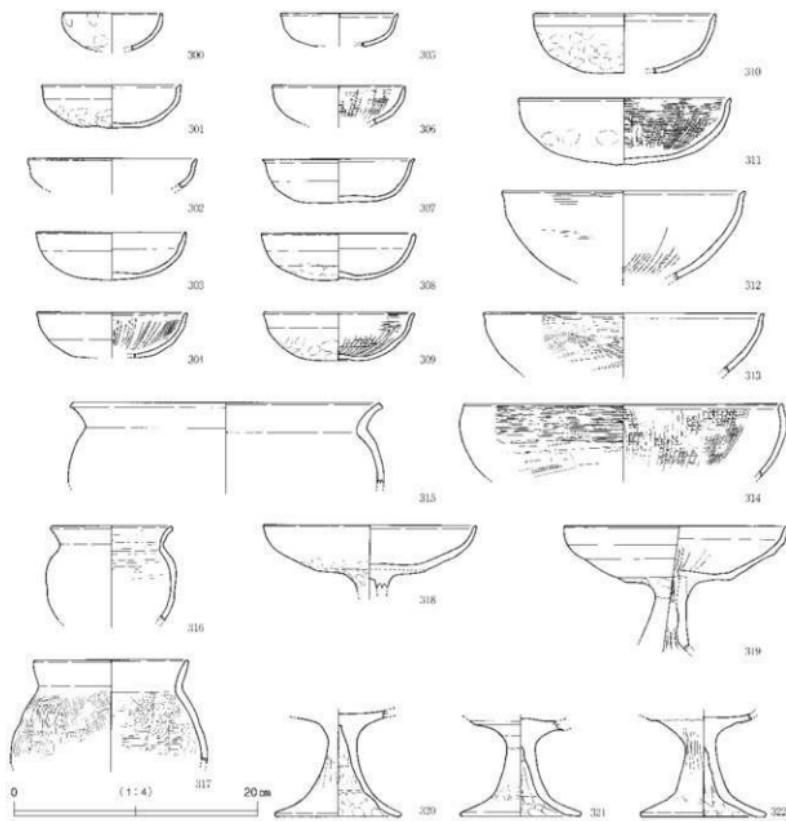


図41 第4面 2廐棄土坑 出土遺物(2)

[230土坑] (図43・44)

07-1-2調査区中央部西端に位置する土坑である。229土坑に隣接する。229土坑同様、土坑の西半分は調査区外にかかってしまったため、全容が明らかでない。

掘方の平面形は、不整形な長椭円形で、断面形状は下部側方がオーバーハングするフラスコ状を呈する。

土坑の規模は、検出長1.45m、検出面からの深さは0.75mを測る。

埋土は、⑩～⑪までの上層と、⑫の中層、⑬～⑭までの下層の3層に大別できる。上層は黄灰色ないし灰色の砂質シルトを主体とし、カーボン粒・有機物を多く含む。中層は、暗オリーブ灰色の粘質シルトで土師器を含む。下層は青灰色ないし緑灰色のシルトを基調とし、ベースのブロック土を多く含む。

遺物は、中層より土師器の高杯(341)が1点出土した。杯部を欠くため、全容は明らかでなく、詳細な帰属時期は不明である。

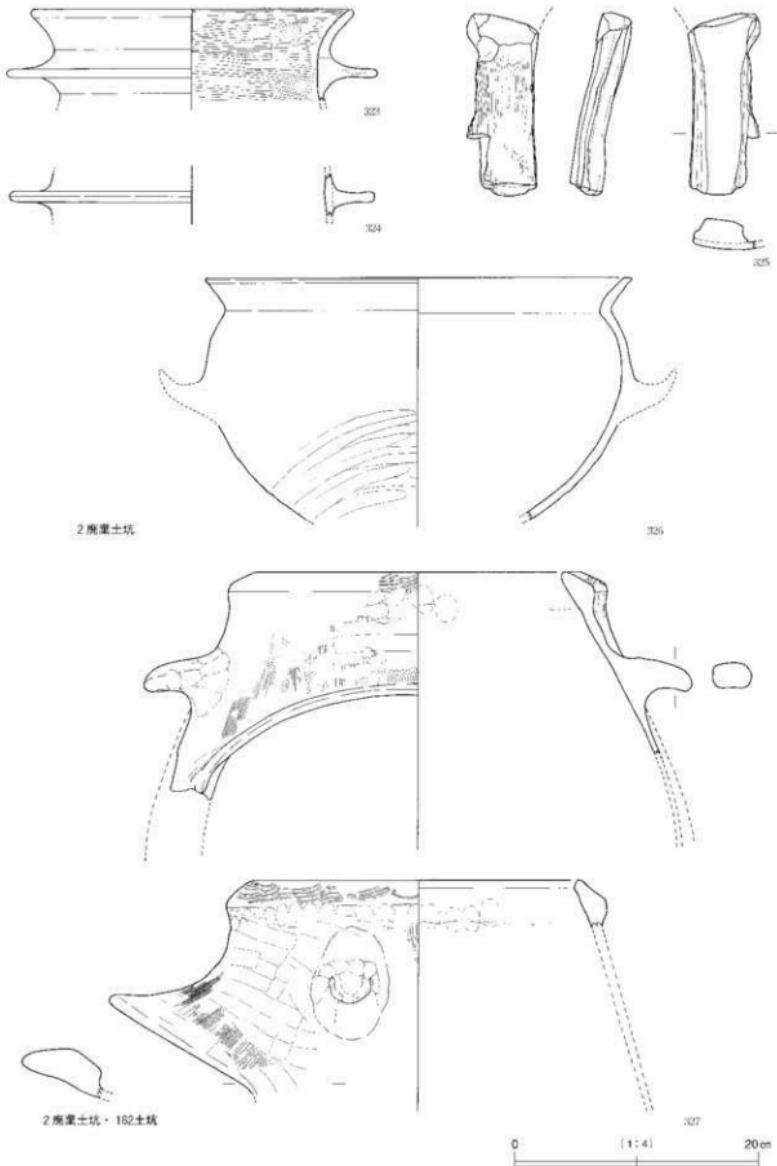


图42 第4面 2座窑土坑 出土遗物 (3) · 162土坑 出土遗物

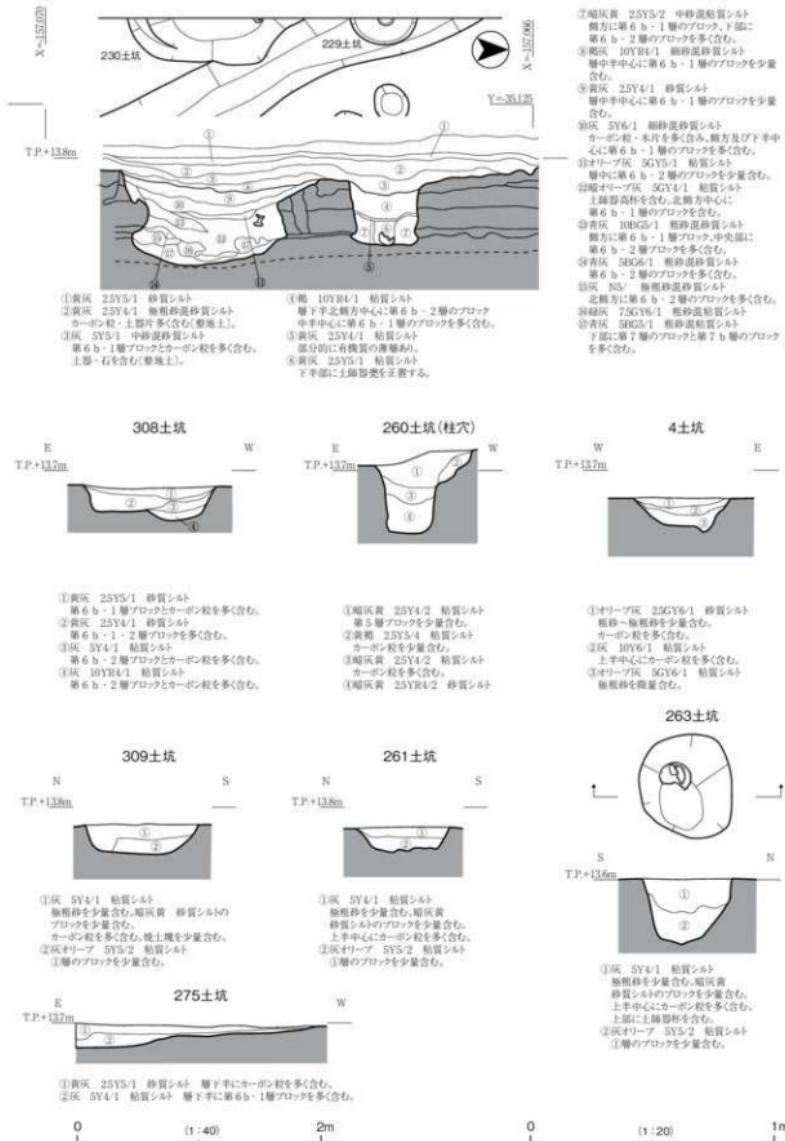


図43 第4面 土坑 断面図

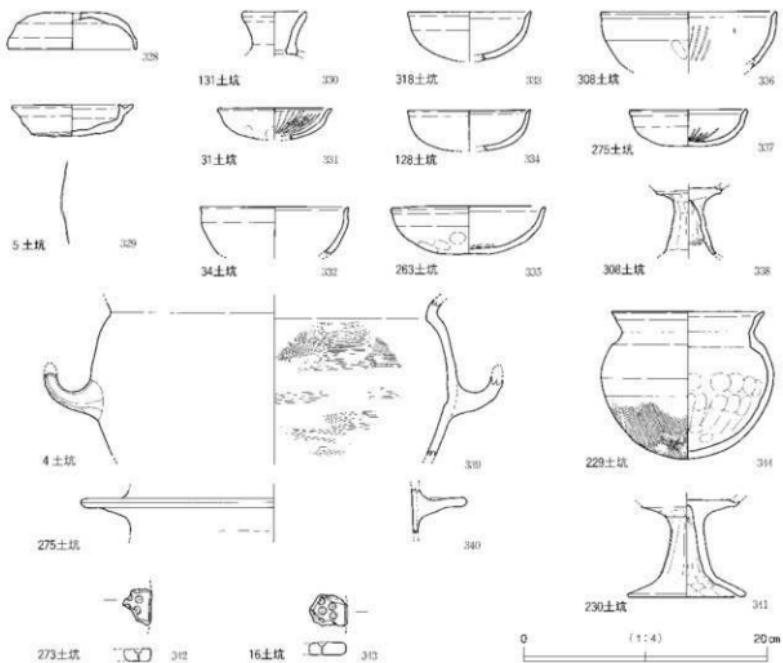


図44 第4面 土坑 出土遺物

〔4土坑〕 (図43・44)

01-2 調査区北端に位置する土坑である。掘方の平面形は長楕円形で、断面形状は浅い摺鉢状を呈する。

土坑の規模は、長軸0.75m、短軸0.6m、検出面からの深さは0.25mを測る。埋土は、カーボン粒、土器を含む①・②の上層と、③の下層に大別できる。

遺物は、体部中位に把手を付ける土師器壺の体部片(339)が出土した。口縁端部および、体部下半を欠く。

〔260土坑(柱穴)〕 (図43)

07-1-3 調査区南端に位置する土坑である。掘方の平面形は隅円長方形で、断面は逆台形に近い形狀を示す。土坑の規模は、長軸0.75m、短軸0.45m、検出面からの深さ0.65mを測る。

埋土は、大きく3層に分かれ、いずれも暗灰黄～褐色の粘質シルトを基調とする。柱痕は認められなかったが、掘方の形状・規模から掘立柱建物の柱穴である可能性が高い。

図示可能な遺物は出土していない。

〔261土坑〕 (図43)

07-1-3 調査区の北東隅に位置する土坑である。東端は07-1-1 調査区の側溝にかかるため、全容は不明である。掘方の平面形は不整な長楕円形で、断面形状は浅い皿状を示す。

土坑の規模は、長軸1m以上、短軸1.0m、検出面からの深さは0.2mを測る。埋土は、カーボン粒を多く含む上層と淘汰の良い粘質シルトの下層からなる。

図示可能な遺物は出土していない。

〔263土坑〕 (図43・44)

07-1-3調査区の北東隅、261土坑の西側に隣接する土坑である。

掘方の平面形は円形で、断面形状は深い椀形を呈する。

土坑の規模は、長軸0.4m、短軸0.35m、検出面からの深さ0.25mを測る。埋土は、カーボン粒を多く含む上層と淘汰の良い粘質シルトの下層からなる。

遺物は、土坑中央部の埋土上層最上部から、土師器杯C(335)が正置状態で出土している。口径と器高の示す様相から、飛鳥II期の所産と考えられる。

〔275土坑〕 (図43・44)

07-1-3調査区の北東隅に位置する土坑である。東半が調査区外にかかり、全容は不明である。掘方の平面形は不整な長楕円を呈し、断面形状は浅いすり鉢状を呈する。

土坑の規模は、長軸2.7m以上、短軸3.0m、検出面からの深さ0.2mを測る。埋土は、カーボン粒を多く含む上層と淘汰の良い粘質シルトの下層からなる。

遺物は少なく、土師器羽釜の鉢部片(340)と土師器杯G(337)をかろうじて図示し得たのみである。340の胎土は生駒山西麓産である。

〔308土坑〕 (図43・44)

上述した275土坑内の南西端に位置する土坑である。275土坑の埋土上面では確認できておらず、両者は重複関係にはなかったものと考えられる。

掘方の平面形状は、不整な長楕円形を呈し、断面形状は部分的に窪みを有する2段掘りの皿状を呈する。

土坑の規模は、長軸1.05m、短軸0.6m、検出面からの深さ0.25mを測る。

埋土は、1段目を覆う①・②層と、窪みを覆う③・④層からなる。

遺物は、土師器杯A(336)と高杯脚部片(338)が出土した。338は杯部および脚部裾を欠く。

〔309土坑〕 (図43)

07-1-3調査区の北東隅、275土坑の北側に隣接する土坑である。掘方の平面形は隅円方形で、断面形状は深い椀形を呈する。

土坑の規模は、一辺約1.0m、検出面からの深さ0.25mを測る。埋土は、カーボン粒および焼土塊を含む上層と淘汰の良い下層からなる。

遺物は出土していない。

図44には、その他の土坑から出土した遺物のうち、図化可能なものを掲げている。

須恵器は、杯H蓋(328)、身(329)が5土坑から出土しているほか、須恵器平瓶の口縁(330)が131土坑から出土している。

土師器は、杯G(331)が31土坑から、杯C(332~334)が34・318・128土坑から出土している。

このほか、273土坑、16土坑からガラス小玉鋳型の細片が出土している。

いずれも、飛鳥II期の範疇に収まるものと考えられ、その他の土坑の示す時期と整合的である。

## 5. 第5・5 b面(図45)

第6 b層を除去して、検出できる第7層および第7 b層の上面を第5面として調査した。これは、遺構面のベースとなる第7層と第7 b層の堆積状況に起因する。すなわち、第7 b層の堆積が厚い箇所では、土壤層である第7層が形成されないか、もしくは削平を受けたために不明瞭となり、第7 b層が露出している地点が存在するためである。なお、その箇所は調査区南半および西端である。

また、第5面では、前述の第4面同様、第7層を除去した第7 b層上面を第5 b面として調査している。

検討の結果、両者はほぼ同じ時期に帰属する可能性が高いことから、ここでは一括して記述する。

ところで、第7 b層は、01-2調査区で確認したように縄文時代に堆積した大規模な水成堆積物であり、第7 b層下面では顯著な遺構・遺物が確認されていないことから、第5 b面を以って調査の終了面とした。なお、第7層は層厚0.1~0.05mを測る。

遺構面の地形は、旧地表面が良好に残存していた第7層上面での標高で代表させると、最高点である南西隅で13.55m、北西隅で13.30m、北側中央部で12.95m、北東隅で13.25mを測り、07-1-2~07-1-3調査区にかけては、中央部を最低点として両側から図面上の落ちに表現されるように谷状地形を示すなど、微起伏に富む状況を示し、中央部の谷状地形を最低点として南・西・東の各方角に微高地が抜がる形状を呈する。

遺構は少なく、01-2調査区で検出した41土坑を除けば、顯著な遺構は認められない。わずかに07-1-1調査区の第5面から213溝が、また、07-1-2調査区の第5 b面で224土坑、07-1-3調査区で332土坑、07-1-1調査区でピットが認められた程度である。

なお、第5面では07-1-2~3調査区にかけて地震による噴砂の痕跡を検出し(図45)、それに対応して断面でも断層が認められた。この断層は、第7層以下に認められることから、この噴砂が生ずる元となった地震は第7層堆積以後、第6 b層が堆積する以前に起こったものと推定できる。

### 〔41土坑〕(図46・47)

調査区の南西隅、01-2調査区と07-1-2調査区にかけて位置する土坑である。なお、中央部北側は地形が急激に落ち込む凹地状を呈していたため、続きを確認することができていない。

掘方の平面形は、不定形な長辺円形を示し、断面形状は浅い皿状を呈する。規模は長軸7.0m以上、短軸3.7m以上、検出面からの深さ0.25mを測る。

埋土は緑灰色の結質シルトを基調とし、層中にはカーボン粒・焼土塊・灰を多量に含んでいた。加えて、部分的ではあるが、土坑の底面にも被熱している箇所が認められたことから、本土坑は火を用いる施設の可能性がある。

遺物は、縄文時代晩期末の船橋式土器に比定しうる深鉢(346・349)が出土した。このことから41土坑は縄文時代晩期末に帰属する遺構と考えられる。

### 〔224土坑〕(図46)

調査区の中央部西端、07-1-2調査区に位置する土坑である。西側は側溝にかかったため、全容は不明である。

掘方の平面形は不定形で、断面形状も緩やかな椀形を呈するものの、底面は凹凸が激しいなど、一定しない。

規模は、検出長1.8m以上、幅2.1m、検出面からの深さは0.15mを測る。

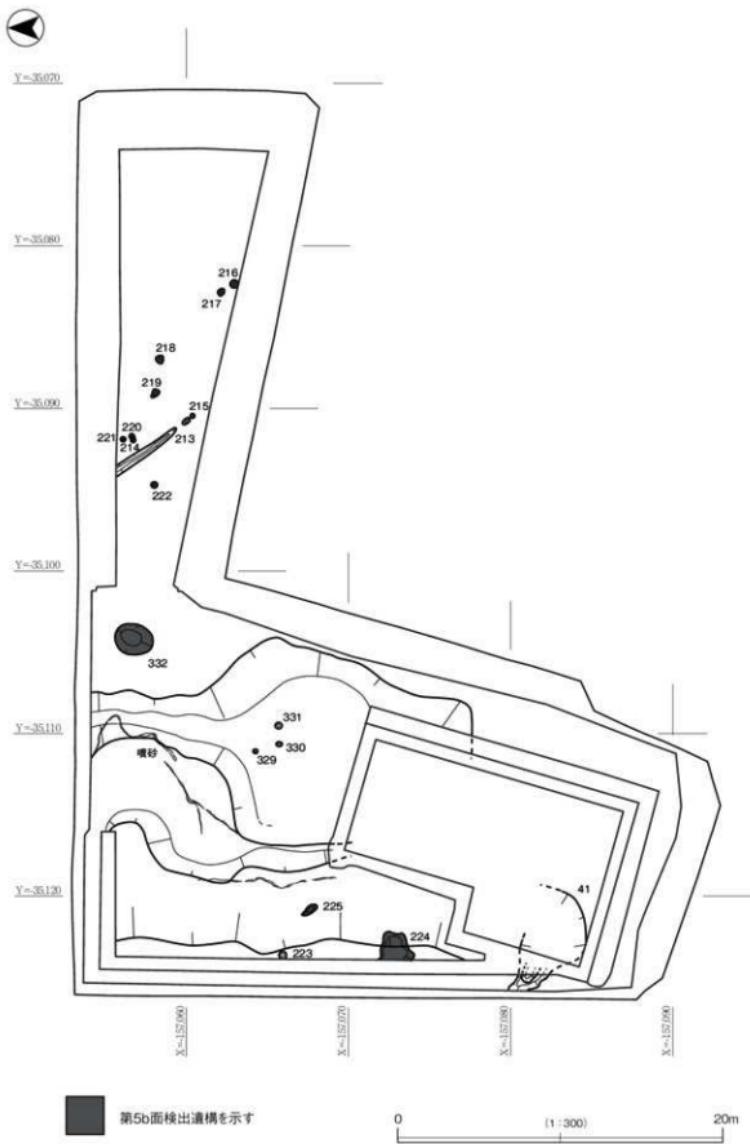
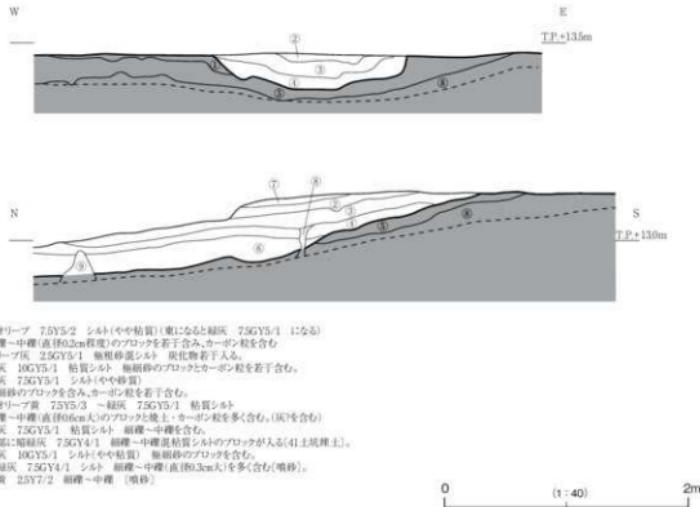


図45 第5・5b面 平面図

#### 41土坑



#### 224土坑



#### 332土坑



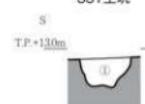
① 基オーリープ 2SGY4/1 粘質シート  
細緻～粗緻を多く含む。底オーリープ  
7GY5/2 粗緻～粗緻のブロックを多く含む。  
オーリープ 黒 5Y3/1 粘質シートのブロック  
を下半中心に少量含む。

① オーリープ 黒 5Y3/1 粘質シート  
第7 b層のブロックを下半中心に多く含む。  
細緻 7SGY6/1 中緻のブロックを少々含む。  
カーボン粒を少量含む。

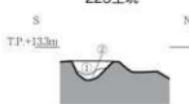
#### 225土坑



#### 331土坑



#### 223土坑



① 細緻灰 10GY4/1 粘質シート  
細緻～粗緻を多く含む。  
オーリープ 黑 5Y3/1 粘質シート  
のブロックを少量含む。  
カーボン粒を多く含む。

① 細緻灰 7SGY4/1 粘質シート  
細綈～粗緻を多く含む。底は黒い。  
オーリープ 黑 5GY3/1 粘質シート  
のブロックを下半中心に少量含む。  
第7 b層のブロックを下半中心に  
少量含む。

① 基オーリープ 黑 5GY3/1 粘質シート  
粗綈～粗緻を多く含む。底は黒い。  
オーリープ 黑 5GY3/1 粘質シート  
のブロックを下半中心に少量含む。  
細緻灰 黑 2GY4/2 粘質シート  
黄褐 25Y4/4 粘質シートブロック  
を多く含む。

図46 第5面 土坑 断面図

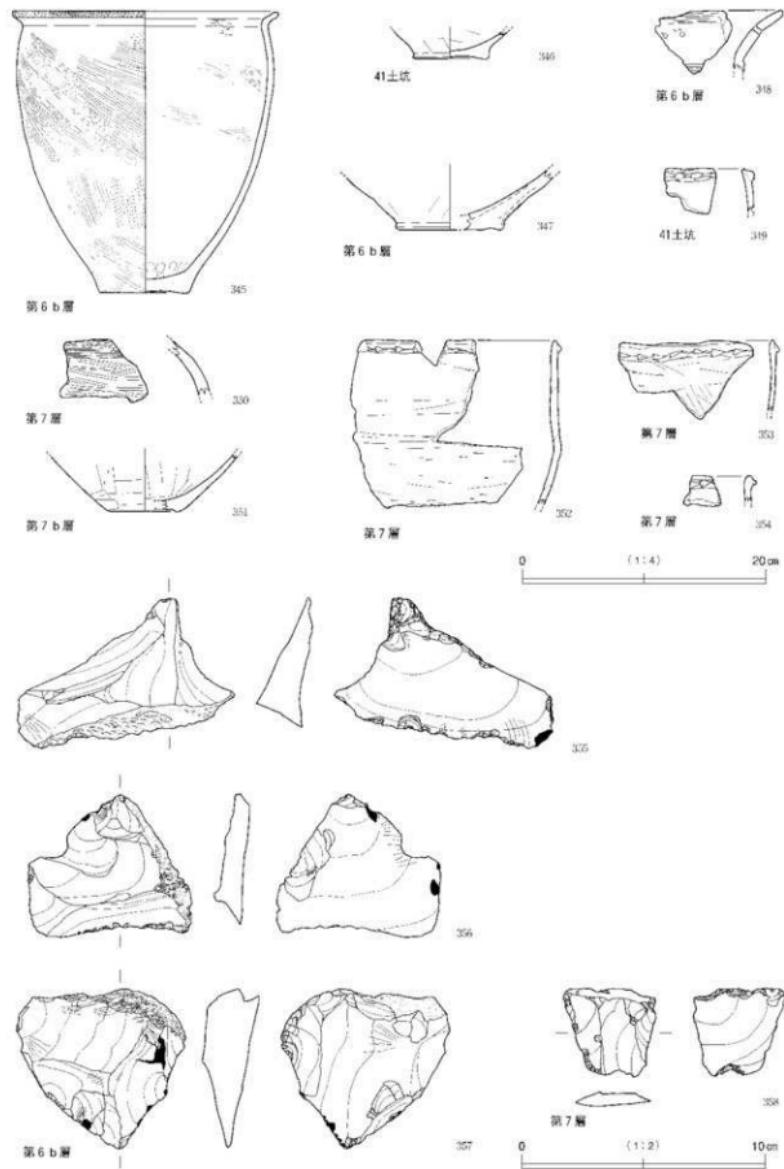


図47 第5面 41土坑・第5～7層 出土遺物

埋土は、第7層に近似する暗オリーブ灰色の粘質シルトを基調とし、ベースの第7b層をブロック土として含むものである。

遺物は出土していない。

〔332土坑〕 (図46)

07-1-3調査区の北東隅に位置する土坑である。掘方の平面形はやや南北方向に長い長楕円形を呈し、断面形状は浅いすり鉢状を呈する。

土坑の規模は、長軸2.4m以上、短軸1.95m、検出面からの深さは0.15mを測る。

埋土は、第7層に近似するオリーブ黒色の砂質シルトに、ベースの第7b層ブロックが混入するものである。

遺物は出土していない。

〔223土坑〕 (図46)

07-1-2調査区の中央部西隅に位置する土坑である。掘方の平面形はほぼ正円で、断面形状は底面が不定形な椀形を呈する。

土坑の規模は、直径0.3m、検出面からの深さ0.15mを測る。

埋土は、暗オリーブ灰色の粘質シルトと暗灰黄色の粘質シルトである。遺物は出土していない。

〔225土坑〕 (図46)

07-1-2調査区の中央部に位置する土坑である。掘方の平面形は南北方向に長い不整な長楕円形を呈し、断面形状は椀形を呈する。

土坑の規模は、長軸0.9m、短軸0.4m、検出面からの深さ0.2mを測る。

埋土は、第7層に近似する暗緑灰色の砂質シルトと、ベースの第7b層ブロックが混入するものである。平面形状および掘削時の所見から、倒木痕である可能性もある。遺物は出土していない。

〔331土坑〕 (図46)

07-1-3調査区の中央部に位置する土坑である。平面形は正円を呈し、断面形状は椀形を呈する。

土坑の規模は、直径0.4m、検出面からの深さ0.2mを測る。

埋土は、第7層に近似する暗緑灰色の粘質シルトに、ベースの第7b層ブロックが混入するものである。遺物は出土していない。

図47には、前述した41土坑出土土器のほかに、第6b層および第7層・第7b層から出土した遺物を掲げている。

1調査区西端の側溝掘削時に、第7層中より弥生時代前期と考えられる広口壺肩部片(350)が出土したほか、01-2調査区の41土坑北側に認められた地形の落込を埋積していた第6b層からは、口縁端部に刻み目を施す弥生時代前期の甕(345)が出土している。

350は、4条の沈線を施し、体部外面にはヘラミガキを施す。345は、体部外面に左上がりの断続的なハケを施し、口縁部内面には横方向のハケを施す。348や350とともに、河内I-3~4様式に帰属するものと考えられる。

さらに、第7b層からは、縄文時代晩期末の船橋式に比定し得ると考えられる深鉢片(352~354)・二次加工痕跡のあるサヌカイト剥片(356)、楔形石器(357)が出土した。

第5・5b面の帰属時期は、第7・7b層に包含される遺物より、縄文時代晩期末~弥生時代前期後葉と考えられる。

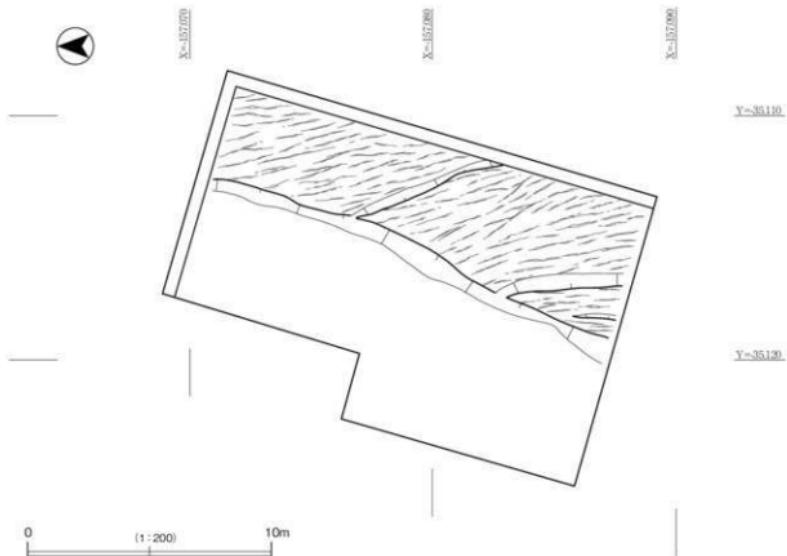


図48 下層確認調査 平面図

#### 6. 第6面(図48)

第7b層を除去して検出できる第8b層の上面を第6面として調査した。本面は、第1章第2節で既に述べたように、01-2調査区に限定して、遺構・遺物の有無を確認する意味合いの下に実施した調査であり、07-1調査区では調査を行っていない。加えて、01-2調査区でも掘削深度の都合上、調査区東側の約3分の1を検出するに留まっている。検出し得た遺構面は旧大和川水系の河床面と考えられ、標高は9.8~10.15mを測る。

なお、図48に示した遺構面上の細線は河床面の削剥の状況の記録である。

本面を覆う水成堆積物である第7b層は、厚いところでは3.0m以上に及ぶものである。河川堆積物と考えられるこの層は、上方細粒化していることから、堆積が徐々に安定していくことが明らかであるが、下半部は粗砂から5~6mm程度の中礫で構成されるなど、土砂供給に伴う営為は強いものであったことを示唆している。また、ラミナの観察から、この第7b層は堆積途中で流向を変えていることが明らかであるが、層中には土壤化といった時間差は認められない。このことから、この第7b層は安定する条件が整わないまま、比較的短期の間に供給されたことが想定できる。

第7b層および第6面から出土した遺物は、極めて少なく、縄文時代晚期中頃と考えられる土器の細片が数片出土したのみである。図示は不可能であった。

国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所が今回の調査区の周辺で実施した、川北・大正地区でのボーリング調査でも、この第7b層に比定しうる砂層が確認できており、砂層以上には大規模な堆積が認められないなど、今回の調査での知見と差異が無いことから、本調査地周辺の堆積環境は、ほぼ同様であったことがわかる。

## 第V章 総括

### 1. 遺跡の変遷

前章までに、2001年度および2007年度に実施した船橋遺跡の発掘調査の成果を述べてきた。

本章では、今回の調査で検出した各時期の遺構と遺物を総合的に検討し、必要に応じて近隣の調査成果も交えつつ、成果の総括を行なう。なお、本遺跡は沖積低地に立地しており、地形環境と遺跡のあり方が密接に関連することから、記述を進めるにあたっては、本文中の記述とは異なるが、下位の遺構面から順にその成果をまとめていくこととした。

#### 縄文時代晩期中葉

第7b層の下面である第6面が相当する。河川性の水成堆積物を除去した遺構面である。主な成果としては、層厚3mに及ぶ水成堆積物の分布を確認し得たことが挙げられる。

出土遺物はほとんど認められなかつたが、周辺地域の調査成果も加味すれば、この水成層は縄文時代晩期中葉に発生した大規模な洪水に伴う水成層であることが予測できる。

この洪水による土砂供給は、近隣にも及んでいることが明らかとなつており〔大文セ2005b〕、これらの第7b層の供給によって形成された地形は、中世後期以後に耕地化するまで踏襲されていることから、今回の調査区周辺の遺跡形成過程を考えるうえで、重要な成果を挙げることができた。

#### 縄文時代晩期～弥生時代前期

第5・5b面が相当する。地表面の状況は起伏に富んでいる。検出した遺構は少なく、縄文時代晩期末の土器を含む41土坑を検出したほかは、遺物も伴わない落込状の土坑を検出したに留まる。

その一方で、遺物は、41土坑の北側に位置する地形の落込上に堆積した第6b層中より、少量の弥生時代前期の甕が出土した。口縁端部に刻みを持つ弥生時代前期後葉に帰属するものと考えられ、第6b層の堆積直前の帰属時期を示すものといえる。

また、第7層からは、あわせて縄文時代晩期船橋式に比定し得る土器を検出した。なお、02-1～3調査区で確認されていた弥生時代後期の遺構・遺物については、認められなかつた。

#### 飛鳥時代前期

第4・4b面および第3面が相当すると考えられる。主要な成果としては、短期間の間に営まれ、廃絶した掘立柱建物群からなる集落域の様相を確認できたことが挙げられる。集落域は、第6b層の堆積によって一定地形の平坦化が図られた後に形成されている。

第3面の評価については、当初、第5層から須恵器杯Bが出土することから、奈良時代(平城宮IV期)に帰属するものと考えていたが、第3面検出遺構から出土する土器のうち、南北方向を指向する1溝を除く各遺構に、平城宮IV期に該当する遺物が認められないこと、110溝等に代表される溝群が、明らかに第5層上面から掘り込まれていることなどから、飛鳥時代と奈良時代に帰属する各遺構が検出される遺構面として捉えることができる。ただし、本文中でも繰り返し述べたように、地震動の影響を完全に払拭しきれていないため、断定はなし得ない。

掘立柱建物は、今回の調査で、最低6棟を検出した。さらに、07-1-3調査区南端で確認した260土坑(柱穴)の存在から、調査区外にも別の掘立柱建物が存在していた可能性が高い。なお、既往の調

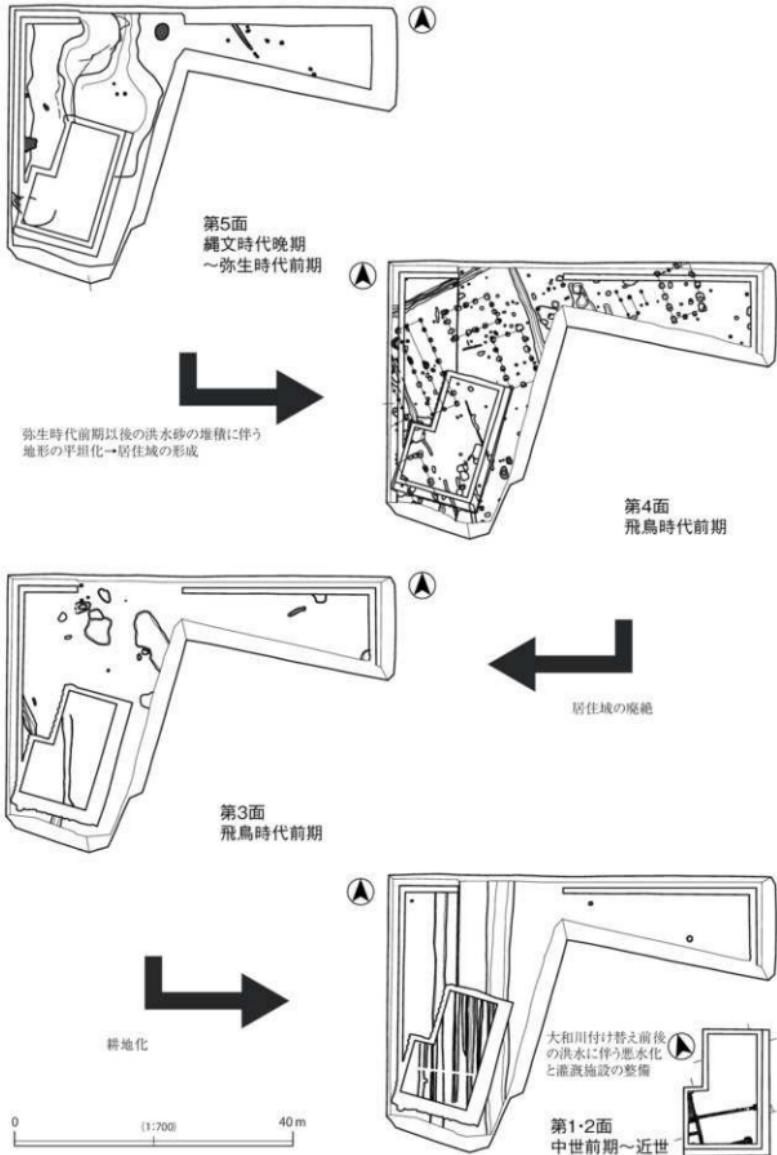
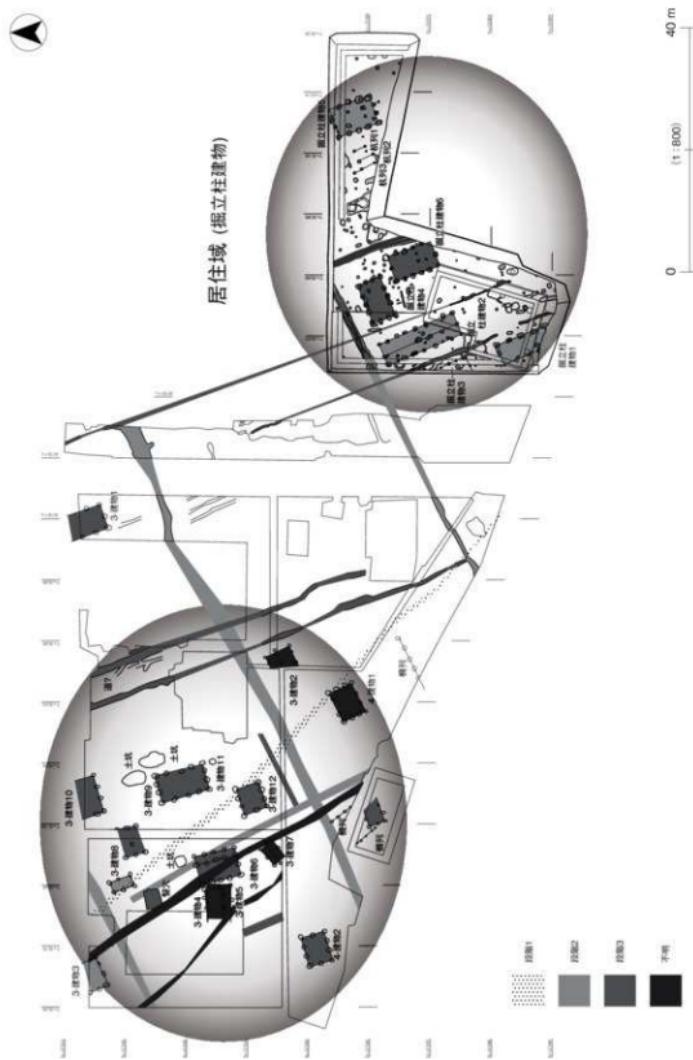


図49 遺構変遷図

工房域 (堅穴建物・掘立柱建物+土坑)



査区域である02-1～3調査区の成果も含めると、工芸生産遺物を多く含む堅穴建物を有する西群から東西約160m、南北約80m以上の広範囲にわたって、集落が展開していたことが明らかとなった。

また、遺物から見ると、第4面の遺構は、主に、飛鳥Ⅱ期に帰属する土器を多く含むのに対し、第3面の110溝をはじめとする溝群は、径高指数上でわずかに低い値を示す、飛鳥Ⅱ～Ⅲ期に帰属する可能性の高い一群を含んでいる。

飛鳥Ⅲ期の様相を持つ土器は、今回の調査区の西側で実施した02-2・3調査区を含めて考えると希少な例であることから、集落の成立－機能－廃絶という一連の現象が、飛鳥Ⅱ～Ⅲ期という短期間に起こったであろうことを窺わせる重要な資料を得ることができた。

掘立柱建物は、主軸の向きから大きく2群に分けることができる。具体的には、掘立柱建物5・6がN20°W、掘立柱建物1・2・4がN22°W、掘立柱建物3がN24°Wとなっている。

なお、建物と概ね軸を揃える遺構に、171溝と杭列があるが、溝についてはN63°E方向に軸を置いており、建物とは直交する関係はない。また、杭列はN24°W、N28°W方向に軸を置いており、近接する掘立柱建物5とはやや軸を違える。こうした遺構の主軸に時期差が認められるかどうかについては、出土遺物が希少であることから確証は得られていない。しかしながら、本文中でふれたように掘立柱建物4・6の各柱穴については、第3面検出時からその一部を確認しておらず、軸を同じくする掘立柱建物間にも一定の時間差が認められる可能性が高いことが明らかとなった。

遺物は、第5層掘削中に細片と化した多くの須恵器・土師器のほか、02-1～3調査区でも出土した工芸生産遺物と考えられる、輪の羽口・ガラス小玉鋳型片・棒状土製品等が出土している。

以上のように、今回の調査では、01-2調査区以西で確認した集落域が空閑地を挟み、今回の調査地東端以東まで及んでいたことを確認することができた。既往の調査地である02-1～3調査区では、上述したように、工芸生産遺物を含む堅穴建物や掘立柱建物に付随する土坑などの存在から、工房城としての機能が想定されており〔大文セ2005b〕、この空閑地は、船橋遺跡の飛鳥時代集落域の中で工房城と居住域といった機能差を分かつものである可能性もある。

既に述べたように、今回の調査地の南側には建物群が続いていることが明らかであることから、今後周辺域の調査によってさらに補強されるべきと考えられる。

#### 奈良時代

遺構は認められないものの、第5層中および第3面1溝より須恵器杯Bが出土していることから、わずかながらも人間活動の痕跡は認められる。しかしながら飛鳥時代と比較すると急激に減少する。

#### 平安時代末～中世前期

第2面が相当するが、当該期に帰属することが明らかな遺構は認められない。第3層からは12世紀前半代に帰属する遺物が少量認められることから、人間活動の痕跡は認められる。

#### 中世後期～近世

耕作溝・土取り穴と考えられる土坑を除けば、顯著な遺構は認められない。耕地として安定した利用がなされていた状況を示すものと考えてよく、土取り穴と考えられる土坑は、対岸の既往調査区でも明らかとなっている〔大文セ2005a〕、大和川付替以前の旧大和川水系の河川氾濫に関連する災害復旧、もしくは補修のための所産と考えられる。

その後、近世にかけては耕作を効率的に実施するための導水施設を敷設するなど、大和川付け替え以後の右岸側の水掛りの悪さを如実に示しているものといえる。

## 引用・参考文献

- (財) 大阪市文化財協会 2002 「大阪城跡V」
- (財) 大阪文化財センター 1976 「大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴う船橋遺跡試掘調査報告書」  
「大阪文化財センター調査報告書Ⅲ 文化財調査報告集 75」
- (財) 大阪文化財センター 1977 「大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴う船橋遺跡試掘調査報告書」  
「大阪文化財センター調査報告書Ⅲ 文化財調査報告集 76」
- 大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター 1980 「陶邑Ⅲ 大阪府文化財調査報告書第30輯」
- 大阪府教育委員会 1981 「はさみ山遺跡発掘調査概要Ⅱ」
- (財) 大阪府文化財調査研究センター 2002 「大阪城址Ⅱ」
- (財) 大阪府文化財センター 1998 「船橋遺跡」
- (財) 大阪府文化財センター 2005a 「船橋遺跡Ⅱ」
- (財) 大阪府文化財センター 2005b 「船橋遺跡Ⅲ」
- 古代の土器研究会 1992 「古代の土器1 都城の土器集成」
- 古代の土器研究会 1993 「古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ」
- 古代の土器研究会 1997 「古代の土器5・1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)」
- 古代の土器研究会 1998 「古代の土器5・2 7世紀の土器(近畿西部編)」
- 櫻井久之 1993 「第3節 長原遺跡の土器埋納遺構-飛鳥～平安時代」 (財) 大阪市文化財協会編  
「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書VI」
- 佐藤隆 2003 「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年-陶邑窯跡編年の再構築へ向けて-」  
「大阪歴史博物館 研究紀要 第2号」 大阪歴史博物館
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」 角川書店
- 中世土器研究会編 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」 真陽社
- 寺沢薫・森岡秀人編 1989 「弥生土器の様式と編年-近畿編Ⅰ」 木耳社
- 西 弘海 1986 「土器様式の成立とその背景」 真陽社
- 藤井寺市教育委員会 1987 「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅱ」
- 藤井寺市教育委員会 1989 「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅳ」
- 藤井寺市教育委員会 1991 「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅵ」
- 藤井寺市教育委員会 1993 「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅷ」
- 藤井寺市教育委員会 1994 「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅹ」
- 藤井寺市教育委員会 1995 「石川流域遺跡群発掘調査報告X」
- 藤井寺市教育委員会 2000 「石川流域遺跡群発掘調査報告XV」
- 藤井寺市教育委員会 2002 「石川流域遺跡群発掘調査報告XVII」
- 平安学園考古学クラブ 1966 「陶邑古窯址群Ⅰ」

表 1 遺物觀察表（1）

表2 遺物観察表(2)

地図 場所 番号	層級 番号	層級 番号	遺物面 層位	出土場所	遺物名	器種	形状 割合(%)	時間	寸法 (cm)	高さ (cm)	施土	内面	外面	備考
11 14-1 36 07-1K 第3層	—	—	底面	底面土器	鉢	棒	5%>	14世紀	—	(4.8)	2mm-25mmの石合	やや良	灰 N/A	灰白 SYW1 内面顔面
11 11 — 37 01-2K 第3層	—	—	底面	柱足器	柱G	20%	後鳥羽期	(7.0)	(1.95)	1mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A つまみ部火打頭 井戸部にヘラ記号あり	
11 11 — 38 01-2K 第3層	—	—	土面	高脚脚踏	柱G	5%>	後鳥羽期	(5.6)	(3.2)	1mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 10YR7.3 用意頭	
11 11 — 39 01-2K 第3層	—	—	土面	小型高脚	柱G	70%	後鳥羽期	(8.3)	(5.53)	1mm-25mmの石合	やや良	灰白 N/A	灰白 N/A 10YR7.3 用意頭	
11 11 — 40 07-1K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱H	50%	後鳥羽期	(9.3)	(3.6)	1mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 10YR7.3 用意頭	
11 11 — 41 07-1K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱H	35%	後鳥羽期	(9.0)	(6.0)	1mm-25mmの石合	やや良	灰白 N/A	灰白 N/A 10YR7.1 用意頭	
11 11 — 42 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	10%	後鳥羽期	(9.4)	(3.5)	1mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 10YR7.1 用意頭	
11 11 — 43 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	20%	後鳥羽期	(8.0)	(2.9)	1mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 44 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	50%	後鳥羽期	(8.0)	(3.3)	1mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 45 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	15%	後鳥羽期	(8.2)	(3.7)	1mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 46 07-1K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	50%	後鳥羽期	(7.2)	(2.7)	1mm-25mmの石合	やや良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 47 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	30%	後鳥羽期	(9.0)	(3.2)	1mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 48 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	10%>	平城V期	(11.6)	(1.6)	1mm-25mmの黒色	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 49 07-1K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	75%	平城V期	(11.8)	(1.4)	1mm-25mmの黒色	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 50 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	10%>	平城V期	(10.8)	(1.5)	1mm-25mmの黒色	やや良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 51 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	10%>	平城V期	(10.8)	(1.2)	1mm-25mmの黒色	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 52 07-1K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	10%	平城V期	(15.0)	(1.4)	1mm-25mmの黒色	やや良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 53 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	3%	平城V期	(13.0)	(2.8)	1mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 14-1 54 07-1K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	75%	後鳥羽期	96.65	(8.0)	3mm-25mmの石合	やや良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 55 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	10%	後鳥羽期	(8.9)	(1.9)	2mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 56 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	25%	後鳥羽期	(18.0)	(3.0)	2mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 57 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	90%	後鳥羽期	(9.0)	(2.2)	2mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 14-1 58 07-1K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	15%	後鳥羽期	(8.4)	(2.5)	2mm-25mmの石合	やや良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 59 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	60%	後鳥羽期	(8.7)	(3.3)	2mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 60 07-1K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	90%	後鳥羽期	(9.5)	(3.6)	2mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 61 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	40%	後鳥羽期	(10.6)	(3.5)	2mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 62 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	15%	後鳥羽期	(10.9)	(3.5)	2mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 63 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱G	25%	後鳥羽期	(10.9)	(3.6)	2mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 64 07-1K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱H	80%	後鳥羽期	(9.0)	(3.1)	2mm-25mmの石合	やや良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 65 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱H	50%	後鳥羽期	(9.2)	(2.0)	2mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	
11 11 — 66 01-2K 第4層	—	—	底面	柱足器	柱H	3%	後鳥羽期	(7.0)	(0.6)	1mm-25mmの石合	良	灰白 N/A	灰白 N/A 5WHT1 用意頭	

表3 遺物観察表(3)

地図	図版	層号	測量面	遺物番号	出土場所	遺物名	器種	形状(%)	断面	時間	DIA (cm)	断面 (cm)	施土	施成	内面	外面	断面	備考
11	—	67 07-1K	第3層	—	瓦器	杯B	杯	9%	高筒形	(13.0)	(1.7)	直	直	灰	灰	N/S	底部切削一定方向のチリ	
11	—	68 07-1K	第3層	—	土器	杯C	杯	30%	侈角II期	(10.6)	(0.2)	やや幅 2mmの外輪底	やや直	灰や白	灰	灰	灰	底部切削一定方向のチリ
11	—	69 01-2K	第3層	—	土器	杯C	杯	10%	侈角II期	(12.6)	3.6	2mmの外輪底	直	57386.6	57386.8	57386.8	57386.8	内部表面削減のため施成不明
11	—	70 01-2K	第3層	—	土器	杯C	杯	15%	侈角II期	(14.6)	(0.6)	2mmの外輪底	直	57386.6	57386.6	57386.6	57386.6	内部表面削減のため施成不明
11	—	71 01-2K	第3層	—	土器	1.ニコラスアダム	杯	10%>	侈角II期	—	(3.7)	2mmの外輪底	直	57386.6	57386.6	57386.6	57386.6	内部表面削減のため施成不明
12	—	72 01-2K	第3層	—	土器	1.ニコラスアダム	杯	9%	侈角II期	(19.8)	(7.3)	2mmの外輪底	直	57386.6	57386.6	57386.6	57386.6	内部表面削減のため施成不明
12	—	73 01-2K	第3層	—	土器	1.ニコラスアダム	杯	92%	侈角II期	(4.9)	5.6	2mmの外輪底	直	57386.6	57386.6	57386.6	57386.6	内部表面削減のため施成不明
12	—	74 01-2K	第3層	—	土器	高杯脚III	杯	40%	侈角II期	(15.0)	(5.3)	2mmの外輪底	直	57386.6	57386.6	57386.6	57386.6	内部表面削減のため施成不明
12	—	75 01-2K	第3層	—	土器	1.ニコラスアダム	杯	40%	侈角II期	(15.0)	(5.0)	2mmの外輪底	直	57386.6	57386.6	57386.6	57386.6	内部表面削減のため施成不明
12	—	76 01-2K	第3層	—	土器	高杯脚III	杯	40%	侈角II期	(10.0)	(7.5)	2mmの外輪底	直	57386.6	57386.6	57386.6	57386.6	内部表面削減のため施成不明
12	—	77 01-2K	第3層	—	土器	高杯脚III	杯	10%>	侈角II期	—	(6.1)	2mmの外輪底	直	57386.6	57386.6	57386.6	57386.6	内部表面削減のため施成不明
12	—	78 01-2K	第3層	—	土器	高杯脚III	杯	10%>	侈角II期	—	(8.9)	2mmの外輪底	直	57386.6	57386.6	57386.6	57386.6	内部表面削減のため施成不明
12	—	79 07-1K	第3層	—	瓦器	要	片	10%	侈角II期	(19.4)	(9.1)	1.少部分 2mmの外輪底	やや直	灰や白	灰	灰	N/S	底部切削一定方向のチリ
12	—	80 01-2K	第3層	—	土器	片	片	10%	侈角II期	(34.6)	(7.3)	2mmの外輪底	直	57386.6	57386.6	57386.6	57386.6	内部表面削減のため施成不明
12	—	81 07-1K	第3層	—	土器	片	片	10%	侈角II期	(26.5)	(9.3)	1.少部分 2mmの外輪底	やや直	灰や白	灰	灰	N/S	底部切削一定方向のチリ
12	—	82 07-1K	第3層	—	瓦器	片	片	5%>	侈角II期	(37.8)	(16.6)	1.3mmの多 数の外輪底	やや直	灰や白	灰	灰	N/S	底部切削一定方向のチリ
13	21-2	83 07-1K	第3層	—	土器	块状土器品	块	10%	侈角II期	(20.0)	(16.4)	1.3mmの多 数の外輪底	やや直	灰や白	灰	灰	N/S	底部切削一定方向のチリ
13	21-2	84 01-2K	第3層	—	土器	块状土器品	块	10%	侈角II期	(18.0)	(17.5)	1.3mmの多 数の外輪底	やや直	灰や白	灰	灰	N/S	底部切削一定方向のチリ
13	21-2	85 07-1K	第3層	—	土器	块状土器品	块	10%	侈角II期	(1.6)	(6.2)	1.3mmの多 数の外輪底	直	灰や白	灰	灰	N/S	底部切削一定方向のチリ
13	21-2	86 07-1K	第3層	—	土器	块状土器品	块	—	侈角II期	(0.2)	(6.0)	1.3mmの多 数の外輪底	直	灰や白	灰	灰	N/S	底部切削一定方向のチリ
13	—	87 07-1K	第3層	—	土器	块状土器品	块	—	侈角II期	(3.9)	(4.3)	1.3mmの多 数の外輪底	直	灰や白	灰	灰	N/S	底部切削一定方向のチリ
13	—	88 01-2K	第3層	—	土器	块状土器品	块	—	侈角II期	(6.4)	(9.9)	1.3mmの多 数の外輪底	直	灰や白	灰	灰	N/S	底部切削一定方向のチリ
13	22	89 07-1K	第3層	—	土器	块状土器品	块	—	侈角II期	(4.1)	(6.6)	1.3mmの多 数の外輪底	直	灰や白	灰	灰	N/S	底部切削一定方向のチリ
13	—	90 07-1K	第3層	—	土器	块状土器品	块	—	侈角II期	(9.0)	(7.6)	1.3mmの多 数の外輪底	直	灰や白	灰	灰	N/S	底部切削一定方向のチリ
13	22	91 07-1K	第3層	—	土器	块状土器品	块	—	侈角II期	(5.0)	(5.0)	1.3mmの多 数の外輪底	直	灰や白	灰	灰	N/S	底部切削一定方向のチリ
14	21-1	92 07-1K	第3層	—	土器	ガラス小片	ガラス小片	—	侈角II期	(10.5)	(1.3)	1.3mmの多 数の外輪底	直	灰や白	灰	灰	N/S	底部切削一定方向のチリ
14	21-1	93 07-1K	第3層	—	土器	ガラス小片	ガラス小片	—	侈角II期	(7.5)	(1.25)	1.3mmの多 数の外輪底	直	灰や白	灰	灰	N/S	底部切削一定方向のチリ
14	21-1	94 07-1K	第3層	—	土器	ガラス小片	ガラス小片	—	侈角II期	(5.6)	(1.3)	1.3mmの多 数の外輪底	直	灰や白	灰	灰	N/S	底部切削一定方向のチリ

表 4 遺物觀察表 (4)

表5 遺物観察表(5)

場所	部類	層面	遺物名	出土箇所	遺物名	器種	保存状況(%)	時期	口径(cm)	底高(cm)	施土	施成	内面	外面	備考
17	—	127 07-1K	鉢38	110塊	上階器	杯C	45%	候鳥II~Ⅳ期	10.2	3.3	平	良	内:1.08~2 外:1.08~2	内:1.08~2 外:1.08~2	外:表面磨滅・付着物不明
17	—	128 07-1K	鉢38	110塊	上階器	杯A	40%	候鳥II~Ⅳ期	16.7	(6.9)	平	良	内:1.35~6 外:1.35~6	内:1.35~6 外:1.35~6	外:表面磨滅・付着物不明
17	129 07-1K	鉢38	110塊	上階器	高杯	80%	候鳥II~Ⅳ期	16.7	11.8	平	やや良	内:1.07~8 外:1.07~8	内:1.07~8 外:1.07~8	外:表面磨滅・付着物不明	
17	—	130 07-1K	鉢38	110塊	上階器	高杯	10%	候鳥II~Ⅳ期	(18.2)	(4.7)	良	内:2.25~8 外:2.25~8	内:2.25~8 外:2.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す	
17	—	131 07-1K	鉢38	110塊	上階器	高杯脚部	40%	候鳥II~Ⅳ期	11.0	(5.9)	良	内:1.17~5 外:1.17~5	内:1.17~5 外:1.17~5	脚部表面削りを残す	
17	132 07-1K	鉢38	110塊	上階器	差	11.0	6.0%	候鳥II~Ⅳ期	11.2	(4.0)	苦	良	内:1.17~5 外:1.17~5	内:1.17~5 外:1.17~5	外:表面磨滅・付着物を残す
17	—	133 07-1K	鉢38	110塊	上階器	差	10%	候鳥II~Ⅳ期	(14.2)	(4.5)	苦	良	内:1.07~5 外:1.07~5	内:1.07~5 外:1.07~5	外:表面磨滅・付着物を残す
17	134 07-1K	鉢38	110塊	上階器	差	95%	候鳥II~Ⅳ期	8.6	14.9	苦	良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す	
17	—	135 07-1K	鉢38	110塊	上階器	差	50%	候鳥II~Ⅳ期	(23.3)	3.9	良	内:2.25~8 外:2.25~8	内:2.25~8 外:2.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す	
17	136 07-1K	鉢38	110塊	上階器	差	80%	候鳥II~Ⅳ期	20.4	4.2	やや苦	良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す	
17	—	137 07-1K	鉢38	110塊	上階器	差?	10%	候鳥II~Ⅳ期	(24.2)	(6.0)	苦	良	内:1.07~8 外:1.07~8	内:1.07~8 外:1.07~8	外:表面磨滅・付着物を残す
17	—	138 07-1K	鉢38	110塊	上階器	差A	5%	候鳥II~Ⅳ期	(20.8)	(5.9)	良	内:2.25~8 外:2.25~8	内:2.25~8 外:2.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す	
18	—	139 07-1K	鉢38	110塊	上階器	差	9%	候鳥II~Ⅳ期	(40.0)	(7.2)	良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す	
18	—	140 07-1K	鉢38	110塊	上階器	差?	5%	候鳥II~Ⅳ期	(23.6)	(5.6)	やや苦	良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す
18	—	141 07-1K	鉢38	110塊	上階器	差B	5%	候鳥II~Ⅳ期	—	(2.5)	2m~1mm の間	良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す
18	—	142 07-1K	鉢38	110塊	上階器	把手	—	候鳥II~Ⅳ期	(5.5)	(7.2)	苦	良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す
18	—	143 07-1K	鉢38	110塊	上階器	把手	—	候鳥II~Ⅳ期	(6.0)	(7.0)	苦	良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す
18	—	144 07-1K	鉢38	110塊	上階器	把手?	—	候鳥II~Ⅳ期	9.0	(2.0)	延灰岩	—	—	—	—
18	22	145 01-2K	鉢38	110塊	土製品	觸口	40%	候鳥II~Ⅳ期	(2.5)	2m~1mm の間	やや苦	良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す
18	—	146 07-1K	鉢38	110塊	木器	漆付合輪?	—	候鳥II~Ⅳ期	—	(4.0)	延灰岩	—	—	—	—
19	—	147 07-1K	鉢38	100塊	上階器	差	15%	候鳥II~Ⅳ期	(29.5)	(9.3)	苦	良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す
23	—	148 07-1K	鉢38	239上块	漆器	杯G	40%	候鳥II~Ⅳ期	(8.6)	3.4	苦	良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す
23	—	149 07-1K	鉢38	239上块	漆器	杯H	20%	候鳥II~Ⅳ期	19.6	3.3	苦	やや良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す
23	—	150 07-1K	鉢38	239上块	漆器	杯H?	70%	候鳥II~Ⅳ期	20.6	3.5	苦	良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す
23	—	151 07-1K	鉢38	239上块	漆器	羽茎	100%	候鳥II~Ⅳ期	8.95	3.1	苦	良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す
23	—	152 07-1K	鉢38	239上块	漆器	杯C	50%	候鳥II~Ⅳ期	(10.4)	3.4	やや苦	良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す
23	—	153 07-1K	鉢38	239上块	漆器	漆付土製品	20%	候鳥II~Ⅳ期	(26.0)	(4.9)	やや苦	良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す
23	—	154 07-1K	鉢38	239上块	漆器	杯C	60%	候鳥II~Ⅳ期	(12.1)	3.6	やや苦	良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す
23	—	155 07-1K	鉢38	239上块	漆器	杯C	75%	候鳥II~Ⅳ期	(11.6)	2.7	やや苦	良	内:1.07~8 外:1.07~8	内:1.07~8 外:1.07~8	外:表面磨滅・付着物を残す
23	—	156 07-1K	鉢38	239上块	漆器	杯C	25%	候鳥II~Ⅳ期	(21.8)	—	—	良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す
23	—	157 07-1K	鉢38	239上块	漆器	羽茎	10%	候鳥II~Ⅳ期	(22.0)	(5.3)	苦	良	内:1.25~8 外:1.25~8	内:1.25~8 外:1.25~8	外:表面磨滅・付着物を残す
23	—	158 07-1K	鉢38	239上块	漆器	差	20%	候鳥II~Ⅳ期	(18.8)	(3.2)	やや苦	良	内:1.07~8 外:1.07~8	内:1.07~8 外:1.07~8	外:表面磨滅・付着物を残す
23	—	159 07-1K	鉢38	239上块	漆器	差	5%	候鳥II~Ⅳ期	—	(3.0)	苦	良	内:1.07~8 外:1.07~8	内:1.07~8 外:1.07~8	外:表面磨滅・付着物を残す

表6 遺物観察表(6)

場所	層級	層級 番号	層級 番号	遺物面 層位	出土場所	遺物名	器種	形状 (単)	時期	口径 (cm)	深さ (cm)	施土	施成	内面	外面	断面	備考
23	-	160	07-1K	第3回	249上	上部	把手	不明	候鳥II-Ⅲ期	-	(6.9)	今や窓	やや良	16.1	16VHS.2	内外面ハケメ施ナデ	
23	21-2	161	07-1K	第3回	249上	上部	候鳥土器品	-	候鳥II-Ⅲ期	1.2	(3.1)	今や窓	良	-	16VHS.1	内外面ハケメ施ナデ	
23	21-2	162	07-1K	第3回	249上	上部	候鳥土器品	-	候鳥II-Ⅲ期	1.7	(3.2)	今や窓	良	-	7.3YVS.6	生漆等各折り出しる	
23	-	163	07-1K	第3回	249上	上部	ガラス小玉・ 筒型	3%>	候鳥II-Ⅲ期	2.7	0.9	今や窓	良	-	7.3YVS.6	内側面、縁側面に施ナデ	
23	-	164	07-1K	第3回	249上	上部	ガラス小玉・ 筒型	5%>	候鳥II-Ⅲ期	5.0	1.0	今や窓	良	-	7.3YVS.4	内側面、縁側面に施ナデ	
23	21-1	165	07-1K	第3回	249上	上部	ガラス小玉・ 筒型	20%	候鳥II-Ⅲ期	10.0	1.1	今や窓	良	-	7.3YVS.4	内側面、縁側面に施ナデ	
23	19	166	07-1K	第3回	249上	上部	芯部	-	候鳥II-Ⅲ期	16.0	0.9	今や窓	良	-	7.3YVS.4	内側面、縁側面に施ナデ	
23	-	167	07-1K	第3回	249上	石器	砾石	不明	候鳥II-Ⅲ期	2.7	0.5	砾片(岩) (鉄)頭	一	-	-	1.2長さ(31)	
24	-	168	01-2K	第3回	460上	上部	陶器	HG#	候鳥Ⅱ	(8.0)	(2.3)	砾片(岩) (鉄)頭	一	-	7.3YVS.1	鉄頭片(岩)作り出す	
24	-	169	07-1K	第3回	102上	上部	陶器	HG#	候鳥Ⅱ	7.6	3.1	砾片(岩) (鉄)頭	良	16.1	16VHS.1	ツバミ部欠損	
24	-	170	07-1K	第3回	102上	上部	陶器	HG	候鳥Ⅱ	(18.0)	(4.7)	今や窓	やや良	16.1	16VHS.1	天井坪平坦一定方向のナダ	
24	-	171	01-2K	第3回	113上	上部	陶器	HG#	候鳥Ⅱ	1.5%	0.9	砾片(岩) (鉄)頭	良	16.1	16VHS.1	天井坪平坦一定方向のナダ	
24	-	172	01-2K	第3回	113上	上部	陶器	HG#	候鳥Ⅱ	1.1	0.9	砾片(岩) (鉄)頭	良	16.1	16VHS.1	天井坪平坦一定方向のナダ	
24	-	173	01-2K	第3回	113上	上部	陶器	HG	候鳥Ⅱ	20%	0.9	砾片(岩) (鉄)頭	良	16.1	16VHS.1	天井坪平坦一定方向のナダ	
24	-	174	07-1K	第3回	113上	上部	陶器	HG	候鳥Ⅱ	80%	0.9	砾片(岩) (鉄)頭	良	16.1	16VHS.1	天井坪平坦一定方向のナダ	
24	-	175	07-1K	第3回	113上	上部	陶器	HG	候鳥Ⅱ	60%	0.8	砾片(岩) (鉄)頭	良	16.1	16VHS.1	天井坪平坦一定方向のナダ	
24	-	176	07-1K	第3回	113上	上部	陶器	HG#	候鳥Ⅱ	20%	1.1	砾片(岩) (鉄)頭	良	16.1	16VHS.1	天井坪平坦一定方向のナダ	
24	-	177	07-1K	第3回	113上	上部	陶器	HG#	候鳥Ⅱ	-	砾片(岩) (鉄)頭	良	-	-	-	一概に欠き?	
24	21-2	178	07-1K	第3回	112上	上部	候鳥土器品	-	候鳥Ⅱ	2.1	(0.2)	砾片(岩) (鉄)頭	良	16.1	16VHS.1	天井坪平坦一定方向のナダ	
24	-	179	07-1K	第3回	240上	上部	陶器	HG#	候鳥Ⅱ	20%	0.9	砾片(岩) (鉄)頭	良	16.1	16VHS.1	天井坪平坦一定方向のナダ	
24	-	180	07-1K	第3回	240上	上部	陶器	HG#	候鳥Ⅱ	30%	0.9	砾片(岩) (鉄)頭	良	16.1	16VHS.1	天井坪平坦一定方向のナダ	
24	-	181	07-1K	第3回	249上	上部	陶器	HG#	候鳥Ⅱ	25%	0.9	砾片(岩) (鉄)頭	良	16.1	16VHS.1	天井坪平坦一定方向のナダ	
24	-	182	07-1K	第3回	247上	上部	陶器	HG	候鳥Ⅱ	20%	0.9	砾片(岩) (鉄)頭	良	16.1	16VHS.1	天井坪平坦一定方向のナダ	
24	21-1	183	07-1K	第3回	249上	上部	ガラス小玉・ 筒型	3%	候鳥Ⅱ	5.4	0.95	砾片(岩) (鉄)頭	良	16.1	16VHS.1	天井坪平坦一定方向のナダ	
24	21-1	184	07-1K	第3回	249上	上部	ガラス小玉・ 筒型	10%	候鳥Ⅱ	7.8	1.2	砾片(岩) (鉄)頭	良	16.1	16VHS.1	天井坪平坦一定方向のナダ	
24	-	185	07-1K	第3回	460上	上部	把手	HG#	候鳥Ⅱ	30%	候鳥Ⅱ	(0.5)	(3.1)	良	16.1	16VHS.1	天井坪平坦一定方向のナダ
24	21-2	186	07-1K	第3回	465上	上部	把手	HG#	候鳥Ⅱ	1.85	(1.95)	砾片(岩) (鉄)頭	良	16.1	16VHS.1	天井坪平坦一定方向のナダ	
24	-	187	07-1K	第3回	247上	上部	把手	HG#	候鳥Ⅱ	5.0	1.1	砾片(岩) (鉄)頭	良	16.1	16VHS.1	天井坪平坦一定方向のナダ	
24	-	188	07-1K	第3回	247上	上部	手鉤	HG#	候鳥Ⅱ	-	1.2	砾片(岩) (鉄)頭	良	-	-	一概に欠き?	
24	-	189	07-1K	第3回	247上	上部	手鉤	HG#	候鳥Ⅱ	1.7	(1.1)	砾片(岩) (鉄)頭	良	-	-	一概に欠き?	
24	21-2	190	07-1K	第3回	247上	上部	把手	HG#	候鳥Ⅱ	1.6	(1.1)	砾片(岩) (鉄)頭	良	-	-	一概に欠き?	

表 7 遺物観察表(7)

場所	層級	層面	遺物名	層級	遺物名	層級	遺物名	層級	遺物名	層級	遺物名	層級	遺物名	層級	遺物名
24 — 191 07-1区	第3回	207柱	焼土器皿	—	焼土器皿	—	焼土器皿	—	焼土器皿	—	焼土器皿	—	焼土器皿	—	焼土器皿
24 — 192 07-1区	第3回	106柱	土器	要	70%	焼鳥II期	(16.4)	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.3	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.3
32 — 193 07-1区	B回	172柱穴	土器	C-	40%	焼鳥II期	(9.6)	土器	30.6%	焼鳥II期	10YK7.3	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.3
32 — 194 01-2区	B回	25EP2	土器	高杯脚器	40%	焼鳥II期	(13.2)	土器	5.8%	焼鳥II期	10YK7.3	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.4
32 — 195 07-1区	B回	141柱穴	燒土器	H-G 迹	20%	焼鳥II期	(9.0)	土器	25.3%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
32 — 196 07-1区	B回	16柱穴	土器	要	3%	焼鳥II期	(16.6)	土器	37.0%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
32 — 197 07-1区	B回	300柱穴	土器	C	3%	焼鳥II期	(8.8)	土器	33.3%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
32 — 198 07-1区	B回	269柱穴	土器	H-G 迹	15%	焼鳥II期	(14.2)	土器	3.9%	土器	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
32 21- 199 07-1区	B回	252柱穴	土器	焼土器皿	—	焼鳥II期	(5.3)	土器	5.3%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
32 — 200 07-1区	B回	257柱穴	土器	焼土器皿	—	焼鳥II期	(9.6)	土器	25.3%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
32 21-2 201 07-1区	B回	308柱穴	土器	焼土器皿	—	焼鳥II期	(16)	土器	10.5%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
32 21-2 202 07-1区	B回	301柱穴	土器	焼土器皿	—	焼鳥II期	(16)	土器	10.5%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
32 21-2 203 07-1区	B回	252柱穴	土器	焼土器皿	—	焼鳥II期	(16)	土器	10.5%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
32 21-2 204 07-1区	B回	304柱穴	土器	焼土器皿	—	焼鳥II期	(16)	土器	10.5%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
32 — 205 07-1区	B回	306柱穴	土器	ガラス小豆、 焼土器皿	5.6%	焼鳥II期	(11)	土器	1.1%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
32 21-1 206 07-1区	B回	257柱穴	土器	ガラス小豆、 焼土器皿	10%	焼鳥II期	(7.8)	土器	1.3%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
32 — 207 07-1区	B回	309柱穴	土器	—	—	焼鳥II期	(21.8)	土器	7.7%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
32 — 208 07-1区	B回	126柱穴	土器	—	—	焼鳥II期	(7.1)	土器	13.4%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
32 — 209 07-1区	B回	203柱穴	土器	—	—	焼鳥II期	(9.4)	土器	11.1%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
32 20 210 07-1区	B回	119柱穴	木製	柱	—	焼鳥II期	(12.6)	土器	10.5%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
32 20 211 07-1区	B回	177柱穴	木製	柱	—	焼鳥II期	(15.2)	土器	5.6%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
34 — 212 07-1区	B回	202柱穴	竹竿	—	—	焼鳥II期	(8.6)	土器	24.4%	土器	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
34 — 213 07-1区	B回	207柱	土器	C	45%	焼鳥II期	(12.7)	土器	36%	土器	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
34 — 214 07-1区	B回	267柱	土器	—	—	焼鳥II期	(1.5)	土器	5.1%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
34 — 215 07-1区	B回	267柱	土器	要	20%	焼鳥II期	(32)	土器	58.3%	土器	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
34 — 216 01-2区	B回	133萬	漆器	平盤	10%	焼鳥II期	(5.9)	土器	5.8%	土器	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
34 — 217 07-1区	B回	136萬	土器	鉢	80%	焼鳥II期	(8.2)	土器	39%	土器	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
34 — 218 01-2区	B回	17萬	土器	骨付皿	40%	焼鳥II期	(4.0)	土器	23.0%	土器	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
34 — 219 01-2区	B回	26萬	土器	C	60%	焼鳥II期	(16.1)	土器	53.0%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
34 — 220 01-2区	B回	19萬	土器	H-G 付	90%	焼鳥II期	(9.4)	土器	4.1%	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2
34 — 221 01-2区	B回	19萬	漆器	H-G 付	—	—	—	土器	—	今や類	10YK7.2	土器	10.5%	焼鳥II期	10YK7.2

表 8 遺物観察表 (8)

件名	目録 番号	種類	調査面	遺物面	出土場所	遺物名	器種	形状	表面状況	時間	高さ	幅	施成	内面	外側	断面	備考
34	—	222 07-1K	砂面	138面	上端部	也	H.C.	筒形	燒毛口期	(12.0)	(61.5)	直	良	1.5-5.5cm 10H47	1.5-5.5cm 10H47	内面斜子テ保有 内面斜子テ保有	
34	—	223 07-1K	砂面	227面	上端部	也	H.C.	筒形	燒毛口期	(9.5)	(3.7)	やや粗	良	1.5-5.5cm 10H47	1.5-5.5cm 10H47	内面斜子テ 内面斜子テ	
34	—	224 07-1K	砂面	227面	底部器	H.G.	筒形	筒形	燒毛口期	10.9	(3.2)	やや粗 合掌	やや粗 合掌	内面斜子テ 内面斜子テ	内面斜子テ 内面斜子テ	内面斜子テ保有	
34	—	225 07-1K	砂面	227面	上端部	也	H.G.	筒形	燒毛口期	—	(17.7)	直 直面合掌	良	10Y38.1	10Y38.1	体外斜子テ 手ナタテアリ 前面ナナメアリ	
36	15-2 226 07-1K	砂面	171面	张忠器	H.G.	筒形	筒形	燒毛口期	8.2	(21)	直	良	青釉 青釉	青釉 青釉	5Y96.1 5M5.1	5Y96.1 5M5.1	
36	15-2 227 07-1K	砂面	171面	张忠器	H.G.	筒形	筒形	燒毛口期	9.1	3.2	直	良	青釉 青釉	青釉 青釉	5M5.1 5M5.1	5M5.1 5M5.1	
36	15-2 228 07-1K	砂面	171面	张忠器	H.G.	筒形	筒形	燒毛口期	(9.6)	—	直	良	青釉 青釉	青釉 青釉	5M5.1 5M5.1	5M5.1 5M5.1	
36	15-2 229 07-1K	砂面	171面	张忠器	H.G.	筒形	筒形	燒毛口期	10.4	8.25	直	良	灰釉 灰釉	灰釉 灰釉	2M77.2 2M77.2	2M77.2 2M77.2	
36	15-2 230 07-1K	砂面	171面	张忠器	H.G.	筒形	筒形	燒毛口期	12.0	(11.8)	やや粗	良	灰釉 灰釉	灰釉 灰釉	10Y38.2 10Y38.2	10Y38.2 10Y38.2	
36	15-2 231 07-1K	砂面	171面	张忠器	H.G.	筒形	筒形	燒毛口期	8.5	14.6	直	良	1.5-5.5cm 7.5Y38.7	1.5-5.5cm 7.5Y38.7	内面斜子テ 外腹斜子テ		
36	15-2 232 07-1K	砂面	171面	张忠器	H.G.	筒形	筒形	燒毛口期	—	(8.7)	直	良	1.5-5.5cm 7.5Y38.6	1.5-5.5cm 7.5Y38.6	内面斜子テ 外腹斜子テ		
36	—	233 07-1K	砂面	171面	张忠器	H.G.	筒形	筒形	燒毛口期	(10.0)	(5.5)	直	良	明治期 明治期	明治期 明治期	内面斜子テ 内面斜子テ	
36	15-2 234 07-1K	砂面	171面	张忠器	H.G.	筒形	筒形	燒毛口期	12.3	4.5	直	良	昭和期 昭和期	昭和期 昭和期	内面斜子テ 内面斜子テ		
36	—	235 07-1K	砂面	171面	张忠器	H.G.	筒形	筒形	燒毛口期	(10.6)	3.4	直	やや粗 合掌	10Y38.2	10Y38.2	内面斜子テ 内面斜子テ	
36	—	236 07-1K	砂面	171面	张忠器	H.G.	筒形	筒形	燒毛口期	(22.5)	(4.1)	直	良	1.5-5.5cm 7.5Y38.6	1.5-5.5cm 7.5Y38.6	外腹斜子テ 外腹斜子テ	
26	—	237 07-1K	砂面	171面	手柄	H.C.	筒形	筒形	燒毛口期	(5.0)	(5.9)	20cm-の鉢身 20cm-の鉢身	良	昭和期 昭和期	昭和期 昭和期	内面斜子テ 内面斜子テ	
26	—	238 07-1K	砂面	161土丸	手柄器	H.C.	筒形	筒形	焼毛口期	(5.5)	(5.5)	20cm-の鉢身 20cm-の鉢身	良	昭和期 昭和期	昭和期 昭和期	内面斜子テ 内面斜子テ	
26	—	239 07-1K	砂面	171面	手柄器	H.C.	筒形	筒形	焼毛口期	(17.4)	(18.2)	直	良	昭和期 昭和期	昭和期 昭和期	内面斜子テ 内面斜子テ	
36	240 07-1K	砂面	171面	未型	直折柄	H.C.	筒形	筒形	焼毛口期	(30.0)	(4.1)	直	良	1.5-5.5cm 7.5Y38.6	1.5-5.5cm 7.5Y38.6	内面斜子テ 内面斜子テ	
36	19 241 07-1K	砂面	171面	未型	直折柄	H.C.	筒形	筒形	焼毛口期	—	—	直	良	昭和期 昭和期	昭和期 昭和期	内面斜子テ 内面斜子テ	
36	19 242 07-1K	砂面	171面	未型	直折柄	H.C.	筒形	筒形	焼毛口期	(24.0)	(4.0)	直	良	昭和期 昭和期	昭和期 昭和期	内面斜子テ 内面斜子テ	
36	22 243 07-1K	砂面	171面	未型	直折柄	H.C.	筒形	筒形	焼毛口期	—	—	直	良	昭和期 昭和期	昭和期 昭和期	内面斜子テ 内面斜子テ	
36	22 244 07-1K	砂面	171面	未型	直折柄	H.C.	筒形	筒形	焼毛口期	—	—	直	良	昭和期 昭和期	昭和期 昭和期	内面斜子テ 内面斜子テ	
36	—	245 07-1K	砂面	171面	未型	直折柄	H.C.	筒形	焼毛口期	—	—	直	良	昭和期 昭和期	昭和期 昭和期	内面斜子テ 内面斜子テ	
38	16-1 246 07-1K	砂面	137上丸	张忠器	H.G.	筒形	筒形	燒毛口期	10.2	3.3	やや粗	良	10Y38.7	10Y38.7	内面斜子テ保有		
38	16-1 247 07-1K	砂面	137上丸	张忠器	H.G.	筒形	筒形	燒毛口期	11.5	3.7	直	良	16.5cm 16.5cm	16.5cm 16.5cm	内面斜子テ保有		
38	16-1 248 07-1K	砂面	137上丸	张忠器	H.G.	筒形	筒形	燒毛口期	10.8	3.6	直	良	16.5cm 16.5cm	16.5cm 16.5cm	内面斜子テ保有		
38	16-1 249 07-1K	砂面	137上丸	张忠器	H.G.	筒形	筒形	焼毛口期	9.2	3.2	直	良	10Y38.2	10Y38.2	内面斜子テ保有		
38	16-1 250 07-1K	砂面	137上丸	张忠器	H.G.	筒形	筒形	焼毛口期	10.0	3.5	やや粗	良	昭和期 昭和期	昭和期 昭和期	内面斜子テ保有		
38	16-1 251 07-1K	砂面	137上丸	张忠器	H.G.	筒形	筒形	焼毛口期	8.7	3.0	やや粗 合掌	良	昭和期 昭和期	昭和期 昭和期	内面斜子テ保有		
38	—	254 07-1K	砂面	137上丸	张忠器	H.C.	筒形	筒形	焼毛口期	(9.1)	3.2	直	良	昭和期 昭和期	昭和期 昭和期	内面斜子テ保有	
38	16-2 255 07-1K	砂面	137上丸	张忠器	H.C.	筒形	筒形	焼毛口期	10.5	3.1	やや粗 合掌	良	1.5-5.5cm 10Y38.2	1.5-5.5cm 10Y38.2	内面斜子テ 内面斜子テ		

表 9 遺物觀察表 (9)

地図 番号	図版 番号	層	測量区	測量面	測量面 番号	出土場所	遺物名	種類	保存状 態(%)	時期	口徑 (cm)	深さ (cm)	施土	外側	裏面	備考	
38	16-2 256	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホC	90%	候鳥Ⅱ期	99.6	3.25	青	直筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.3	1.5cm-2.5cm 10Y17.3	青	内側候鳥丸文か?	
38	16-2 257	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホC	95%	候鳥Ⅱ期	10.9	3.6	青	直筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.6	1.5cm-2.5cm 10Y17.6	青	内側候鳥丸文掌形のため識別不明	
38	16-2 258	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホC	90%	候鳥Ⅱ期	12.1	3.7	青	直筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.6	1.5cm-2.5cm 10Y17.6	青	内側候鳥丸文掌形のため識別不明	
38	16-2 259	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホC	95%	候鳥Ⅱ期	10.7	4.0	青	直筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.4	1.5cm-2.5cm 10Y17.4	青	内側候鳥丸文掌形文か?	
38	-	260	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホC	40%	候鳥Ⅱ期	(12.4)	(3.95)	青	直筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.4	1.5cm-2.5cm 10Y17.4	青	内側候鳥丸文掌形のため識別不明
38	16-2 261	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホC	95%	候鳥Ⅱ期	11.8	3.95	青	直筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.4	1.5cm-2.5cm 10Y17.4	青	内側候鳥丸文掌形文、体部斜切特徴文	
38	16-2 262	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホA	80%	候鳥Ⅱ期	16.4	5.6	少偏合	筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.3	1.5cm-2.5cm 10Y17.3	青	内側候鳥丸文	
38	-	263	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホA	50%	候鳥Ⅱ期	(16.6)	4.5	青	直筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.3	1.5cm-2.5cm 10Y17.3	青	内側候鳥丸文、体部斜切特徴文、内面凹凸み
38	16-2 264	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホC	70%	候鳥Ⅱ期	16.0	10.6	少偏合	筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.4	1.5cm-2.5cm 10Y17.4	青	内側候鳥丸文、体部斜切特徴文、内面凹凸み	
38	-	265	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホC	50%	候鳥Ⅱ期	(10.3)	(8.7)	少偏合	筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.3	1.5cm-2.5cm 10Y17.3	青	内側候鳥丸文掌形文を残す
38	-	266	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホC	20%	候鳥Ⅱ期	(11.0)	(5.9)	青	直筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.2	1.5cm-2.5cm 10Y17.2	青	内側候鳥丸文掌形文、体部斜切特徴文
38	16-2 267	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホC	25%	候鳥Ⅱ期	(13.4)	(8.95)	青	直筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.2	1.5cm-2.5cm 10Y17.2	青	内側候鳥丸文掌形文、体部斜切特徴文	
38	-	268	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホC	35%	候鳥Ⅱ期	(8.1)	(3.1)	少偏合	筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.4	1.5cm-2.5cm 10Y17.4	青	内側候鳥丸文掌形のため識別不明
38	-	269	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホC	10%	候鳥Ⅱ期	(12.8)	(12.6)	少偏合	筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.3	1.5cm-2.5cm 10Y17.3	青	内側候鳥丸文掌形文
38	-	270	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホC	35%>	候鳥Ⅱ期	-	-	少偏合	筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.4	1.5cm-2.5cm 10Y17.4	青	上端に内凹溝
38	16-1 271	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホC	30%	候鳥Ⅱ期	(20.4)	(5.9)	青	直筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.3	1.5cm-2.5cm 10Y17.3	青	体部前面内凹溝	
38	-	272	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホC	20%	候鳥Ⅱ期	(26.0)	5.0	偏	筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.3	1.5cm-2.5cm 10Y17.3	青	外側斜面にS字溝
38	-	273	07-1K	第4面	137上丸	上丸器	ホC	55%>	候鳥Ⅱ期	(9.9)	(9.1)	少偏合	筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.2	1.5cm-2.5cm 10Y17.2	青	内側斜面にS字溝
40	-	274	01-2K	第3面	298東上丸	張豆器	ホG並	20%	候鳥Ⅱ期	(7.2)	(1.9)	青	直筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.1	1.5cm-2.5cm 10Y17.1	青	内側斜面にS字溝
40	-	275	01-2K	第3面	298東上丸	張豆器	ホG並	50%	候鳥Ⅱ期	(8.2)	(2.2)	直筒-2.5cm 1.5cm-2.5cm 10Y17.1	直筒-2.5cm 1.5cm-2.5cm 10Y17.1	青	内側斜面にS字溝		
40	-	276	01-2K	第3面	298東上丸	張豆器	ホG並	40%	候鳥Ⅱ期	(8.3)	(2.2)	直筒-2.5cm 1.5cm-2.5cm 10Y17.1	直筒-2.5cm 1.5cm-2.5cm 10Y17.1	青	内側斜面にS字溝		
40	-	277	01-2K	第3面	298東上丸	張豆器	ホG並	95%	候鳥Ⅱ期	7.6	3.6	直筒-2.5cm 1.5cm-2.5cm 10Y17.1	直筒-2.5cm 1.5cm-2.5cm 10Y17.1	青	内側斜面にS字溝		
40	17	279	01-2K	第3面	298東上丸	張豆器	ホG並	95%	候鳥Ⅱ期	(9.4)	(2.7)	直筒-2.5cm 1.5cm-2.5cm 10Y17.1	直筒-2.5cm 1.5cm-2.5cm 10Y17.1	青	内側斜面にS字溝		
40	17	280	01-2K	第3面	298東上丸	張豆器	ホH並	95%	候鳥Ⅱ期	9.8	3.2	直筒	直筒	1.5cm-2.5cm 10Y17.1	1.5cm-2.5cm 10Y17.1	青	内側斜面にS字溝
40	-	281	01-2K	第3面	298東上丸	張豆器	ホH並	15%	候鳥Ⅱ期	(11.6)	(2.9)	直筒-2.5cm 1.5cm-2.5cm 10Y17.1	直筒-2.5cm 1.5cm-2.5cm 10Y17.1	青	内側斜面にS字溝		
40	17	282	01-2K	第3面	298東上丸	張豆器	ホH並	50%	候鳥Ⅱ期	(10.4)	(3.2)	直筒-2.5cm 1.5cm-2.5cm 10Y17.1	直筒-2.5cm 1.5cm-2.5cm 10Y17.1	青	内側斜面にS字溝		
40	17	283	01-2K	第3面	298東上丸	張豆器	ホH並	100%	候鳥Ⅱ期	9.25	3.2	直筒-2.5cm 1.5cm-2.5cm 10Y17.1	直筒-2.5cm 1.5cm-2.5cm 10Y17.1	青	内側斜面にS字溝		
40	-	284	01-2K	第3面	298東上丸	張豆器	ホH並	20%	候鳥Ⅱ期	(9.2)	3.0	直筒-2.5cm 1.5cm-2.5cm 10Y17.1	直筒-2.5cm 1.5cm-2.5cm 10Y17.1	青	内側斜面にS字溝		

表10 遺物観察表(10)

件名	出土地	層面	遺物区	遺物面	遺物名	器種	保存状	時間	口徑	深さ	施底	内面	外面	裏面	備考	
番号	地番	番号	層位	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)		
40	17	285	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG合	80%	燒魚目	6.0	3.2	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	灰 N4	灰白 N3	
40	17	286	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG合	90%	燒魚目	9.2	(3.3)	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	灰 N6	灰 N6	
40	—	287	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG合	70%	燒魚目	(9.3)	3.6	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	青灰 N6.1	青灰 N36.1	
40	17	288	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG合	90%	燒魚目	9.8	3.2	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	明敷灰 50H7.1	明敷灰 50H7.1	
40	—	289	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG合	80%	燒魚目	9.6	3.5	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	青灰 N6.1	青灰 N6.1	
40	—	290	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG合	60%	燒魚目	(9.4)	3.5	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	灰 N6	外函テ記号あり	
40	17	291	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG合	70%	燒魚目	8.9	2.6	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	青灰 N6.1	青灰 N6.1	
40	—	292	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG合	40%	燒魚目	(8.6)	(3.4)	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	灰 N7	灰 N6	
40	—	293	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG合	40%	燒魚目	(9.4)	3.2	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	灰白 N8.1	灰白 N8.1	
40	17	294	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG合	100%	燒魚目	8.5	2.9	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	灰白 N7	灰白 N7	
40	17	295	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG合	100%	燒魚目	8.75	3.2	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	明敷灰 10H6.1	明敷灰 10H6.1	
40	17	296	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG合	100%	燒魚目	8.9	2.8	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	灰白 N7	外函テ記号あり	
40	17	297	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	—	90%	筒	(9.9)	2.0	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	灰 N6	面底一体化回織文名添	
40	17	298	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	—	20%	燒魚目	(8.2)	(6.6)	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	灰白 N7	外函テ記号あり	
40	—	299	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	—	不明	20%	(19.4)	(5.8)	今や瓶	5M6.1	5M6.1	外函テ記号あり	
41	—	300	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG	20%	燒魚目	(8.0)	(3.1)	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	10H5.7	10H5.7	
41	18	301	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG	90%	燒魚目	11.3	3.5	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	10M4.4	10M4.4	
41	—	302	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG	10%	燒魚目	(13.6)	(2.4)	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	10M7.4	10M7.4	
41	—	303	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG	40%	燒魚目	(12.2)	3.9	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	10M7.3	10M7.3	
41	—	304	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG	20%	燒魚目	(12.2)	3.7	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	10M7.3	10M7.3	
41	—	305	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG	25%	燒魚目	(9.6)	(2.7)	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	10M7.2	10M7.2	
41	—	306	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG	15%	燒魚目	(10.8)	(3.1)	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	10M7.2	10M7.2	
41	18	307	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG	40%	燒魚目	(12.4)	3.6	今や瓶	10Y8.2	10Y8.2	内函テ記号あり	
41	—	308	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG	50%	燒魚目	(12.5)	3.8	筒	10Y8.2	10Y8.2	内函テ記号あり	
41	—	309	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG	50%	燒魚目	(12.2)	3.9	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	10Y8.1	10Y8.1	内函テ記号あり
41	—	310	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG	20%	燒魚目	(14.8)	(4.8)	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	10Y8.3	10Y8.3	内函テ記号あり
41	18	311	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	HG	50%	燒魚目	(17.3)	5.4	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	10Y8.2	10Y8.2	内函テ記号あり
41	—	312	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	鉢	5%	燒魚目	(19.7)	(7.3)	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	10Y8.3	10Y8.3	内函テ記号あり
41	—	313	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	鉢	5%	燒魚目	(22.8)	(4.9)	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	10Y8.2	10Y8.2	内函テ記号あり
41	—	314	01-24K	0330	298東上丸	瓦器	鉢	5%	燒魚目	(26.0)	(6.0)	筒形-75度G- F-1-2-3合	良	10Y8.1	10Y8.1	内函テ記号あり

表11 遺物観察表(11)

地図 番号	団体 番号	城壁 番号	遺物 番号	遺物面 積(m <sup>2</sup> )	出土場所 遺物名	器種	形状 割合(%)	寸法 (mm)	高さ (mm)	施土 施成	内面	外面	断面	備考
41	—	315 01-2K	0380	298東上丸 土器部	瓦	10%>	候鳥Ⅱ期	(25.0) (6.6) [3m-の長石 色化した筒型 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y88.8 10Y88.7 10Y88.7	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
41	—	316 01-2K	0380	298東上丸 土器部	瓦	60%	候鳥Ⅱ期	(9.8) (7.7) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y88.3 10Y88.3 10Y88.3	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
41	—	317 01-2K	0380	298東上丸 土器部	瓦	13%	候鳥Ⅱ期	(12.5) (8.5) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y88.2 10Y88.2 10Y88.2	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
41	—	318 01-2K	0380	298東上丸 土器部	瓦	20%	候鳥Ⅱ期	(17.4) (5.4) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y88.6 10Y88.6 10Y88.6	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
41	18	319 07-1K	0380	298東上丸 土器部	瓦	—	候鳥Ⅱ期	(18.2) (10.0) (9.1) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y87.4 10Y87.4 10Y87.4	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
41	—	320 01-2K	0380	298東上丸 土器部	瓦	40%	候鳥Ⅱ期	(10.0) (8.0) (8.0) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y87.4 10Y87.4 10Y87.4	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
41	18	321 07-1K	0380	298東上丸 土器部	瓦	40%	候鳥Ⅱ期	(9.5) (8.0) (8.0) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y87.3 10Y87.3 10Y87.3	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
41	—	322 01-2K	0380	298東上丸 土器部	瓦	50%	候鳥Ⅱ期	(10.1) (8.5) (8.5) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y87.3 10Y87.3 10Y87.3	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
42	—	323 01-2K	0380	298東上丸 土器部	瓦	10%	候鳥Ⅱ期	(26.0) (7.5) (7.5) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y85.3 10Y85.3 10Y85.3	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
42	—	324 01-2K	0380	298東上丸 土器部	瓦	10%	候鳥Ⅱ期	—	(3.6) (3.6) (3.6) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y85.2 10Y85.2 10Y85.2	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ
42	—	325 01-2K	0380	298東上丸 土器部	瓦	5%>	候鳥Ⅱ期	(1.5) (1.5) (1.5) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y85.2 10Y85.2 10Y85.2	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
42	18	326 01-2K	0380	298東上丸 土器部	瓦	20%	候鳥Ⅱ期	(33.8) (19.7) (19.7) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y85.3 10Y85.3 10Y85.3	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
42	18	327 07-1K	0380	162上丸 土器部	瓦	30%	候鳥Ⅱ期	(26.5) (18.6) (18.6) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y85.4 10Y85.4 10Y85.4	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
44	—	328 01-2K	0380	5上丸 土器部	瓦H面	20%	候鳥Ⅱ期	(10.4) (3.0) (3.0) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y87.7 10Y87.7 10Y87.7	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
44	—	329 01-2K	0380	5上丸 土器部	瓦H面	95%	候鳥Ⅱ期	(7.8) (2.4) (2.4) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y86.8 10Y86.8 10Y86.8	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
44	—	330 07-1K	0380	131上丸 土器部	瓦	30%	候鳥Ⅱ期	(5.2) (3.6) (3.6) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y86.8 10Y86.8 10Y86.8	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
44	—	331 01-2K	0380	31上丸 土器部	HG	10%	候鳥Ⅱ期	(9.2) (2.5) (2.5) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y86.8 10Y86.8 10Y86.8	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
44	—	332 01-2K	0380	34上丸 土器部	HG	3%	候鳥Ⅱ期	(12.0) (3.9) (3.9) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y86.8 10Y86.8 10Y86.8	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
44	—	333 07-1K	0380	318上丸 土器部	HG	20%	候鳥Ⅱ期	(10.0) (4.0) (4.0) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y86.6 10Y86.6 10Y86.6	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
44	—	334 07-1K	0380	128上丸 土器部	HG	30%	候鳥Ⅱ期	(10.0) (3.3) (3.3) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y86.8 10Y86.8 10Y86.8	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
44	—	335 07-1K	0380	263上丸 土器部	HG	95%	候鳥Ⅱ期	(12.5) (3.9) (3.9) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y86.2 10Y86.2 10Y86.2	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
44	—	336 07-1K	0380	306上丸 土器部	HG	3%	候鳥Ⅱ期	(14.2) (4.2) (4.2) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y86.6 10Y86.6 10Y86.6	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
44	—	337 07-1K	0380	275上丸 土器部	HG	50%	候鳥Ⅱ期	(9.6) (3.0) (3.0) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y87.4 10Y87.4 10Y87.4	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
44	—	338 07-1K	0380	308上丸 土器部	HG	20%	候鳥Ⅱ期	—	(5.6) (3.6) (3.6) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y86.6 10Y86.6 10Y86.6	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ
44	—	339 01-2K	0380	4上丸 土器部	HG	10%	候鳥Ⅱ期	—	(12.5) (3.6) (3.6) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y86.1 10Y86.1 10Y86.1	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ
44	—	340 07-1K	0380	275上丸 土器部	HG	5%	候鳥Ⅱ期	(3.1) (3.8) (3.8) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y87.3 10Y87.3 10Y87.3	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
44	—	341 07-1K	0380	220上丸 土器部	HG	60%	候鳥Ⅱ期	(1.9) (7.9) (7.9) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y87.1 10Y87.1 10Y87.1	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
44	—	342 07-1K	0380	94上丸 土器部	HG	5%	候鳥Ⅱ期	(0.9) (1.0) (1.0) [3m-の長 筒型]	良	1.5-5cm 1.5-5cm 1.5-5cm	候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期 候鳥Ⅱ期	10Y87.4 10Y87.4 10Y87.4	外壁ナナ 外壁ナナ 外壁ナナ	
44	—	343 01-2K	0380	161上丸 土器部	HG	16.1%	候鳥Ⅱ期	—	—	—	—	—	—	内面ナナ

表12 遺物觀察表 (12)

地図	区分	番号	埋蔵区	遺構面	出土場所	遺物名	器種	保存状態	時期	口径 (cm)	高さ (cm)	施土	施底	内面	外面	備考	
44	—	341	07-11K	第1回	2291-36	土砂層	美	60%	桃鳥Ⅱ期	(12.4)	12.0	やや直 角	良	12.5×10.3 75YR7-1	長規 75YR7-2	体形規上平手子ハサケメ 外底ハサケメ	
47	14-2	345	01-21K	第5回	856b層	—	泥付土器	要	40%	供生前附	(21.4)	(21.0)	6段-の 内側石 合	良	明鏡灰 75YR4-2	明鏡灰 75YR4-3	口部端部開口 外底ハサケメ 底子
47	—	346	01-21K	第5回	411-塊	泥文土器	深鉢	10%	博文地附	(6.0)	(2.0)	6段-の 内側石 合	良	灰素面 10YR6.2	に点状痕 10YR7.2	に点状痕 内底ハサケメ	
47	—	347	07-11K	第6回	—	泥文土器	深鉢	5%>	博文地附	—	(4.9)	6段-の 内側石 合	やや良	12.5×10.3 75YR7-1	長規 75YR7-2	内底ナゴテ	
47	—	348	01-21K	第6回	—	泥付土器	直	5%>	供生前附	—	—	6段-の 内側石 合	良	明鏡灰 75YR7-2	明鏡灰 75YR7-2	外輪ハサケメ 内底ハサケメ	
47	—	349	01-21K	第5回	411-塊	泥文土器	深鉢	10%>	博文地附	—	(3.7)	6段-の 内側石 合	良	灰素面 10YR4.1	灰素面 75YR4-2	口部端部に付け目口 底子	
47	14-2	350	07-11K	第7回	—	泥付土器	直	5%>	供生前附	—	(5.1)	やや直 角	良	灰素面 10YR8.1	灰素面 75YR7-3	輪郭線付 内底ナゴテ	
47	—	351	01-21K	第7回	—	泥文土器	直	20%	博文地附	(15.6)	(4.7)	2段-の 内側石 合	良	浅灰 10YR7.3	浅灰 75YR6.4	河内-398式? 簋形 内底凹凸ナゴテ	
47	14-2	352	01-21K	第7回	—	泥文土器	深鉢	10%	博文地附	—	(13.5)	6段-の 内側石 合	良	12.5×10.3 10YR5.4	灰素面 10YR5.2	口部端部 内底凹凸ナゴテ 輪郭線付 内底凹凸ナゴテ	
47	14-2	353	01-21K	第7回	—	泥文土器	直	5%>	博文地附	—	—	6段-の 内側石 合	良	灰素面 75YR4-2	灰素面 75YR4-1	輪郭線付 内底凹凸ナゴテ 火炎痕	
47	—	354	01-21K	第7回	—	泥文土器	深鉢	5%>	博文地附	—	(2.4)	12.5×10.3 サヌカイト	良	灰素面 10YR4.2	灰素面 10YR4.1	口部端部 内底凹凸ナゴテ 輪郭線付 内底凹凸ナゴテ	
47	—	355	07-11K	第6回	855b層	—	石器	2段-の 内側石 合	—	博文地附?	(8.0)	(5.4)	6段-の 内側石 合	—	—	—	輪郭線付 内底凹凸ナゴテ
47	—	356	07-11K	第6回	855b層	—	石器	2段-の 内側石 合	—	博文地附?	(6.5)	(6.5)	6段-の 内側石 合	—	—	—	輪郭線付 内底凹凸ナゴテ
47	—	357	07-11K	第7回	855b層	—	石器	2段-の 内側石 合	—	博文地附?	(6.0)	(6.5)	6段-の 内側石 合	—	—	—	輪郭線付 内底凹凸ナゴテ
47	—	358	07-11K	第7回	—	石器	2段-の 内側石 合	—	博文地附?	(3.2)	(3.5)	6段-の 内側石 合	—	—	—	輪郭線付 内底凹凸ナゴテ	